



北海道大学大学院 消化器外科学分野 I

～教室年報：2015年～

Department of Gastroenterological Surgery I
Hokkaido University Graduate School of Medicine
Annual Report 2015





北海道大学大学院
消化器外科学分野 I
教授 武富 紹信

巻頭言

今年も教室年報を発刊する時期がやって参りました。私が北海道大学に赴任し3冊目の発刊となります。昨年1年間の教室の臨床・研究・教育の活動内容を振り返り、多くの方々のお世話になりながら少しずつ歩んできた成果を見直しているところです。十分に活動できた面があれば、まだまだ充実していないところもあり、教室を預かる身として大いに反省しています。

今回からは新しく学位取得者の記事の掲載をはじめました。外科医として苦勞しながらまとめた成果が学位論文として認められ、博士号を取得した7名の研究内容報告です。

当科では日本外科学会専門医試験の受験資格を満たす臨床経験をすませた全ての教室員に、大学院に進学し2～3年の研究生活を集中して行うよう奨励しています。後期臨床研修を終えた後になりますので、卒後7～8年目からの研究生活のはじまりとなります。外科医として自信を持ちつつある時期に一旦臨床の現場から離れることになるわけで、多くの若手が研究生活に入ることの不安や戸惑いを口にします。外科医にとり基礎研究の意義とは何なのでしょう？医学博士号の取得という大きな目的はあるものの、若手外科医にとって博士号よりも専門医取得の方が魅力的にうつるのは当然であり、大事な数年間を基礎研究のみに費やす意義を鮮明にしておかねばなりません。

外科医が研究生活をすべき最大の意義は「疾患や合併症についての課題を明らかにし解決するための一連の思考過程と検証方法を学ぶこと」にあると思います。一定期間、未解決のひとつの課題にじっくりと取り組み、解決方法を模索し、立証していくという作業過程を経験することは、我々外科医にとって学び、考えることの重要性を教えてください。医学的課題について系統的に「考え」「調べ」「実証し」「検証する」ことを学ぶ経験は、その後に遭遇する数多くの解決困難な臨床課題に直面したときに必ず役立つと思います。研究生活の前後で自身の臨床的解決能力が大きくステップアップしていることに気づくことでしょう。この経験こそが医学の進歩の原動力です。“Academic Surgeon”は大学よりも、むしろ医療の最前線にこそ必要であると信じています。

今回2015年教室年報を編纂するにあたりご協力いただいた教室員および同門の諸先輩方に、ここにあらためて御礼申し上げます。特に、編集委員長として多くの時間を費やし頑張ってくれた吉田雅君、副編集委員長の宮城久之君に心より感謝申し上げます。

“志”ある外科医が集まり、厳しいながらもさわやかな風の吹く外科教室を目指してこれからも努力してまいります。

(2015年2月29日)



contents

目次

巻頭言

目次

3 2015年教室紹介

- 4 2015年度 教職員役職一覧
- 7 2015年度 教室体制
- 8 2015年年間業績一覧
消化器外科 I・週間予定表
2015年ジャーナルクラブ
2015年M&Mカンファレンス

〈診療部門〉

- 10 肝胆膵グループ
- 14 移植グループ
- 18 消化管グループ
- 21 小児グループ

〈研究部門〉

- 24 リサーチ統括部長より
- 25 研究グループ紹介
 - 25 移植グループ
 - 26 保存グループ
 - 29 腫瘍(肝胆膵)グループ
 - 30 腫瘍(消化管)グループ
 - 31 小児グループ

〈留学生〉

- 34 国内留学
- 37 海外留学

43 〈2015年新入局員〉

45 〈2015年入局後期研修医〉

53 〈秘書・クラーク・実験助手〉

55 業績紹介(学会・論文・学位取得者・研究費一覧)

73 2015年の年表・年間行事

111 関連病院紹介

132 編集後記

2015年教室紹介

2015年教室紹介 / 組織構成・教室メンバー一覧表

■ 2015年度 教職員役職一覧

Faculty

大学教員

	Taketomi Akinobu 医学研究科/ 消化器外科学分野Ⅰ 教授 武富 紹信		Kamiyama Toshiya 医学研究科/ 消化器外科学分野Ⅰ 准教授 神山 俊哉		Shimamura Tsuyoshi 病院/ 臓器移植医療部 准教授 嶋村 剛		Takahashi Norihiko 病院/手術部 准教授 高橋 典彦
	Kamachi Hirofumi 病院/ 消化器外科Ⅰ 講師 蒲池 浩文		Kawamura Hideki 医学研究科/ 消化器外科学分野Ⅰ 特任講師 川村 秀樹		Yokoo Hideki 病院/消化器外科Ⅰ 助教 横尾 英樹		Yamashita Kenichiro 医学研究科/ 移植外科学講座 特任教授 山下健一郎
	Sakihama Hideyasu 病院/消化器外科Ⅰ 特任助教 崎浜 秀康		Fukai Moto 医学研究科/ 移植外科学講座 特任助教 深井 原		Homma Shigenori 病院/消化器外科Ⅰ 助教 本間 重紀		Honda Shohei 病院/消化器外科Ⅰ 助教 本多 昌平
	Shimokuni Tatsushi 病院/消化器外科Ⅰ 特任助教 下國 達志		Tsuruga Yosuke 医学研究科/ 消化器外科学分野Ⅰ 特任助教 敦賀 陽介		Orimo Tatsuya 医学研究科/ 医学教育推進センター 教育支援部 教育助教 折茂 達也		Goto Ryoichi 病院/消化器外科Ⅰ 特任助教 後藤 了一

Instructors

インストラクター

	Koshizuka Yasuyuki 病院/消化器外科 I 医員 腰塚 靖之		Wakayama Kenji 病院/消化器外科 I 医員 若山 顕治		Miyagi Hisayuki 病院/消化器外科 I 医員 宮城 久之		Kawamura Norio 病院/消化器外科 I 医員 川村 典生
	Yoshida Tadashi 病院/消化器外科 I 医員 吉田 雅		Zaitzu Masaaki 病院/消化器外科 I 医員 財津 雅昭		Shimada Shingo 病院/消化器外科 I 医員 島田 慎吾		

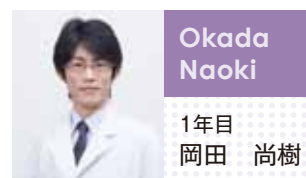
Residents

後期研修医

	Imaizumi Ken 病院/消化器外科 I 医員 今泉 健		Fujii Yuki 病院/消化器外科 I 医員 藤居 勇貴		Okumura Kazuyoshi 病院/消化器外科 I 医員 奥村 一慶		Sakamoto Saori 市立稚内病院/ 外科 医員 坂本 沙織
	Murata Ryohei 病院/消化器外科 I 医員 村田 竜平		Obuchi Keisuke 病院/消化器外科 I 医員 大淵 佳祐		Kawakita Issei 病院/消化器外科 I 医員 河北 一誠		Kobayashi nobuhiro 病院/消化器外科 I 医員 小林 展大
	Sano Shuhei 病院/消化器外科 I 医員 佐野 修平		Yabe Saori 病院/消化器外科 I 医員 矢部 沙織		Tanaka Daiki 名寄市立総合病院/ 外科 医員 田仲 大樹		

Ph.D.Course Students

大学院博士課程



Master's Degree Students

大学院修士課程



■ 2015年度（平成27年度）教室体制

教 授	武富紹信
-----	------

医 局	医局長	副医局長
	横尾英樹（～2015.1.31）、本間重紀（2015.2.1～）	本間重紀（～2015.1.31）、本多昌平
		後藤了一（2015.2.1～）

(15/1/1-15/12/31)

病 棟	病棟医長		副病棟医長	
	神山俊哉（～2015.2.28） 蒲池浩文（2015.3.1～）		敦賀陽介（～2015.3.31） 柿坂達彦（～2015.3.31） 本多昌平（2015.4.1～） 下國達志（2015.4.1～）	
Group	小 児	消化管	肝胆脾	移 植
Chief	本多昌平	川村秀樹	神山俊哉	嶋村 剛 山下健一郎
Sub-chief		崎浜秀康（2015.4.1～） 本間重紀 下國達志（2015.4.1～）	蒲池浩文 横尾英樹 柿坂達彦（～2015.3.31） 敦賀陽介 折茂達也（2015.1.1～）	後藤了一（2015.4.1～）
Instructor	藤澤空彦（～2015.3.31） 宮城久之（2015.4.1～）	柴崎晋（～2015.3.31） 吉田雅	若山顕治 島田慎吾（2015.4.1～）	高橋 徹（～2015.3.31） 腰塚靖之 川村典生 財津雅昭（2015.4.1～）

Junior Fellow	今泉 健、藤居勇貴、奥村一慶、村田竜平、大淵佳祐 河北一誠、小林展大、佐野修平、矢部沙織
---------------	---

Super Rotator	（2年目）田中友香、古来貴寛、今本鉄平
---------------	---------------------

外 来	外来医長	本間重紀（～2015.3.31） 横尾英樹（2015.4.1～）	副外来医長	川村秀樹、本多昌平（～2015.3.31） 後藤了一（2015.4.1～）
	新 来	再 来		
月	○	小 児 外 科 肝 胆 脾	（本多昌平、藤澤空彦（～2015.3.31）、宮城久之（2015.4.1～）） （神山俊哉、蒲池浩文、横尾英樹、柿坂達彦（～2015.3.31）、 敦賀陽介、折茂達也、若山顕治、島田慎吾（2015.4.1～））	
火	—	外 来 医 長	副外来医長	
水	○	小 児 外 科	（本多昌平、藤澤空彦（～2015.3.31）、宮城久之（2015.4.1～））	
木	—	外 来 医 長 移 植	副外来医長 （嶋村 剛、山下健一郎、後藤了一、腰塚靖之、川村典生、 財津雅昭（2015.4.1～））	
金	○	小 児 外 科 消 化 管 移 植	（本多昌平、藤澤空彦（～2015.3.31）、宮城久之（2015.4.1～）） （川村秀樹、崎浜秀康（2015.4.1～）、本間重紀、下國達志（2015.4.1～）、 柴崎 晋（～2015.3.31）、吉田 雅） （嶋村 剛、山下健一郎、後藤了一、腰塚靖之、川村典生、 財津雅昭（2015.4.1～））	

Research	(Chief) 深井 原、(6年目) 藤好真人 (3年目) 相山 健、石川隆壽、湊 雅嗣、(小丹枝裕二) (2年目) 石黒友唯、高橋秀徳、松澤文彦、深作慶友 (1年目) 梅本浩平、岡田尚樹、豊島雄二郎、大谷晋太郎（修士）、橋本咲月（修士）
----------	--

2015年年間業績一覧

○手術：

2015年総手術件数：508例

(手術内容詳細については各グループ紹介参照)

- ・消化管G手術：160例
- ・肝胆膵G手術：144例
- ・移植G手術：18例
- ・小児G手術：186例

○学会発表：

国内：149

海外：15

○論文発表：

英文原著：23

英文症例報告：4

和文原著：18

和文症例報告：10

消化器外科 I ・ 週間予定表

	7:30	8:30	8:50	13:00	14:30	15:00	17:00
月曜日	術前症例検討会			総回診	学生指導 (縫合結紮/動物実習)		・ 薬剤説明会 ・ MRIカンファレンス ・ ほくたけセンター
火曜日	リサーチカンファレンス			手術日/病棟業務			
水曜日	術前症例検討会		当直報告	手術日/病棟業務	学生指導 (鏡視下縫合結紮) 隔週	手術日/病棟業務	
木曜日	M&Mカンファレンス 学会予演会			手術日/病棟業務			・ 消化器腫瘍内科との合同カンファレンスなど
金曜日	抄読会 /術前症例検討会 (予備日)			手術日/病棟業務			・ 消化管カンファレンス

2015年ジャーナルクラブ

1月23日	石川 倫啓	術後疼痛とアセトアミノフェン	6月26日	奥村 一慶	ストマ閉鎖法について
1月30日	坂本 聡大	消化器外科領域におけるSurgical Site Infection予防の指摘抗菌薬投与の検討	7月10日	今泉 健	Reconstruction Methods after Laparoscopic Distal Gastrectomy
2月13日	柏倉さゆり	周術期の血糖管理	7月31日	矢部 沙織	肝切除中の中心静脈圧と出血量について
	吉田 祐一	ERAS主に栄養管理について	9月4日	佐野 修平	胃切除におけるreduced port surgery
2月20日	太田 拓児	周術期輸血と悪性腫瘍	9月11日	小林 展大	小児の輸液における注意点
2月27日	蘭藤 佑哉		9月25日	古来 貴寛	片側LPEC後の対側発症
3月6日	近藤 享史	septic shockの初期蘇生についての最近の知見	(前期研修)		
3月13日	志智 俊介	胆道閉鎖と肝移植	10月16日	大淵 佳祐	術後肝不全
3月20日	柴田 泰洋	低位前方切除について	10月23日	藤居 勇貴	大腸憩室炎外科治療UpDate
4月17日	山本 貢	乳癌検診の方法	10月30日	財津 雅昭	制御性T細胞について
5月8日	腰塚 靖之	HCCに対する肝移植の適応基準	11月6日	奥村 一慶	小児門脈体循環シャントについて
5月15日	吉田 雅	術中腸管内洗浄は直腸癌術後の吻合部再発を予防するか	11月13日	下國 達志	透析患者の化学療法
5月22日	佐戸川弥紀	鼠径ヘルニアに対する術式と精巣機能に与える影響について (6年)	11月27日	村田 竜平	DEB-TACEについて
5月29日	田中 友香	肝細胞癌に対するラジオ波焼灼術後の再発形式 (前期研修)	12月4日	宮城 久之	胆道閉鎖症の組織立体再構築を用いた三次元的新分類による予後予測因子の確立
6月5日	小林 展大	肝門部胆管癌の切除断端に対する検討	12月11日	河北 一誠	SSIについて
6月19日	河北 一誠	小児の腸管吻合 ～器械吻合の使用適応～	12月18日	後藤 一了	血液型不適合肝移植について

2015年M&Mカンファレンス

1月15日	移植	Cleveland ClinicでのM&M、移植後HCV感染のまとめ	5月21日	移植	A Rare Case of Complications Following Simultaneous Pancreas Kidney Transplantation
1月22日	肝胆膵	PPPD後胃腸吻合で出血した1例	6月4日	肝胆膵	肝切除後出血の2例
1月29日	肝胆膵	肝切除後肝酵素の異常な上昇を示した2例	6月18日	小児	腹腔穿刺後に腹腔内出血を認めたVOD患児の1例
2月5日	小児	消化管出血を繰り返す胆道閉鎖症の症例	8月20日	消化管	術後門脈内血栓の1例
2月26日	移植	脳死肝移植後胆管胆管吻合、胆汁漏の1例	8月27日	肝胆膵	CVカテ抜去時に空気塞栓を発症し、心肺停止となった1例
3月5日	消化管	腹腔鏡下横行結腸切除後の縫合不全の1例	10月1日	消化管	Ileus解除後に呼吸不全と循環不全を来した1例
3月26日	消化管	縫合不全を来したS状結腸癌の1例	11月5日	肝胆膵	肝切除後出血の1例
5月14日	消化管	陰圧性肺水腫の1例			

2015年教室紹介

〈診療部門〉

■ 肝胆膵グループ

《スタッフ紹介》



神山 俊哉 (チーフ)

今年度も臨床、研究、教育を中心に活動してきた。臨床では、市中病院では手におえない肝臓手術を数多く紹介いただき、mortality zeroで施行してきました。これは現肝胆膵チームが、非常に成熟してきた証拠であり全国学会での他大学の成績と比較しても良い成績があげられていると感じています。最近では腹腔鏡手術のマスコミ報道から始まり、肝胆膵領域の手術成績が世間の注目を集めているため、今後は、さらに胆膵外科手術手技、周術期管理を進歩させ、後進へ伝え、自信に満ち溢れ将来性に希望が持てる肝胆膵外科スペシャリストを育てたい。またそれらの裏付けとし高度進行肝細胞癌、胆管細胞癌、大腸癌肝転移に対する肝切除を中心としたmultidisciplinary treatmentの確立を行っていききたい。研究では個々の癌細胞の発現糖鎖から癌悪性度・転移能を予測することを目標としている。これが可能となれば癌治療法選択に利するのみならず、癌転移の本態に近づくことができると考えている。



蒲池 浩文 (サブチーフ)

肝胆膵グループの胆膵領域を担当しています。扱っている疾患の大部分は悪性腫瘍ですが、今年度の特徴は肝葉以上切除を伴う胆管癌切除症例の増加で、HPD5例を含め全体として20例近くの手術を行いました。また局所進行膵癌に対するNACRT後の切除症例のMSTは33か月という成績が得られておりますが、より良い成績を目指し新規プロトコールで継続しております。待機して頂いている患者さんも多く、来年度に向けさらに多くの治療に携われることを期待しています。現在も多くの症例は中堅どころの医師に執刀してもらっていますが、より高度な症例に対しても積極的に執刀してもらおうと考えています。

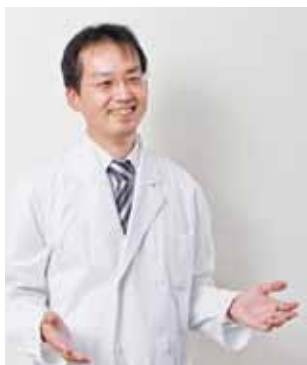


横尾 英樹 (サブチーフ)

肝胆膵グループの主に肝部門を担当しております。肝細胞癌の症例も最近では高度脈管侵襲や大型のものが増えてきており日々、手技の向上に努めております。最近の悩みの種は手術までの待機時間が1ヶ月以上かかっていることで何とか患者さんに迷惑がかからないよう配慮しています。

研究面では、肝細胞癌の新規バイオマーカーであるFABP5が悪性度と関連していることを突き止め現在、論文投稿中です。さらにこの分子がNAFLDを背景とする肝癌と関係しているのかどうか、関係しているとすればどのように関わっているのかを今後検討してゆきたいと考えております。

切除適応の有無に迷うような症例がございましたらどんどん気軽にご相談していただければと思います。



敦賀 陽介 (サブチーフ)

肝胆膵グループで特任助教として胆膵を主に担当させていただいております。平成23年より大学に戻りまして今年度で5年目となりました。2015年は11月にサンフランシスコで開催されたAASLDのLiver Meetingに演題を出していくことができ、モチベーションアップにつながったと思います。また懸案であった消化器外科専門医試験もなんとか合格できましたので、一安心いたしました。来年はさらなる精進を重ねて、臨床のみならず、研究、教育でもがんばりたいと思います。



折茂 達也 (サブチーフ)

本年度より医学部の医学教育推進センターという部署と兼任になり、教科書作成、カリキュラム作成、臨床実習調整、学生への講義といった今まで全く縁のなかった仕事にも関わるようになりました。理想的な医学生とは程遠い生活を送っていた自身の学生時代を考えると、自分がこのような教育関係の仕事に携わってもよいのかどうかと常に疑問を感じますが、これも何かの縁と思いいろいろ悩みながら行っています。臨床医以外の仕事もいろいろ増えてきていますが、来年度は肝胆膵外科高度技能専門医の取得を最重要課題として、バランスを取りながら仕事をしていきたいと思います。



若山 顕治 (インストラクター)

肝胆膵グループの若山です。今年は、3月に左膝の膝蓋靱帯断裂という大怪我をしまして、入院および手術、その後のリハビリと周囲の皆様には多大なご迷惑をおかけした年でしたが、職場復帰後は昨年度にも増して多くの、またより難しい肝臓の手術を手がけさせていただきました。また、研究面では臨床論文がSurgery Todayに掲載されました。来年も臨床においてはさらに積極的に取り組み、また、今年度は英語論文が一本のみだったので、研究面についてもより精進したいと思います。



島田 慎吾 (インストラクター)

H16年入局の島田慎吾と申します。2年間の研究生生活の後、釧路労災病院で2年間の研鑽を経て学位取得後に今年度より肝胆膵グループで勤務させていただいております。肝胆膵外科医としての一歩を踏み出させていただきましたが、臨床・研究ともにまだまだ力不足を実感しております。今年度の反省をいかして自分のためには手術の技量、判断力の向上および論文作成を、さらにグループ、教室全体の発展に微力ながら寄与できるように精進したいと思います。

現在の取り組み

〈肝臓〉

■ 治験

NIK-333（ペレチノイン）第Ⅲ相試験

K-333（ペレチノイン）第Ⅲ相試験

OPTIMIS（sorafenib）

SURF trial

BAY7-3-4506/15983（レゴラフェニブ）

■ 臨床

HCC再発症例に対するアイエーコール動注+UFT（FP変法）

ICG蛍光法を用いた区域同定による亜区域切除術の確立

巨大肝細胞癌術後再発予防のための補助療法の開発

CTとGSAシンチグラフィのfusion画像を用いた3Dシミュレーションによる肝予備能評価

CCC切除後adjuvantGEMの有用性

CCCに対するリンパ節郭清の意義

HBVを背景としたHCC術後患者の予後因子の検討

■ 基礎研究

肝細胞癌におけるE-FABPの予後・再発マーカーとしての意義

EB1の肝細胞癌発癌・進展における分子機構の解明

糖鎖プロファイル解析による肝細胞癌浸潤・転移の解明

血漿タンパク質LRGの翻訳後修飾に着目した膵癌早期診断マーカーの解析

HCCにおけるCTC、DTCの予後・再発予測

〈胆膵〉

■ 臨床

進行膵癌に対するMetformin併用術前放射線化学療法

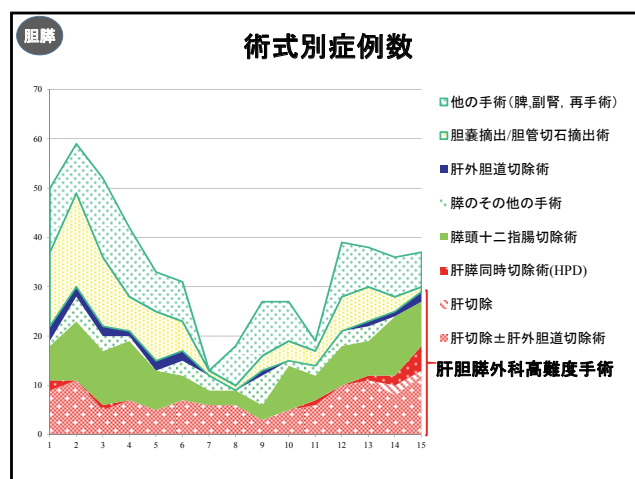
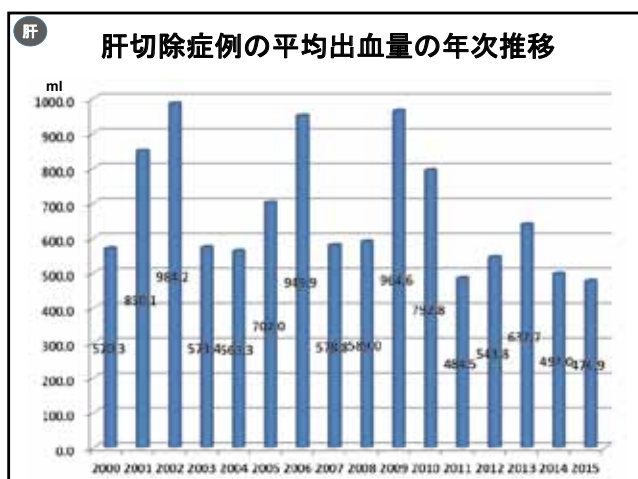
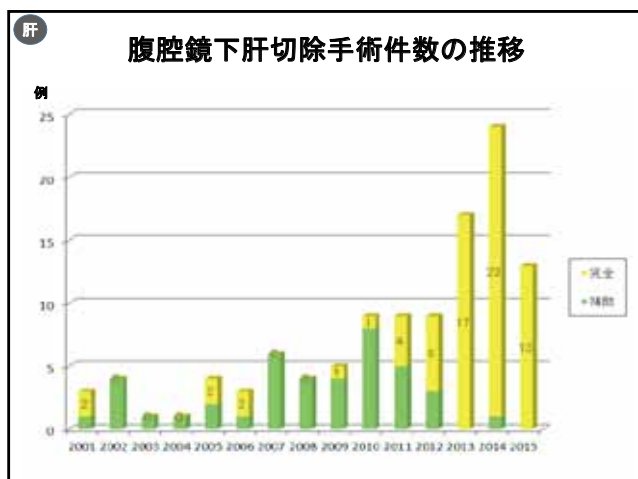
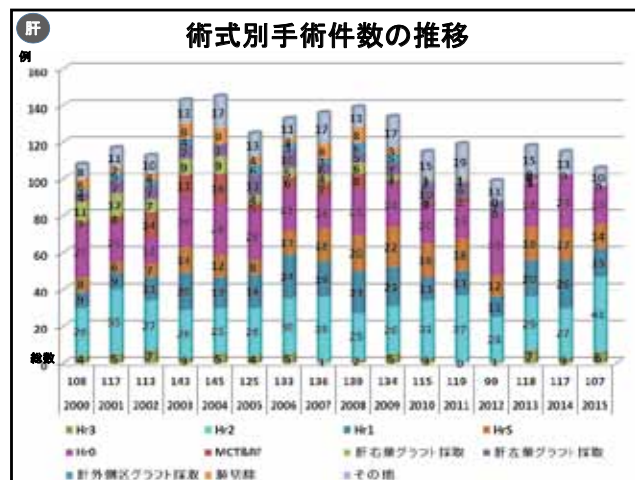
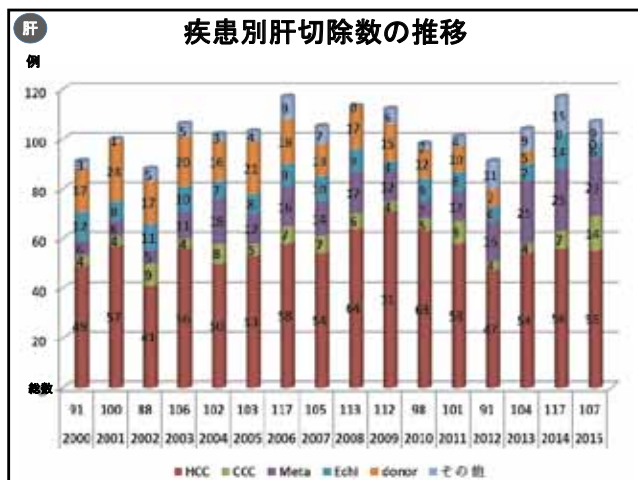
進行胆道癌に対する術前化学療法

borderline resectable肝門部胆管癌に対する新規手術術式の確立

■ 基礎研究

抗Mesothelin抗体を用いた癌治療の研究

癌幹細胞を標的とした周術期治療法の研究



■ 移植グループ

《スタッフ紹介》



嶋村 剛 (チーフ)

北大病院における肝移植プログラムに1997年開始当初から参加し、肝移植292例（成人生体肝移植177例、小児生体肝移植73例、ドミノ肝移植2例、脳死肝移植40例）、膵臓移植9例（膵腎同時移植6例、膵単独移植3例）に従事しました。今年、肝移植と膵移植をあわせて総数300例を超えました。北大病院臓器移植医療部部長を拝命し消化器外科Ⅰとは異なる所属ですが、“口うるさく”移植外科医を目指す後進の育成を第一に考えています。2010年の臓器移植法改正に伴い、わが国の肝移植も生体移植から脳死移植に徐々に移行してきました。そのような社会的変化に対応しながら移植医療を推進していくことが、北海道で唯一の脳死肝移植・膵移植実施認定施設の実施責任者としての職責と考えています。また、北大病院臓器移植医療部部長として心臓移植、腎臓移植関連のドクター、コーディネーターとの連携強化も進めています。



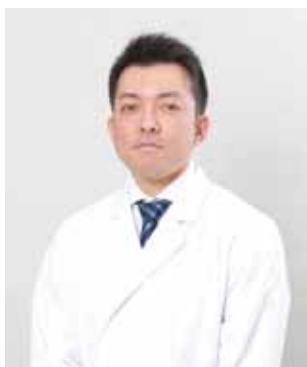
山下 健一郎 (チーフ)

臨床肝移植・膵移植に従事しながら、今まで一緒に研究を行ってきた大学院生の先生方の学位論文を仕上げています。今年は2人の先生が移植免疫関連の研究で無事に学位を取得されたことを嬉しく思います。4年前開始した制御性T細胞を用いた細胞治療による新しい免疫抑制法の臨床研究では、世界に先駆けて10名の生体肝移植症例で臨床試験を行い、7症例で免疫抑制剤からの完全離脱に成功しています。この7名の患者さん方は、2～3年半に渡って拒絶反応もなく免疫抑制剤フリーの状態で順調に経過しており、世界の移植関係者の間でも肝移植における免疫寛容誘導の治療法として認識されるようになってきました。来年度は臨床試験を拡大して国内の複数の肝移植センターと多施設共同臨床試験を開始すべく準備を進めています。臨床、研究共に地道ながらも着実に成果を積み上げるべく、研鑽を重ねていく次第です。



後藤 了一 (サブチーフ)

昨年は、非代償性肝硬変の急性増悪に対し移植が間に合わなかった症例、劇症肝炎からの回復期に感染で失う症例を経験し、消化器内科との連携の重要性を痛感致しました。今年は内科と一体になり、北海道全体としての肝不全の救命率改善と、移植医療の普及、推進に努力したいと考えております。また脳死臓器提供を増加させる努力が第一にあるべきですが、生体ドナー不在により亡くなられる症例がいる現状において、血液型不適合移植も見据えた安全な肝移植治療の提供に努力したいと考えております。移植後の問題としては、移植後長期の肝グラフト線維化、グラフト不全症例の原因究明が急務であり、抗ドナーHLA抗体を中心とした病理学的機序解明と治療法の開発に取り組みたいと思います。



腰塚 靖之 (インストラクター)

移植グループの腰塚です。今年はあっという間に1年が過ぎてしまい、自分のすべきことがほとんどできずに終わってしまいました。来年以降は、自分の目標を見据えてぶれることなく、臨床業務、学会発表、論文作成、後輩の指導に邁進します。



川村 典生 (インストラクター)

2014年7月から移植グループに所属し、肝不全、並びに移植術前・術後の診療に従事しております。昨年アメリカ留学から帰国した直後は、アメリカでの経験を生かし主に脳死ドナーからの臓器摘出を行っていましたが、今年は生体肝移植のレシピエント手術にも積極的に関わることができました。研究活動としては、生体ドナーの安全性や移植術後成績向上のためのグラフト機能不全に関する研究を行っており、2014年は発表できませんでしたが、2015年に全国学会・国際学会で発表予定、その後論文化する予定であります。

ドナーあつての移植手術であり一朝一夕に症例を増やすことはできませんが、安全性を高める研究を通じて、当科の移植成績・移植実施率の向上に貢献していければと考えております。



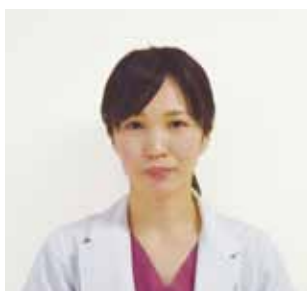
財津 雅昭 (インストラクター)

本年度の4月より移植グループに所属した財津です。2012年から2015年まではオックスフォード大学にリサーチ留学させていただきました。帰国後、学位取得し、現在は自分の温めている研究テーマ（移植免疫）を行うためのグラントの申請に精を出した1年でした。予想以上に採択されない現実を目の当たりにしましたが、今後も継続して応募していこうと思っています。また、来年からは臨床試験が再稼働しそうなので、そちらにも時間が割けるように努めていこうと思っています。長期臨床を離れたことに加え移植医療という特殊な臨床に慣れていくのにはある程度時間を要し、グループの皆様には迷惑をかけているばかりでしたが、少しずつ貢献できればと思っています。また、まだまだやりたいことが置き去りになっているので来年からは臨床と研究の両立を目指してモチベーションを上げて頑張ろうと思います。



太田 稔 (臨床工学技士)

今年、私は、消化器外科で手術を受け元気に職場復帰させていただきました。その経験の中で印象に残った出来事を書かせていただきます。それは、みんなが、いつも心掛けているのですが忘れてしまう、私が考えるに医療現場においてもっとも重要であろうことです。それは、呪文のような難しい説明や、処置や回診のときの“たった一言”です。「我々は最高のチームで臨みます！一緒に頑張りましょう！（笑顔）」。医師や看護師、医療者の“笑顔”は患者の不安を取り除き、“言葉”は患者を元気にさせます。医療は人と人の関係ですので、「がんばろう！」や「大丈夫！」という飾り気なくとも重みある言葉が極めて大切で、難しい数字よりも、それが安心と信頼に繋がることを改めて実感しました。この度、救って頂いた命を大事にし、安心と信頼を得られる臨床工学技士となれるよう精進いたします。この場をお借りし御礼申し上げます。皆様ありがとうございました。



岡本 香織 (臨床工学技士)

移植医療に関連する血液浄化および手術関連業務に携わらせていただいている臨床工学技士です。まだまだ勉強不足でお役にたてることも少ないとは思いますが、先生達から様々な知識や姿勢を学びながら、成長してゆけるように頑張っていきたいと思っています。

現在取り組んでいること

- ・制御性T細胞治療による肝移植における免疫寛容誘導法の開発
- ・ドナー特異的抗体を含む抗体関連拒絶への対策
- ・脳死肝移植待機患者の栄養評価および栄養療法の最適化に関する臨床研究
- ・小児肝移植後患者に対する弱毒生ワクチンの安全性に対する臨床研究
- ・小児肝移植患者に対する、疾患・服薬教育システムの確立
- ・血液型不適合肝移植（準備中）
- ・成人肝臓移植後の大建中湯の有効性に関する検討（多施設共同試験）
- ・膵臓移植後の1型糖尿病再発についての多施設共同研究
- ・血液製剤によるHIV/HCV重複感染患者の肝移植に関する研究（厚生労働省エイズ対策事業・江口班）
- ・多施設共同研究による肝移植後肝炎ウイルス新規治療の確立と標準化
- ・昏睡型急性肝不全に対する血液浄化装置HAYATEの昏睡覚醒効果に関する臨床試験（多施設共同試験）

2015年1月から12月の診療実績

1. 病棟実績

- ・入院患者数（延べ人数）：135名
 - 術前評価・待機：9名
 - 手術（生体ドナー・再手術などを含む）：18名
 - 移植後再入院（検査・加療など）：108名

・平均在院日数：13.57日

・術後平均在院日数

肝移植：62.13日（生体：55.3日、脳死66.2日）

生体肝移植ドナー：16日

2. 手術件数

生体肝移植術 4例（成人3例、小児1例）

生体肝グラフト採取術 4例

脳死肝移植術 5例

膵腎同時移植 2例

3. 外来実績

外来患者数（延べ人数）：1,893名

新患外来（紹介）：36名（延べ1,158名）

現在フォロー中の患者数

移植前フォロー患者数：60名

生体肝移植待機：4名

脳死肝移植待機：49名

膵・膵腎移植待機：7名

移植後患者数：249名（ドナー除く）

肝移植後：239名（当院 217名、他院 22名）

膵腎移植後：11名（当院 10名、他院 1名）

生体肝移植ドナー：248名（*全員毎年受診はしていません）

入院

❖ 入院患者数(延べ人数): 135名

- ・術前評価・待機: 9名
- ・手術(生体ドナー含む): 18名
- ・移植後再入院(検査・加療): 108名

❖ 平均在院日数: 13.57日

❖ 術後平均在院日数

- ・肝移植: 62.1日
- ・生体肝移植ドナー: 16日

2015年1月～2015年12月

外来

❖ 外来患者数(延べ人数): 1,893名

❖ 新患外来(紹介): 36名(延べ1,158名)

❖ 現在フォロー中の患者数

移植前フォロー患者数: 60名

- ・脳死肝移植待機: 49名
- ・生体肝移植候補者(ドナー・レシピエント): 4名
- ・脾・膵腎移植待機: 7名

移植後患者数: 250名(ドナー除く)

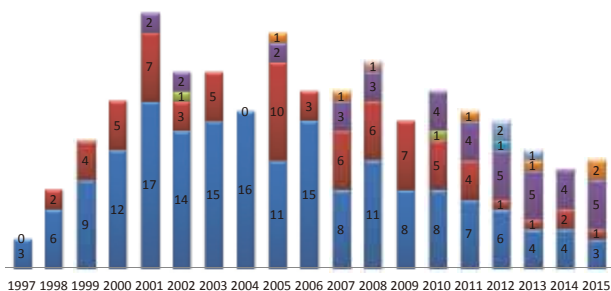
- ・肝移植後: 239名(当院 217名、他院 22名)
- ・生体肝移植ドナー: 248名*全員毎年受診はしていません
- ・脾・膵腎移植後: 11名(当院 10名、他院 1名)

2015年1月～2015年12月

当科における移植症例(1997.9-2015.12)

計298例

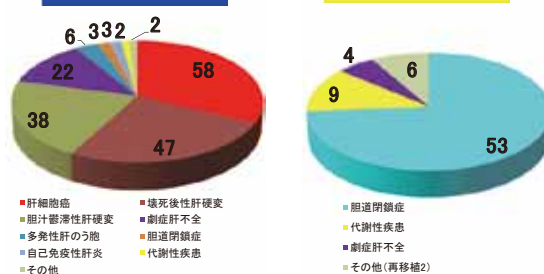
- 生体成人 n=176
- 生体小児 n=72
- ドミノ n=2
- 脳死肝成人 n=39
- 脳死小児 n=1
- 脳死膵腎 n=6
- 脳死脾 n=3
- 脳死腎 n=1



生体肝移植 246例(248回)

≥18歳 (n=176)

<18歳 (n=72)

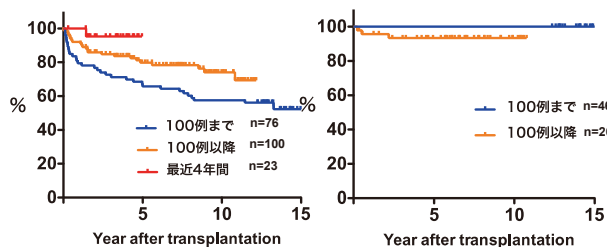


1997年9月～2015年12月31日

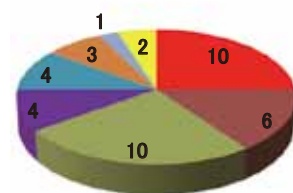
生体肝移植 246例(248回)

≥18歳 (n=176)

<18歳 (n=72)

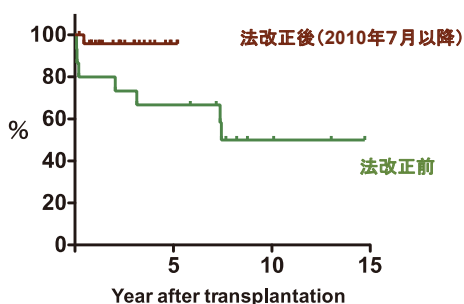


脳死肝移植 40例



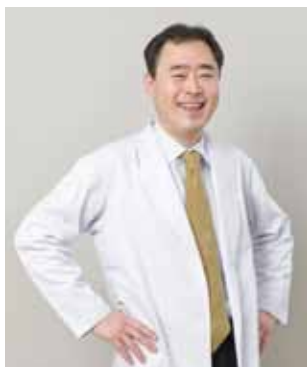
1997年9月～2015年11月14日

成人脳死肝移植 39例



■ 消化管グループ

《スタッフ紹介》



川村 秀樹 (チーフ)

消化管グループでは上下部消化管腫瘍、炎症性腸疾患の外科治療を中心に診療しております。当グループの特徴は、ほとんどの手術を鏡視下に行っていることと、低い術後合併症を誇っていることです。また、当グループの大きな使命の1つとして、関連病院を含めた鏡視下手術の導入から技術認定医取得にいたるまでの技術指導があります。第1外科関連医の技術認定医取得者が今後も増えていくよう、今後ともご協力させていただきたいと考えております。また私は当グループで胃癌担当ですが、胃癌に関する臨床研究としてようやく今年度、2つの多施設共同臨床研究（Stagell,III胃癌に対する腹腔鏡下胃切除の有効性、安全性に関する検証的臨床研究、StagelV胃癌に対する姑息的腹腔鏡下手術の安全性に関する探索的臨床研究）を開始することができました。必ず結果を出して論文報告させていただきますので、こちらもお協力よろしくお願いいたします。



崎浜 秀康 (サブチーフ)

2年間の苫小牧市立病院での勤務を経て 今年から大学病棟に戻りました。

川村先生、本間先生、吉田先生方のたゆまぬ努力により、3年前に比べて大腸癌や胃癌症例数が飛躍的に増加しています。また研究において、当グループで臨床研究を実施した先生や、現在進行中の大学院生とともに、論文を出していく予定です。どうか今後ともご指導のほど宜しくお願いします。



本間 重紀 (サブチーフ)

消化管グループの下部消化管（小腸、大腸）を担当しております。悪性腫瘍はもとより、増加傾向にある炎症性腸疾患（潰瘍性大腸炎、クローン病）の外科治療を中心に診療をおこなっております。どの疾患も、消化器内科の光学診療部チーム、炎症性腸疾患グループ、化学療法グループの先生方と連携をとり、診断から手術、薬物療法とそれぞれの専門性を重視し、連携して診療に従事しております。本年より武富教授から医局長を拝命いたしました。チームのスタッフはもとより、後期研修医をはじめ、教室員、同門の先生、秘書の皆様に支えられ、少しずつですが前に進めているものと思います。この場を借りて深く感謝申し上げます。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



下國 達志 (サブチーフ)

平成10年卒の下國達志です。平成22年4月より大学病棟消化管グループ配属となり、平成24年4月から北海道大学病院臨床指導医養成プロジェクトの特任助教を拝命致しました。平成25年4月から2年間、JA北海道厚生連網走厚生病院外科に出向し、医師人生で初めて、指導医的立場としてオホーツク地域の外科医療に携わる機会をいただきました。平成27年4月より大学復帰となっておりますが、病棟業務、臨床研究、医局内務の全ての面で十分な仕事を果たせておらず、諸先生方に御迷惑をおかけすることが多々あったと反省しております。日本内視鏡外科学会技術認定医取得を含めた手術技術の更なる向上、学会発表数の増加、論文投稿の定型化が今の自分のマストタスクであると再確認しつつ、後輩・研修医への指導、初期研修医・学生の勧誘活動の継続、グループおよび医局が掲げるプロジェクトへの貢献を、日々意識しながら業務に取り組んでいく所存です。今後とも御指導御鞭撻の程、何卒宜しくお願い申し上げます。



吉田 雅 (インストラクター)

大学勤務となってから1年が経過しました。今年は、大きな目標であった学位と日本内視鏡外科学会技術認定医を取得することが出来ました。これも、諸先生方のご指導あつてのことと心から感謝致しているところです。認定医を取得できた為、関連病院の先生方から手術助手のお話を頂戴し、手術に参加させて頂いております。実際に助手をさせて頂くと、自分の技術力不足を痛感させられますが、非常に良い勉強をさせて頂いていると考えています。今後も、術者・助手を問わず、自分の技術力の向上、後輩の指導に努めて参りたいと考えております。

一方で、臨床の論文が中々アクセプトされず、目標を達成することが出来ませんでした。大学に在籍する以上は、臨床のみならず、論文・学会発表や後輩の先生方の指導など、更に精進する所存であります。

現在の取り組み

〈胃〉

- ・ Stage II,III胃癌に対する腹腔鏡下胃切除の検証的臨床研究（多施設）
- ・ Stage IV胃癌に対する姑息的腹腔鏡下胃手術の探索的臨床研究（多施設）
- ・ 進行胃癌に対するNAC後の根治手術
- ・ Reduced port gastrectomyの工夫

〈大腸〉

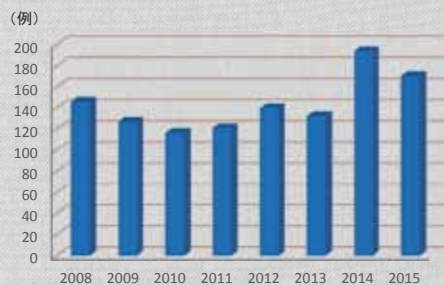
- ・ 手術支援ロボット(da Vinci Surgical System Si)を用いた直腸腫瘍に対する腹腔鏡下直腸切除／切断術の探索的臨床研究（自主臨床試験）
- ・ SILS™ポートを用いたReduced port surgery
- ・ 直腸癌に対する減孔式腹腔鏡下低位前方切除術
- ・ 直腸癌に対するストマ孔を利用した単孔式腹腔鏡下直腸切断術

- ・ 潰瘍性大腸炎に対するストマ孔を利用した単孔式腹腔鏡下大腸全摘術
- ・ 大腸癌同時性肝転移に対する腹腔鏡下大腸・肝同時切除術（肝胆膵グループとの合同臨床研究）
- ・ 直腸癌術前化学療法RNAC-01試験
- ・ 体外式超音波検査を用いた大腸癌術前診断法の探索的臨床研究

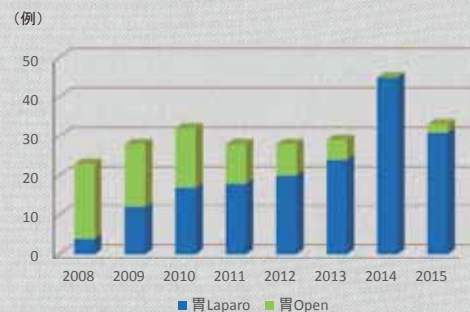
〈鏡視下手術全般、教育関連〉

- ・ 胃または大腸の悪性腫瘍に対する腹腔鏡下手術におけるエノキサパリンによる術後静脈血栓塞栓症発生予防の検討(Eno-LAP試験、多施設共同RCT、研究代表者：蒲池浩文)
- ・ 初期／後期研修医に対する鏡視下基本手技（縫合結紮手技）の教育
- ・ 後期研修医の早期からの鏡視下手術執刀経験
- ・ 北大消化器外科Ⅰ鏡視下手術教育カリキュラムの作成
- ・ 関連病院での技術認定医取得を目指した技術指導／技術支援出張
- ・ Linear-Staplerの至適切離条件の検討

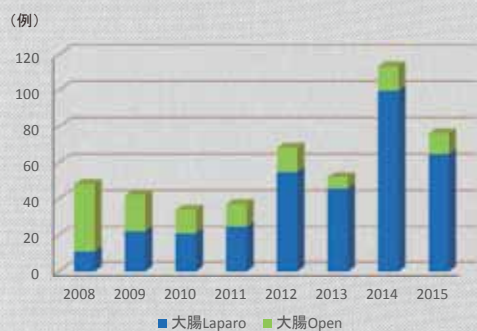
消化管手術件数



胃癌手術件数



大腸癌手術件数



技術認定医所属施設、技術指導状況



■ 小児グループ

《スタッフ紹介》



本多 昌平 (チーフ)

2014年4月より小児グループのチーフとなりはや2年目となりました。今年の春から宮城先生が北大に戻り、同じ研修先(神奈川県立こども医療センター)で学んだ経験から、ほぼ共通認識で患者管理・術式の選択がおこなえるようになり、昨年と比べると少しは心のゆとりを持てるようになった感じがします。それでも依然他グループのスタッフや多くの他科の先生方に助けられながら何とかこなしているのが現状です。これから腹腔鏡手術や新生児、小児がんに対する手術など更なる研鑽を重ねて北海道の小児医療に貢献できるよう邁進していく心づもりです。また基礎研究面に関しましても、これまでの肝芽腫の研究成果をさらに発展させ、精力的に取り組んでいきたいと思っています。



宮城 久之 (インストラクター)

2015年4月に国内留学より戻りました。人手不足の中、誠にありがとうございました。今年度からは得た経験を活かし、本多先生と協力して、手術が必要なこどもたちのため、臨床・研究・教育いずれにおいても充実した環境を整えられるよう、日々精進して参りたいと存じます。

現在の取り組み

・2015年に取得した競争研究費

【本多 昌平】

基盤研究(C)(一般)(H27～H29) 代表

肝芽腫の発生・進展過程におけるDNAメチル化異常の解明

1,600(3,100)千円

厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等政策研究事業(難治性疾患政策研究事業)(H26～H28) 分担

小児期からの希少難治性消化管疾患の移行期を包含するガイドラインの確立に関する研究(田口 智章) 100(600)千円

日本医療研究開発機構 革新的医療技術創出拠点プロジェクト(橋渡し研究加速ネットワークプログラム) シーズA(H27) 代表
肝芽腫における新規予後予測分子マーカーを目指した新規がん抑制遺伝子のDNAメチル化異常 1,920(1,920)千円

公益財団法人がんの子どもを守る会治療研究助成
(H26～H27) 代表

肝芽腫のシスプラチン耐性に関わるDNAメチル化異常の解明と予後予測分子マーカーの確立 400(400)千円

2015年診療実績(1月～12月)

1. 外来実績

月曜、金曜の午前を中心に、10～25名/日程度、年間で延べ1,600名程度を2名体制で行っています。

2. 病棟実績

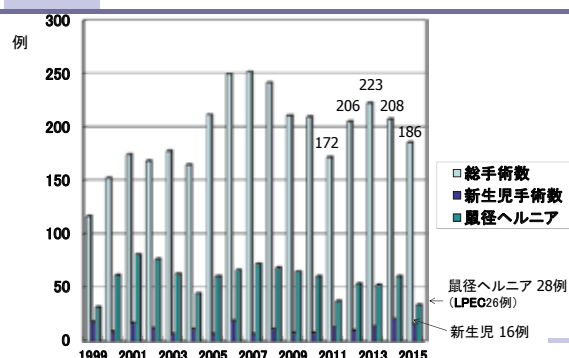
延べ入院患者数(新生児、小児腫瘍含む): 271例

3. 手術件数

総手術件数	185例
新生児症例	15例
小児固形腫瘍	9例
鏡視下手術	34例

2015年度 小児外科グループ総括

小児外科の年間手術数



新生児手術症例の内訳

新生児手術16例

先天性食道閉鎖症 (18トリソミー)	食道パンデニング・胃瘻造設術	3
先天性腸閉鎖症	腸吻合術	3
新生児壊死性腸炎	結腸切除術、ドレナージ術	2
臍帯ヘルニア	腹壁閉鎖術(サイロ形成術)	4 (2)
鎖肛	肛門形成術、ストーマ造設術	4
先天性横隔膜ヘルニア	裂孔閉鎖術	1
先天性水頭症	VPシャント留置	1

主要手術疾患の内訳

主な小児固形腫瘍 (8例)

神経芽腫	腫瘍摘出術	1例
	腫瘍生検	3
Rhabdoid tumor	生検術	1
Wilms	腎摘出術	2
脂肪芽腫	摘出術	1

胆道系 (4例)

胆道閉鎖症	根治術	2例
膵胆管合流異常症	胆管空腸吻合術	1
シトリン血症	肝生検	1

主要手術疾患の内訳

鎖肛 (11例)

高位	ストーマ造設術	2例
	腹会陰式肛門形成術	1
低位	会陰式肛門形成術	6
Cloaca	ストーマ造設術	1
Perineal canal	会陰式肛門形成術	1

その他

ヒルシュスプルング病	経肛門的Soave法	1例
	Duhamel法	1
	ストーマ造設術(全結腸型)	1

鏡視下手術

術 式	例数	疾 患
腹腔鏡下卵巣開窓術	1	卵巣嚢腫
胸腔鏡下Nuss法	1	漏斗胸
腹腔鏡補助下胆管切除術	1	膵胆管合流異常症
腹腔鏡下脾臓摘出術	1	遺伝性球状赤血球症
腹腔鏡補助下結腸切除術	1	腸間膜嚢腫
腹腔鏡補助下高位鎖肛根治術	1	鎖肛
腹腔鏡下リンパ節摘出術	1	Castleman病
腹腔鏡下門脈精査	1	先天性門脈循環シャント
腹腔鏡下虫垂切除術	1	急性虫垂炎
腹腔鏡下鼠径ヘルニア手術 (LPEC)	26	鼠径ヘルニア
計	35例	

2015年教室紹介

〈研究部門〉

■ リサーチ統括部長より

消化器外科学分野 I における研究の概要



(リサーチ統括：深井 原)

武富紹信教授の就任とともに臨床診療と連携した研究体制に改組しました。Bedsideでの疑問をbenchへ、また研究から得られたデータを臨床における予後予測や治療に結びつけることを目指すものです。臨床診療グループは、肝胆膵G、消化管G、移植G、小児Gから構成され、研究Gもこれに準じた構成となっています。

消化器外科領域（肝胆膵、消化管）では癌が主要な研究対象です。Tissue Bankに臨床検体と患者情報を集積し、悪性度マーカーを見出し、それらの分子生物学的意義を検証し、分子標的治療の可能性を模索しています。小児領域の腫瘍に関しても、同様の手法を用いています。それ故、グループの垣根を越えて遺伝子・タンパクの強発現、ノックアウト、それらの解析、免疫染色などの方法論を共有し、研究を進めています。

遺伝子、タンパクの解析は、cDNAアレイやPCRアレイ、2次元電気泳動、HPLC、質量分析などの多くの方法が一般的に用いられるようになり、それらのデータを提示するのみでは学術的な価値が認められにくくなっています。見出された候補遺伝子、分子の機能解析が今後の研究には必須と言えます。そこで、候補遺伝子、タンパクのノックアウト、強発現細胞を用いて詳細に解析するための体制整備、ハード、ソフトの充実を進めています。特に遺伝子のノックアウトは（ノックダウンではない）、CRISPR/Cas9等の新しい方法論を積極的に取り入れ、外科の研究室としては高度の研究手法を日常的に行える環境になりつつあります。

一方、移植領域では移植後の免疫状態を制御する方法論の構築、免疫状態のモニタリングを行い、臨床における免疫寛容の誘導を目指しています。実際に免疫抑制剤を減量できる症例ではどのような白血球フェノタイプが関与するのか、質的、時間的な推移を精査しています。また、移植後の急性、慢性血管病変の病態解明を目指して、消化管癌の切除標本から得られるヒト動脈を免疫不全マウスに移植する研究も始まりました。本研究は消化管Gと移植Gの密接な連携により実現したものであり、当科の研究に新しい一歩を刻んだ画期的な試みと言えます。

ウイルス性肝炎による肝不全、肝癌症例における肝移植後早期の肝炎再発、肝線維化、グラフトロスは免疫制御における課題の一つです。また、肝癌に対する肝切除後の残肝再発（異時性発癌）や残肝への微小転移はウイルス性肝細胞癌の予後に関与する重要な課題です。近年、HCVに対する抗ウイルス治療の奏効率が向上しましたが、SVRを得られないHCV感染やHBVの持続感染に対する治療は、ウイルスに起因する肝不全、肝癌の予後改善のために重要な研究課題です。そこで、切除肝組織からウイルス感染肝細胞を長期間維持培養する技術を確立しました。今後、多数の患者由来の感染細胞を不死化することにより、多様な遺伝子背景の肝細胞に、種々のgenotypeのウイルスが感染した細胞リソースを構築し、肝癌の母地となるウイルス性肝炎の治療法開発や肝の慢性ストレス病態に関わる基礎研究に役立てることを目指しています。

通常の定型的肝切除から得られる余剰肝組織は、慢性肝炎、脂肪肝などの基礎疾患に加え、手術時に血流を遮断するため（温阻血）、細胞の分散後に復温・再酸素化をしても、生存細胞を得ることは極めて困難です。これらの複合的なストレスから組織を修復後に分散、培養しています。すなわち、移植医療における臓器保存、酸素化灌流の新技術を応用して、肝癌、肝炎の病態、治療のための細胞源を作成しています。全国有数の肝切除数を維持しているhigh volume centerのadvantageを活かして、研究分野の垣根を超えた臨床と基礎の密接な協力体制を構築、維持することにより、当科の基礎研究がさらに進展することを目指しています。

■ 研究グループ紹介

移植グループ



深作 慶友（2007年卒）

1. 研究テーマ・概要

移植グループでは、現在深作慶友（2007年卒）が、移植免疫学に関する基礎・臨床研究を行っています。

〈肝移植後de novo抗HLA抗体(donor specific antibody: DSA)の血管病変に果たす役割の解析〉

カルシニューリン阻害薬が実臨床で使用されて以来、肝移植の短期成績は著明に改善しましたが、長期成績は十分とは言えず、グラフト不全の原因とされる慢性拒絶反応の制御は未だ重要課題です。近年慢性拒絶反応の原因として、グラフトに対する抗HLA抗体（DSA：Donor Specific Antibody）の存在が注目されており、当科においても肝移植後のDSAとグラフト線維化との関連を報告してきました。現在我々は肝移植後に発生するde novo DSAを患者さんより提供頂き、ヒト血管に対する障害機序の解析を行っています。ヒト血管に生じる病変をin vivoで観察するため、マウスにヒト血管を移植するヒト化マウス血管移植モデルの確立を目指しています。

〈ヒト化マウスを用いた免疫モニタリング法の確立〉

移植後の免疫状態を正確に把握することは、臓器移植後graft不全の回避や必要以上の免疫抑制剤による感染症や発癌などの副作用を防ぐために重要です。現在、臨床血液検査や肝生検の他、リンパ球混合反応をはじめとする免疫モニタリングの報告がありますが、それらはすべて免疫抑制下の患者の状態を観察しようとする試みであり、免疫抑制下に無い、患者本来の免疫反応を知ることはできません。我々はヒト化マウスに移植後患者の免疫細胞を再構築し、免疫抑制剤の影響が取り除かれたと考えられる状態で、ドナー抗原に対する反応を観察する試みを始めています。この研究により正確な免疫状態の観察が可能になれば、免疫抑制剤の調整を安全に施行できると考えています。

保存グループ



深井 原 (1994年卒)



藤好 真人 (2003年卒)



石川 隆壽 (2007年卒)



梅本 浩平 (2008年卒)

1. 研究テーマ・概要

〈臓器保存、灌流法の開発〉

心停止ドナー肝、脂肪肝を灌流によって修復し、再灌流障害を軽減する方策を模索している。再灌流障害は、1) 単離肝灌流によるスクリーニング、2) 細胞実験によるメカニズム解析、3) 肝温阻血再灌流モデル (in vivo) による生存への影響と、経時推移の評価、を使い分ける。現在は、大学院生に単離肝灌流によるスクリーニングを進めてもらっている。有望な方法論を見出したら、2) 3) へと発展させたい。

臓器灌流の有効性は、a) 灌流液、b) 灌流温度、c) 灌流時間、d) 灌流のタイミング、を中心に検討する。併用治療の有効性は、水素ガスの e) 体外灌流中投与、f) 再灌流時投与、g) 両方投与、を検討する。新規抗酸化剤の有効性は、h) 体外灌流中投与、i) 再灌流時投与、j) 両方投与、を検討する。

〈肝臓以外の臓器での検討〉

移植臓器の摘出は腹部（肝、腎、脾、小腸）、胸部（心、肺）に分かれて行うが、虚血再灌流障害を受け易い心臓と小腸、手術数が最も多い腎臓で有効な保存液、灌流液の開発が望まれる。肝臓の摘出時に使用する液がこれらの臓器で従来の方法と比べ、最低限、非劣性が見られなければ、臨床応用は不可能である。それ故、これらの臓器（細胞）での有効性、すなわち、効果の普遍性の検討も並行して行うべき課題である。普遍性の検討は深井が中心となって検討しているが、大谷もサブの研究課題として、心筋細胞を用いて新規抗酸化剤の効果を検討している。

〈臓器修復技術を他の研究分野に応用する試み〉

肝癌の原因となる肝の慢性ウィルス性肝炎、脂肪肝の病態解明にはヒトの肝由来細胞の解析が必須である。切除肝組織

を初代培養し、種々のin vitro研究に使用するニーズは古くからあり、幾つかの施設で断続的に試みられてきた。しかし、元々の肝臓が障害されているうえに、手術時に血流が遮断され（温阻血）、さらに、術中操作（機械的刺激）、摘出後の病理標本作成（室温～低温での阻血）、などのストレスに曝露されるため、培養操作の開始時には既に不可逆な障害を受けている場合が多いようである。実際、われわれの経験では、温阻血が120分を超えると生存する初代培養肝細胞は皆無、90分でも困難であり、瀕死の細胞機能を修復する必要があると考えられた。

そこで、酸素化灌流による臓器修復を組織片に適用し、培養処理を開始する前に細断組織を新規臓器保存・灌流液に浸漬し、1) 酸素と糖の供給、2) 細胞内Ca²⁺ overloadの阻害、3) 抗酸化治療、4) 生存シグナルの賦活、5) 細胞膨張の阻害、6) 抗酸化タンパクの発現誘導、などの治療を施した。その後、培養処理を行うことにより、生細胞の回収率は飛躍的に向上した。この方法論が確立されれば、これまで是不可能であった定型的葉切除の肝組織からの初代培養が可能になる。さらに、12-16時間かけて低温～室温で修復ができれば、細断組織を修復しながら、日本各地に搬送できるようになる。この技術によって、症例数が少ない全国各地の中堅病院からセンター病院に組織試料を簡便に送ることが可能になり、肝細胞リソースの集積が可能になることを意味し、広く肝臓病学の発展に貢献し得る、夢のあるシーズである。もう一つ重要なことは、肝細胞の初代培養ができなくても、癌細胞や線維芽細胞の培養は可能なことがある。線維芽細胞は肝細胞のviabilityや腫瘍の増殖に深く関与することも知られており、肝細胞と同様に、種々の遺伝子背景を持つヒト由来の細胞リソースが存在することに意義がある。さらに、線維芽細胞からiPS細胞の作製、あるいは、ダイレクトリプログラミングによる肝細胞様細胞の作製 (iHEP細胞) も可能であり、今後益々ニーズが高まるはずである。臓器修復の技術が分野の垣根を



大谷 晋太郎 (2015年卒)



橋本 咲月 (2015年卒)

越えて、広範に医学研究に役立つ基礎技術として認知されることを目指して、開発を進めていきたい。

2. 今年度の満足度・来年度の抱負・今後の方向性

石川 隆壽：肝移植における心臓死ドナーからの臓器提供を実現するための基礎的研究を行っています。具体的には、心臓死ラット肝を単純浸漬冷保存及び低温灌流保存し、水素ガスの併用効果を検証した。これまでに単純浸漬冷保存後の再灌流時に水素ガスを投与することで、再灌流後の肝障害を軽減し、高次機能である胆汁産生能を維持し得ることを確認した。現在、免疫染色やWB法において奏功メカニズムを解析中である。低温酸素化灌流は、少なくとも心停止肝においては十分な効果が得られず、至適条件の詳細な検討が必要と考えられた。本年度で研究生生活3年目であり、今年度中に解析を終わらせ、論文化する予定である。学位研究の完結を以て目的達成と考えれば、本年度の満足度は60%程度と考える。

梅本 浩平：H27年度から研究を始めました。肝移植における脂肪肝ドナーからの臓器提供を実現するための基礎的研究を行っています。脂肪肝ラットの肝臓を単純浸漬冷保存及び低温灌流保存し、水素ガスや新規抗酸化剤の併用効果を検証する予定です。今年度は肝グラフトの摘出、冷保存、単離肝灌流による再灌流などのモデル作成を行ってきました。単離肝灌流モデル自体は完成に近づいていますが、安定した脂肪肝モデルの作成に難渋しています。今後は脂肪肝モデルの冷保存再灌流（無治療コントロール）を作成し、データが安定したら治療として、1) 再灌流時水素投与、2) 新規抗酸化剤投与（冷保存時、再灌流時）、3) 酸素化体外灌流（4℃、25℃）、の何れかでpositive data が得られるように、順次検討したいと考えています。モデルの完成度等を勘案し、満足度は

60%程度と考えます。

大谷 晋太郎：修士課程の大学院生として今年度からお世話になっています。牡蠣から抽出、同定し、人工合成に成功した新規抗酸化物（保健学科 布田、古川、蕙、千葉）による、肝冷保存再灌流障害軽減効果を検討しています。保健学科の卒業研究で私が関わったものです。

1) ラット肝の冷保存、単離肝灌流装置による再灌流の方法を用いて効果を検討する予定です。まずはモデルを確立し、2016年度は抗酸化物の障害軽減効果、作用メカニズムを検討する予定です。2) in vitroで新規抗酸化物の効果を検討しました。冷保存許容時間が短い心筋細胞を用いて、冷保存・復温・再酸素化モデルを作成し、新規抗酸化物の効果を検討し、冷保存時に細胞障害を抑えることを明らかにしました。引き続き新規抗酸化物質の障害軽減メカニズムを解明する予定です。満足度：2015年度に国際学会への演題応募が実現すれば100%と考えており、現状では70%程度かと思います。

橋本 咲月：大学院（修士課程）に進学し、今年からお世話になっています。質量分析イメージング（Imaging Mass Spectrometry; IMS）を用いた、肝臓病変における変動分子の解析を行っています。IMSは凍結切片を特殊処理後にレーザー照射し、組織から飛び出す陽、陰イオンを質量分析装置で検出し、切片内に存在する分子量200-2000の物質の増減を評価する方法です。Naive、温阻血45, 90, 120分、温阻血後の再灌流60分、のモデルを正常肝、脂肪肝動物で作成し、各組織切片をスライド上に載せ、IMSで解析し、脂肪肝の温阻血再灌流の増悪要因を見出すことを目指しています。既に動物実験や免疫染色を教えていただき、2015年度中にウェスタンブロットを、酵素活性測定、GSH recycling assay, 過酸化脂質測定などの酸化ストレス評価法を中心に、一つでも多く

の技術を習得したいと考えています。

多くの先生方によくしていただいて、充実した研究ができました。この環境に感謝しています。満足度：現状では60-70%程度かと思います。

藤好 真人：これまで行ってきたマウス同所性肝移植モデルへの機械灌流法の導入におきまして、技術的には最終的な到達点と考えておりました、動脈再建を伴うマウス同所性肝移植法とDual machine perfusionへの拡張に成功し、肝移植における機械灌流の基礎実験系としては完成したものと考えており、満足度は100%です。研究成果の点では、博士号を取得し、肝線維化マーカー M2BPGiに関する論文が受理されたものの、主研究の論文がいまだ受理されておらず、満足度は30%程度です。来年度以降は、University Medical Center Groningenに移り、マウスモデルを応用して、機械灌流法の移植前グラフト評価法への応用やより積極的な体外グラフト修復法の開発に関する基礎研究を進めるとともに、クリニカルフェローとしてDCD肝移植と臨床機械灌流の経験を積むことで、包括的かつ効率的な開発研究を進めていきたいと考えております。

深井 原：各種臓器の酸素化体外灌流による修復法を確立するために、臓器冷保存液、灌流液の組成を模索し、重水を主体とする独自の緩衝液を作成した。この液中で酸素溶存下に冷保存すると、心臓、肝臓のエネルギー状態が改善し、再灌流後の障害も著明に軽減された。タンパクのリン酸化動態の解析から、14-3-3ζによるシグナル制御の関与が示唆された。14-3-3ζを高発現する尿細管上皮細胞株を作製し、14-3-3ζが低温下でタンパクのリン酸化を制御し、酸化的リン酸化を著明に促進し、随伴する酸化ストレスによってミトコンドリアを障害することを見出だした。さらに、14-3-3ζ高発現に抗酸化剤を併用すると、障害を抑えつつ酸化的リン酸化を促進し得た。新しい臓器修復のスタンダードを確立するために、今後、臓器移植モデルを用いた検証を予定している。

(文責：深井 原)



腫瘍(肝胆膵)グループ



相山 健 (2007年卒)

肝細胞癌におけるEB1のバイオマーカーとしての確立とその機能解析



高橋 秀徳 (2007年卒)

糖鎖プロファイル解析による肝細胞癌の浸潤・転移の検討



松澤 文彦 (2008年卒)

膵癌細胞株に対する抗メソテリン抗体の有効性の検討



岡田 尚樹 (2009年卒)

Dialcylglycerol kinase α 阻害剤を用いた消化器分子標的治療の基礎的研究

1. 研究テーマ・概要

〈肝細胞癌研究〉

近年ウイルス性肝炎の治療が飛躍的に向上しています。それに伴いB型やC型肝炎に起因する肝細胞癌も減少へ転じると推測されます。これまでウイルス性肝炎を基盤とした肝細胞癌が高い割合を占めておりましたが、今後その割合に変化が生じ肝細胞癌切除後の再発形式も少しずつ変化してくるものと考えられます。しかし現在臨床で肝細胞癌の腫瘍マーカーとしてよく用いられるAFPやAFPレクチン分画、PIVKA-IIは、予後や再発の予測因子としてはまだ十分とは言えません。そこで、当グループはプロテオミクス解析から得られた2つのタンパク (FABP5とAPC結合蛋白EB1) に着目して、肝細胞癌における予後・再発予測因子としての確立およびその機能解析を行っております。

また近年北海道大学大学院先端生命科学研究院の西村紳一郎らによって開発されたグライコプロッティング法により網羅的かつ定量的なグライコミクス (糖鎖) 解析が可能となりました。当グループではこの技術を取り入れ肝細胞癌切除症例の血清を解析したところ2種類の血清糖鎖が肝細胞癌の予後および再発に強く関わっていることを発見し報告しています。現在はこのような糖鎖がどのようにして癌の悪性度と関わっているのかを解明すべく日夜研究を進めています。

ジアシルグリセロールキナーゼ (DGK) はジアシルグリセロール (DG) をリン酸化してホスファチジン酸 (PA) を産生する酵素で、DGKの基質と反応産物であるDGとPAには様々な標的タンパク質があり重要なセカンドメッセンジャーとして機能しているとされております。中でもI型に分類されるDGK α は、肝細胞癌において発現と予後との相関や細胞増殖能との関連が報告されております。さらに、Tリンパ球のanergyを制御するとの報告もみられ、DGK α 阻害剤の肝細胞癌に対する直接的な抗癌作用および免疫系を介した抗癌作

用を検証すべく研究を進めております。

〈膵癌研究〉

近年技術的革新に伴い、分子標的薬を含めた様々な新規薬剤が開発されています。それより様々な癌腫の治療成績が向上しているにも関わらず、膵癌については現在も最も予後不良な癌の一つです。

当グループではメソテリンが膵癌や肝外胆管癌など様々な消化器癌の予後予測因子となりうることをこれまでに報告してきました。近年このメソテリンが癌治療のターゲットとなりうることを期待され、抗メソテリン抗体が開発されております。マウスを用い膵癌術後腹膜播種を模倣したモデルで、抗メソテリン抗体を用いた補助療法が有効である可能性を見出しました。現在抗メソテリン抗体の有効性のメカニズムについての解析を進めております。

2. 今年度の満足度・来年度の抱負・今後の方向性

今年度は相山健が肝細胞癌におけるEB1の機能解析を行い、本邦の癌研究における主たる学会 (日本外科学会総会、癌治療学会、癌学会等) での報告を行いました。また高橋秀徳が肝細胞癌での網羅的糖鎖解析を行いその機能について解析を行い同様に癌に関連した学会での発表を行いました。

今年度は相山健が大阪大学微生物病研究所分子ウイルス分野でCRISPR/Cas9という遺伝子編集の革新的な技術を、また岡田尚樹が千葉大学大学院理学研究科生体機能科学研究室でDGKについての知見を学外他教室へ勉強に行っていました。学内だけでなく学外の教室との交流を行うことができました。来年度も今年度に負けぬよう積極的に学会発表や論文投稿を行っていきたいと思います。また、新たな実験手法や技術に対しても積極的に学習・習得し、今後の研究に活用していきたいと思っています。

腫瘍(消化管)グループ



小丹枝 裕二 (2006年卒)



石黒 友唯 (2008年卒)



豊島雄二郎 (2008年卒)

1. 研究テーマ・概要

現在、消化管Gでは小丹枝裕二(2006年卒)、石黒友唯(2008年卒)、豊島雄二郎(2008年卒)の3名が大学院生として各講座にてリサーチを行っております。

小丹枝裕二は、北海道大学大学院医学研究科病理学講座腫瘍病理学分野において、マウス脳転移モデルを用いた、消化器癌脳転移の責任遺伝子の同定とそれらを標的とした治療法の開発を目的として研究を行っています。

石黒友唯は、北海道大学大学院医学研究科消化器外科学分野Iにて、消化器癌再発においてEMTに注目した循環腫瘍細胞の意義とその精密な検出法の開発をテーマに研究を行っています。腫瘍細胞を検出する方法は今日までは上皮系マーカーに着目したものが主流でありましたが、癌細胞が浸潤・転移する際は上皮間葉転換(epithelial-mesenchymal transition; EMT)を起こすことも知られており、間葉系マーカーにも焦点を当てた検出方法の確立を目指すことでこれまでよりも検出感度の向上を目指しています。

豊島雄二郎は、北海道大学遺伝子病制御研究所免疫機能学分野において、がん微小環境において産生されるIL-6による免疫抑制作用の機序解明と、IL-6シグナル遮断による効果的ながん治療への応用に関する研究を行っています。野生型およびIL-6欠損マウスの大腸がん肝転移モデルを作出し、肝臓内の腫瘍細胞および各種免疫担当細胞の解析を行い、IL-6による抗腫瘍免疫の抑制状態に起因する大腸がん肝転移メカニズムの解明を目指しております。

2. 今年度の満足度・来年度の抱負・今後の方向性

小丹枝：癌細胞株を用いたマウス脳転移モデルの作成手技を確立させており、3種類の細胞株で脳転移株を樹立しています。今後は、より脳転移を来し易い細胞株を樹立し、親株と脳転移株の遺伝子profileを解析することで責任遺伝子の探索を行い、分子標的治療や予後予測マーカーなど臨床応用への可能性を探索していく予定です。

石黒：2014年12月から胃癌患者を対象として、前向き試験により検体を採取しております。上皮系マーカーとしてCK(サイトケラチン)、間葉系マーカーとしてNカドヘリンをターゲットに癌細胞を同定しております。CTCを同定することで1)血行性転移、再発を来す危険性の予測、2)血行性転移・再発の早期発見、3)CTCの腫瘍学的特性(悪性度等)の把握、4)補助療法の治療効果モニタリング等に貢献できる可能性があります。大学での研究生活は残り1年少々となりましたので結果を出せるよう頑張りたいと思います。

豊島：マウス大腸がん肝転移モデルにおいて、生体内で産生されるIL-6が宿主免疫系の抑制を介して腫瘍細胞の転移を促進することを確認しました。来年度は、肝転移を制御する免疫細胞の同定とその機能解析、さらにIL-6関連因子を基軸とした分子メカニズムの解明を行うことで、大腸がん肝転移における抗腫瘍免疫応答の制御機構を明らかにし、効果的ながん治療への応用へと発展させたいと考えています。

(文責：石黒 友唯)

小児グループ



湊 雅嗣（2006年卒）

1. 研究テーマ・概要

〈肝芽腫におけるDNAメチル化異常の関与〉

遺伝子はプロモーター領域のDNAがメチル化されると発現が不活化されます。従って、癌抑制遺伝子のプロモーター領域が異常にメチル化されてしまった場合、その機能を発現することができなくなり細胞は癌化の方向へ導かれてしまいます。

この研究テーマは本多先生が埼玉県立がんセンター研究所で行っていたもので、これを引き続き北大で行っています。日本小児肝癌スタディーグループや神奈川県立こども医療センターからの検体の供与や、札幌医科大学分子生物学講座などの様々なバックアップのもと研究をさせていただいております。

現在の研究内容は肝芽腫の発生進展に関わるDNAメチル化異常の関与を解明することを目的としております。網羅的メチル化解析や発現アレイ等を用いて候補遺伝子の抽出し、臨床検体における実際のDNAメチル化率の計測・mRNA/たんぱく質の発現解析、臨床所見などとの関連の検討などを行っています。具体的には①予後予測との関与、②化学療法耐性との関与、③遠隔転移との関与についてそれぞれ解析しております。また、臨床所見と相関がみられた遺伝子については強制発現株を作成しin vitroで機能解析を行っています。最近の研究結果から異常脱メチル化の関与も重要であることがわかり、こちらも並行して解析を行っています。

2. 今年度の満足度・来年度の抱負・今後の方向性

満足度：小児グループ初の大学院生として研究を始め3年目が終了間近となりました。中期的目標として掲げていた3つ（①まず無事学位を頂けるような研究を遂げること、②小児グループとしての研究システム基盤を完成させること、③後代へ研究手法を指導できるようになること）は概ね順調にすすんでいると思われます。

方向性：今年度新たに行った二つの大きな網羅的メチル化解析の結果をさらに発現アレイなどを掛け合わせて絞込み、具体的な原因遺伝子を解明していく予定です。

（文責：湊 雅嗣）

2015年教室紹介

〈留学生〉

2015年教室紹介/留学生

■ 国内留学

柴崎 晋

卒業年：2002年

留学先：藤田保健衛生大学 総合消化器外科（上部消化管）

■ 近況報告

藤田保健衛生大学病院は、名古屋市と豊明市の境界部に位置しており、1435床を有する非常に大きな病院でもあります。今年は開校50周年を迎える大きな節目であり、新病棟も完成し、さらなる発展が見込まれています。そんな中、2015年4月より、藤田保健衛生大学・上部消化管外科に研修に越らせて頂いております。年間に胃癌手術が約200例弱、食道癌手術が約30例弱行われており、毎日が勉強の日々です。こちらの最大の特徴はロボット胃切除です。これまでに200例を超す症例の経験があり、さらには2014年9月から先進医療も始まり、2015年7月からは新機種Xiも導入され、今非常に熱い分野となっております。私自身も、こちらに来る前まではロボットの良さを十分にわかっていなかったのですが、今ではすっかりロボットの魅力の虜となっております。通常の腹腔鏡下手術も、進行癌症例がかなり多く、幽門側胃切除のD2郭清はもちろんのこと、胃全摘のD2-#10、D2-S、D2+S、D2+PSなど、多岐に及んだ手術を経験することができております。解剖学的なコンセプトもしっかりしており、これまで以上に局所解剖への理解が深まっております。食道癌に関してはこれまで指折り程度の経験しかなかったのですが、こちらでは腹臥位による胸腔鏡下/腹腔鏡下手術が行われており、半年ですでにこれまでの食道癌手術の経験を越え、新たな経験を積むことができております。それ以外にも、こちらでは一次～三次救急まで対応しているため、救急医療も非常に忙しく、虫垂炎、穿孔、イレウスなどは市中病院並に來ています。海外からの見学者も多く、特にアジア圏からの見学者が多く、国際交流も経験できます。そんな環境下ではありますが、宇山教授はじめ多くの先生方に優しくして頂き、楽しく有意義な時間を過ごすことができております。



新病棟へ引っ越し後の写真。相変わらずの「KY」ぶりを発揮して電話中の私。

住まいは、名古屋市の外れの緑区というところに住んでおります。わかりやすくいえば「あいの里」のようなところです。街中に行くには時間がかかるのですが、いわゆる閑静な住宅街であり、当初思っていたよりも快適に過ごせております。懸念されていた気候も思ったほどではなく、妻や子供たちもこちらの生活にすっかり順応しており、楽しそうに過ごしております。

このような機会を頂けまして、武富先生はじめご協力頂きました皆様にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。最後になりましたが、若い先生方へ一言。こちらでも、「医学博士」と「消化器外科専門医」の資格は非常に重視されております。これからの時代、この2つは非常に重要と思われます。計画性をもって取得できるように今のうちからしっかりと考えておいた方がよいと思いました。

■ 2015年の業績

《論文》

1. Shibasaki S, Takahashi N, Homma S, Nishida M, Shimokuni T, Yoshida T, Kawamura H, Oyama-Manabe N, Kudo K, Taketomi A. Use of transabdominal ultrasonography to preoperatively determine T-stage of proven colon cancers. *Abdom Imaging*. Aug; 40(6):1441-50, 2015.
2. Shibasaki S, Homma S, Yoshida T, Kawamura H, Takahashi N, Taketomi A. Epidermal Sutureless Closure of the Umbilical Base Following Laparoscopic Colectomy for Colon Cancer. *Ind J Surg*. (in press)
3. Shibasaki S, Kawamura H, Homma S, Yoshida T, Takahashi S, Takahashi M, Takahashi N, Taketomi A. A Comparison Between Fentanyl Plus Celecoxib And Epidural Anesthesia for Postoperative Pain Management Following Laparoscopic Gastrectomy. *Surg Today*. (in press)

《学会》

1. 柴崎晋、川村秀樹、吉田雅、本間重紀、高橋典彦、高橋周作、高橋昌宏、武富紹信：硬膜外麻酔を使用しない腹腔鏡下胃切除の周術期疼痛管理法の有効性。2015.3.4-6 第87回日本胃癌学会総会（広島）
2. 柴崎晋、川村秀樹、吉田雅、本間重紀、高橋典彦、武富紹信：当科における腹腔鏡下胃切除術の現状。2015.3.7-8 第

- 116回日本消化器病学会 北海道地方会（札幌）
- 3.柴崎晋、本間重紀、吉田雅、川村秀樹、高橋典彦、武富紹信：腹腔鏡下大腸切除術における実践的教育法。2015.4.16-18 第115回日本外科学会総会（名古屋）
- 4.柴崎晋、須田康一、石田善敬、稲葉一樹、角谷慎一、鈴木和光、梶原脩平、梅木祐介、後藤愛、中村謙一、中内雅也、古田晋平、石川健、宇山一郎：ロボット支援下噴門側胃切

- 除後の「観音開き法」食道胃吻合の経験。2015.11.6-7 第45回胃外科・術後障害研究会（名古屋）
- 5.柴崎晋、須田康一、石田善敬、稲葉一樹、吉村文博、鈴木和光、梶原脩平、梅木祐介、後藤愛、中村謙一、中内雅也、古田晋平、石川健、宇山一郎：ロボット支援下噴門側胃切除後「観音開き法」食道胃吻合の経験。2015.12.10-12 第28回日本内視鏡外科学会総会（大阪）

常俊 雄介

卒業年：2003年

留学先：堺市立総合医療センター救命救急センター救急外科

■ 近況報告

こんにちは、平成15年卒の常俊雄介です。私は4月より、堺市立総合医療センター救命救急センターで働かせていただいております。堺市は大阪市の南に位置する人口85万人の政令指定都市です。7月の新病院移転新築に合わせ、市内初の救命救急センターが開設されました。

なぜ救命救急？ということですが、卒後10年を数え、同期が皆いろんな道（移植、留学、内視鏡外科、乳腺…）へ進む中、私も自分の進むべき方向性について模索するようになり、やはり自分にとって、やっていて一番楽しいのは急性腹症であり、外傷手術であり、この分野＝Acute Care Surgeryをもっと深く勉強したいと考えるようになりました。

Acute Care Surgery(ACS)はTrauma Surgery, Emergency General Surgery, Surgical Critical Careを一体として取り扱う新たな外科領域です。といっても、日本、特に北海道においては、ACSの担い手は我々外科医に他なりません、ここ関西においては、阪大特殊救急部の存在もあり、外科医＝Oncologist、救急医＝Acute care surgeonの棲み分けが進んでいます。そこで、縁あって医局の先輩である臼井章浩先生（H7卒）に呼んでいただきました。昨今の人手不足の中、国内留学をお許し頂き、誠にありがとうございます。

私の属する救急外科は、専従医師16名からなり、重症外傷や重症中毒、熱傷、さらには多くの急性腹症や外科感染症に特化して対応しています。更にACSチームと、整形・脳外・救急チームに分かれています。ACSチームは、外科をサブスペシャリティとする若手救急医と我々外科医の混成チームです。私はいきなりほぼ自分にとって初めての経験である手術の指導的助手を任されています。その他、空いた時間で外科の定期手術にも入れて頂き、阪大の先生方と異文化交流しています。7月のオープンから4ヶ月で、手術件数は約150例、外傷緊急手術は、心刺傷、頸部刺傷、脾損傷、腎損傷など延べ約30件を数えます。

こちらに来て、同じ疾患や管理に対する救急医のアプローチと外科医のアプローチの違い、更には北大の文化と阪大の



私の上司である、臼井章浩先生（H7卒）と、あのJATECプログラムの創始者である横田順一郎副院長と日本ACS学会（福岡）にて

文化の違いなど、戸惑いと新鮮さを持って過ごしております。そして何より、自分は北大で育った外科医なんだというアイデンティティと、自分で後輩の助手をするようになって、改めて自分は今まで前立ちをして頂いた全ての先生方に守り導いて頂き、安全に手術をさせてもらっていたんだと再認識させていただきました。本当にこれまでありがとうございました。こちらで学んだことを将来北海道へ還元すべく今後ともがんばってまいります。

*追伸：もし外傷手術などに興味がある若手の先生方がいましたら、当方へご連絡頂けますと幸いです。NMB（＝難波、ミナミ）で歓迎させていただきます。

■ 2015年の業績

2015年3月 第51回腹部救急医学会総会（京都）
常俊雄介、笠島浩行、澤野武行、砂原正男、原豊、成瀬宏仁、遠山茂、木村純：右側結腸癌イレウスに対する治療戦略。

2015年7月 第70回日本消化器外科学会総会（浜松）
常俊雄介、大野陽介、澤野武行、笠島浩行、原豊、砂原正男、遠山茂、木村純：当科におけるinterval

appendectomy施行症例の検討。

2015年10月 第7回日本Acute Care Surgery学会学術集会（福岡）

常俊 雄介, 臼井 章浩, 天野 浩司, 中田 康城, 横田 順一郎, 木村 豊, 笠島 浩行, 砂原 正男, 木村 純：一外科医が関西に渡って見えた、北海道におけるACSの現状と今後。

2015年10月 JDDW2015（第13回日本消化器外科学会大会）（東京）

常俊 雄介, 大野 陽介, 澤野 武行, 笠島 浩行, 原 豊, 砂原 正男, 遠山 茂, 木村 純：バーキットリンパ腫治療経過中に発症した腸管気腫症の1例。

2015年11月 第77回日本臨床外科学会総会（福岡）

常俊 雄介, 臼井 章浩, 蛸原 健, 尾崎 貴洋, 加藤 文崇, 天野 浩司, 中田 康城, 横田 順一郎, 木村 豊, 大里 浩樹：外科と救急を融合した当院における若手育成～救命センター開設を経て。

正司 裕隆

卒業年：2007年

留学先：国立国際医療研究センター 肝炎・免疫研究センター

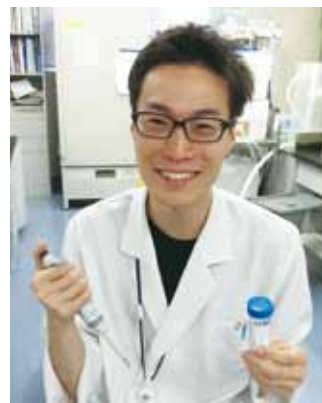
■ 近況報告

平成25年入局の正司裕隆です。平成26年4月より千葉県にある国立国際医療研究センター・肝炎免疫研究センターで研究に従事させていただいております。当センターには肝疾患部、肝炎情報センター部、免疫病理部、免疫制御部、消化器疾患部と5つの部門があり、私は肝疾患部に所属しております。肝疾患部では肝炎に対する診断、治療、予防に貢献することにより肝炎および肝がんの撲滅と免疫疾患対策を目指しています。最近、当疾患研究部のホームページがリニューアルされました。非常にまめに更新されておりますので、ご興味ございましたら一度お立ち寄りいただくとセンターの雰囲気を知っていただくことができるかと思います。

私の研究テーマですが、「肝細胞癌における血管新生前駆細胞TIE2 expressing monocytes (TEMs) の意義」です。肝細胞癌の増大には微小血管新生が関与しており、血管新生前駆細胞であるTEMsが腫瘍の増大に重要な働きをしていることが報告されています。そこで、私はTEMsの制御による抗腫瘍効果を検討しております。いままで研究の世界を知らなかったため0からのスタートとなり、センターのスタッフの先生方には日々ご迷惑をおかけしておりますが、非常に優しくかつ丁寧に指導していただいております。肝心の研究成果ですが、昨年はAmerican Association for Cancer Research (AACR)にポスターセッションで発表させていただく機会をいただき、海外での初発表を行ってまいりました。まだまだ、形に残る十分な成果を残せておりませんが、目の前の仕事に一生懸命取り組み、みなさまによりご報告ができるように日々精進する所存です。

また、当センターは東京駅まで約30分と非常に利便性に富んだ場所に位置しております。休みの日には電車を利用して日光や那須高原などに行きリフレッシュしております。近くにお立ち寄りの際にはお声をかけていただければ幸いです。

最後になりましたが、このような素晴らしい環境で研究をさせていただく機会を与えてくださった武富教授、消化器外科学分野Iの先生方に厚く御礼申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



■ 2015年の業績

《学会発表》

1. Shoji H, Kanto T, Yoshio S, Mano Y, Sugiyama M, Aoki Y, Taketomi A, Mizokami M. Comprehensive analyses of serum biomarkers associating with the increase of pro-angiogenic Tie2-expressing monocytes in patients with hepatocellular carcinoma. American Association for Cancer Research (AACR), Philadelphia 2015
2. 正司裕隆, 考藤達哉, 間野洋平, 青木孝彦, 由雄祥代, 杉山真也, 武富紹信, 溝上雅史：肝細胞癌における血管新生関連細胞（Tie2-expressing monocytes）誘導因子の探索. 第51回肝臓学会総会 熊本 2015

《原著論文》

1. Yoshio S, Sugiyama M, Shoji H, Mano Y, Mita E, Okamoto T, Matsuura Y, Okuno A, Takikawa O, Mizokami M, Kanto T. Indoleamine-2,3-dioxygenase as an effector and an indicator of protective immune responses in patients with acute hepatitis B. Hepatology. 2015 in press

■ 海外留学

大浦 哲

卒業年：2001年

留学先：Instructor in Surgery, Massachusetts General Hospital, Center for Transplantation Sciences, Harvard Medical School, Boston, USA

■ 近況報告

同門会の皆様、私は2001年卒業の大浦哲です。2012年11月に渡米しResearch Fellow, 2015年からはInstructor in Surgery（講師）としてMassachusetts General Hospital, Center for Transplantation Sciences,



Harvard Medical School, Bostonに勤務しております。私の勤務先は、大ボスProf. Dr. Cosimi が前臨床試験としてカニクイザルを用いた移植実験を1980年代に確立、ボスProf. Dr. Kawai が1990年代に参加し腎移植にドナー骨髄移植を併用し、術後一時的な免疫学的キメラ状態をレシピエント体内で誘導し免疫抑制剤から離脱できる免疫寛容をカニクイザルを用いて可能にしました。このアプローチは臨床の生体腎移植患者に適応され、最長13年間免疫抑制剤から離脱しています（Kawai T. New Engl J Med: 2008, 2013.）。これら免疫抑制剤を内服していない患者達から得た情報は移植免疫学のみならず、免疫抑制剤の内服していない事により高血圧・糖尿病・高脂血症・感染症等の免疫抑制剤関連の副作用が見られず、それにより移植患者にかかわる医療費の抑制が通常の免疫抑制剤を内服している患者達と比較して明確に成りました。現在、米国内ではMGH, Stanford Univ., Northwestern Univ.の3施設で生体腎移植に骨髄移植を併用し、プロトコルの違いによりキメラ状態の違いはありますが、免疫寛容を誘導する試験が進行し、学会・論文・Grant等で切磋琢磨しております。しかしながら、免疫寛容を臨床で誘導出来ているのは生体腎移植患者に限られているので、現在はより普遍的に臓器・細胞移植の種類に関わらず免疫寛容を誘導可能にする為に以下の目標をTeam内で掲げて日々精進しております。

- 1.To establish clinically applicable regimens to induce transplant tolerance for living- and deceased- donor transplantations.
- 2.To establish reliable assays to identify the immune status of induction tolerance.
- 3.To establish immune adjunctive therapies to facilitate chimerism and transplant tolerance.

MGHの大動物を用いた移植実験はCenter内で、腹部外科・胸部外科が共同し肝臓・腎臓・脾臓・心臓・肺移植をモデルに、免疫寛容の誘導を目指しております。種々の臓器・細胞移植を扱うことにより、臓器・細胞特異的免疫寛容

誘導の研究も進行しております。Center内には約10人のPI（Principal Investigator）が存在し、PIはそれぞれのTeamを統括し、研究の方向性を明確にして移植医療の進歩・論文作成・Grant獲得等を目指します。私の仕事に関しては、2015年より、自分の所属するTeam内での自分の研究活動のみならず、Transplant Centerに世界各国から来る国籍・人種・宗教・年齢・性別の異なるResearch Fellow達に対する教員としての指導が新たな仕事となり、言語の壁を超えた教育の難しさを実感しております。

生活面では、ボストンでの生活に慣れたおかげで、充実した日々を過ごしております。ここ2年の夏休みは、地続きのカナダで過ごし、アメリカ人とは異なるカナダ人の人間性に触れて、英気を養っております。もしアメリカ東岸にいらっしゃる事が有れば連絡を頂けると幸いです。特に初夏から秋にかけてのNew England地方は素晴らしく、環境名所も多数存在します。季節によってお勤めのレストランが自宅でのBBQに招待させて頂きます。最後に、外科医不足の中、海外で働かせて頂ける自分の立場を自覚し、背中を押して頂いた藤堂省教授・山下健一郎教授をはじめ、お世話になっている同門の先生方に深く感謝しております。

■ 2015年の業績

I.Original article

- 1.Lei J, Kim JI, Shi S, Zhang X, Machaidze Z, Lee S, Schuetz C, Martins PN, Oura T, Farkash EA, Rosales IA, Smith RN, Stott R, Lee KM, Soohoo J, Boskovic S, Cappetta K, Nadazdin OM, Yamada Y, Yeh H, Kawai T, Sachs DH, Benichou G, Markmann JF. Pilot Study Evaluating Regulatory T Cell-Promoting Immunosuppression and Nonimmunogenic Donor Antigen Delivery in a Nonhuman Primate Islet Allotransplantation Model. Am J Transplant. 2015; 15(10): 2739-49.
- 2.Oura T, Ko DS, Boskovic S, O'Neil JJ, Chipashvili V, Koulmanda M, Hotta K, Kawai K, Nadazdin O, Smith RN, Cosimi AB, Kawai T. Kidney versus Islet Allograft Survival after Induction of Mixed Chimerism with Combined Donor Bone Marrow Transplantation. Cell Transplant. 2015.
- 3.Oura T, Hotta K, Cosimi AB, Kawai T. Transient Mixed Chimerism for Allograft Tolerance. Chimerism. 2015.

II.Presentation

- 1.T. Oura, D. Ko, J. O'Neil, S. Boskovic, O. Nadazdin, K. Hotta, K. Kawai, B. Cosimi, T. Kawai. Kidney versus Islet Allograft Survival after Induction of Mixed Chimerism in Nonhuman Primates. American Transplant Congress 2015. Philadelphia, USA, Am J Transplant. 2015; 5(Supple2).
- 2.T. Oura, K. Hotta, J. Lei, J. Markmann, A. Dehnadi, G. Benichou, B. Cosimi, T. Kawai. Immunosuppression with Anti-CD40 mAb and Rapamycin for Islet and Kidney Co-Transplantation in Nonhuman Primates. American Transplant Congress 2015. Philadelphia, USA, Am J Transplant. 2015; 5(Supple2).
- 3.K. Hotta, A. Aoyama, T. Oura, M. Tonsho, Y.

Yamada, J. Allan, J. Madsen, B. Cosimi, G. Benichou, T. Kawai. Donor Specific Expansion of Regulatory T-Cells Was Associated With Allograft Tolerance Induced By Transient Mixed Chimerism in Nonhuman Primates. American Transplant Congress 2015. Philadelphia, USA, Am J Transplant. 2015; 5(Supple2).

- 4.K. Hotta, A. Aoyama, P. Putheti, Y. Yamada, T. Oura, R. Colvin, B. Cosimi, G. Benichou, T. Strom, T. Kawai. Activation of Th17 and Chronic Renal Allograft Rejection in Nonhuman Primates. American Transplant Congress 2015. Philadelphia, USA, Am J Transplant. 2015; 5(Supple2).

渡辺 正明

卒業年：2001年

留学先：カロリンスカ研究所移植外科学部門

■ 近況報告

Sweden、カロリンスカ研究所移植外科学部門で、移植臨床、細胞移植、免疫抑制剤に関する研究を行っています。2015年は移植手術件数も増え、年間約100例の肝臓移植、約100例の腎移植、約20例の膵臓移植を行っています。基礎研究での、細胞移植（膵島移植、肝細胞移植、幹細胞移植）に関するプロジェクトでは、カロリンスカ研究所内の幹細胞移植部門、免疫学部門と肝細胞移植研究部門との共同研究により新たな再生医療や免疫寛容誘導の臨床試験を開始すべく、準備、研究を進めています。言葉の壁や文化の差異に戸惑いながらも、たくさんの方々に支えていただいています。あっという間に毎日が過ぎてゆきますが、いただいた機会を十分に活かせるよう目の前の仕事に一生懸命取り組んでゆこうと思います。



■ 業績

《2014-2015年の実績論文》

Watanabe M, Lundgren T, Saito Y, Cerami A, Brines M, Östenson CG, Kumagai-Braesch M. A Nonhematopoietic Erythropoietin Analogue, ARA 290, Inhibits Macrophage Activation and Prevents Damage to Transplanted Islets. Transplantation. 2015 Dec 17. (Epub ahead of print)

Jorns C, Nowak G, Nemeth A, Zemack H, Mörk LM, Johansson H, Gramignoli R, Watanabe M, Karadagi A, Alheim M, Hauzenberger D, van Dijk R, Bosma PJ, Ebbesen F, Szakos A, Fischler B, Strom S, Ellis E, Ericzon BG. De Novo Donor-Specific HLA Antibody Formation in Two Patients With Crigler-Najjar Syndrome Type I Following Human Hepatocyte Transplantation With Partial Hepatectomy Preconditioning. Am J Transplant. 2015 Nov 2. (Epub ahead of print)

Yoshida T, Yamashita K, Watanabe M, Koshizuka Y, Kuraya D, Ogura M, Asahi Y, Ono H, Emoto S, Mizukami T, Kobayashi N, Shibasaki S, Tomaru U, Kamachi H, Matsushita M, Shiozawa S, Hirono S, Todo S. The Impact of c-Fos/Activator Protein-1 Inhibition on Allogeneic Pancreatic Islet Transplantation. Am J Transplant. 2015 Oct;15(10):2565-75.

Oura T, Yamashita K, Suzuki T, Watanabe M, Hirokata G, Wakayama K, Taniguchi M, Shimamura T, Furukawa H, Todo S. A technique for orthotopic liver transplantation in cynomolgus monkeys. Transplantation. 2014 Sep 27;98(6):e58-60.

《学会》

○Masaaki Watanabe, Torbjörn Lundgren, Yu Saito, Anthony Cerami, Michael Brines, Claes-Göran Östenson, and Makiko Kumagai-Braesch. A non-haematopoietic erythropoietin analogue, ARA 290, inhibits macrophage activation and prevents the transplanted islet graft damage.

5th EPITA winter symposium and 34th AIDPIT workshop. Innsbruck, Austria. January 25th-27th, 2015

○Masaaki Watanabe, Torbjörn Lundgren, Yu Saito, Anthony Cerami, Michael Brines, Claes-Göran Östenson and Makiko Kumagai-Braesch. A non-haematopoietic erythropoietin analogue, ARA 290, inhibits macrophage activation and prevents the transplanted islet graft damage.

American Transplant congress. Philadelphia, USA. May 2nd -6th, 2015

○Masaaki Watanabe, Torbjörn Lundgren, Yu Saito, Anthony Cerami, Michael Brines, Claes-Göran Östenson, Bo-Göran Ericzon, and Makiko Kumagai-Braesch. A non-hematopoietic erythropoietin analogue, ARA 290, inhibits macrophage activation and prevents damage to transplanted islets.

Strategic research programme in Diabetes. Stockholm, Sweden. May 21st -22nd, 2015

○Masaaki Watanabe, Torbjörn Lundgren, Yu Saito, Anthony Cerami, Michael Brines, Claes-Göran Östenson and Makiko Kumagai-Braesch. A non-haematopoietic erythropoietin analogue, ARA 290, inhibits macrophage activation and prevents the

transplanted islet graft damage.

European society for organ transplantation. Brussels, Belgium. September 13th -16th, 2015

○Masaaki Watanabe, Makiko Kumagai-Braesch, Erik Berglund, Carl Jorns, Sara Thunberg, Jarmo Henrikson, Torbjörn Lundgren, and Bo-Göran Ericzon. Ex-vivo generation of donor-antigen-specific regulatory T cells with co-stimulatory blockade: A comparison study between anti-CD80/86 mAbs and CTLA4-Ig.

European society for organ transplantation. Brussels, Belgium. September 13th -16th, 2015

○Masaaki Watanabe, Sabrina Moro, Carl Jorns, Lisa-Mari Mork, Magnus Ingelman-Sundberg, and Ewa Ellis. The efficacy of spheroidal hepatocyte on hepatocyte transplantation.

International Society for cellular therapy, Seville, SPAIN. September 24th-26th, 2015

○Masaaki Watanabe, Makiko Kumagai-Braesch, Ming Yao, David Berglund, Carl Jorns, Sara Thunberg, Sara Lind-Enoksson, Jarmo Henrikson, Torbjörn Lundgren, Felix Sellberg, Erik Berglund, Torbjörn Lundgren, and Bo-Göran Ericzon. Ex vivo generation of alloantigen-specific T regulatory cells using selective T-cell co-stimulation blockade.

14th Transplantation Science Symposium, Lorne, Australia. November 11th -13th, 2015

○Masaaki Watanabe, Sabrina Moro, Carl Jorns, Lisa-Mari Mork, Magnus Ingelman-Sundberg, and Ewa Ellis. The efficacy of spheroidal hepatocyte on hepatocyte transplantation.

IPITA-IXA-CTS 2015 Joint Congress, Melbourne, Australia. November 15th -19th, 2015

■ 近況報告

2015年8月より米国Massachusetts General HospitalでAbdominal Organ Transplant SurgeryのClinical Fellowとして勤務しています。

この度医局年報に投稿する機会をいただきましたので、まだ勤務開始後日が浅いですが近況報告をさせていただきます。



まずは職場についてですが、MGHという病院はマサチューセッツ州ボストンの町の中心にあり、いくつかあるHarvard Medical School関連病院の中核を担う病院です。病床数は約1000床で、手術室が約100室もある巨大な病院です。全米でも最も古い病院の一つで、世界で初めてエーテルによる吸入麻酔下での公開手術を行った病院として有名です。リサーチにも力を入れており、2015年の全米Hospital Rankingで1位となりました。

ここで勤務を始める前は旭川厚生病院で一般外科医として勤務しておりましたので、病院のスケールという意味ではギャップが大きいです。医療やサービスの質という意味では全米1位とはいっても日本の医療と比べてそこまでの大きな差は無いように感じています。

最も日本と違う点を挙げるとすれば、職種が細分化されており、仕事の役割分担がはっきりしていて、なおかつチーム医療として1人の患者を治療するのに非常に多くの人が関わるといふ点だと思います。

私の現職であるClinical Fellowという立場は、簡単に言うと病棟で臓器移植後の患者さんのケアに関わる全ての職種（移植外科医、腎臓移植内科医、肝臓移植内科医、移植感染症医、放射線科医、栄養士、薬剤師、看護師、NP等）をまとめる役割と言えるかと思います。

上述のように非常に多岐にわたる職種がチームとして治療に当たりますので、それぞれの方針を把握して上級医と相談し治療方針を立てるといふ責任があります。非常にコミュニケーション能力を要する仕事ですので、初めのうちは英語力の問題があり大変苦労しましたが、部下として非常に優秀な外科レジデントが2人（1年目、3年目）とNurse practitionerという病棟管理を主に行う看護師の助けを借りながら、何とか最近になりようやく仕事に慣れてきて、信頼されるようになってきました。

手術も基本的には全ての移植手術に入ることになっています。MGHでは年間約70例の肝移植（脳死約65例、生体約5-10例）、約120例の腎移植（脳死約60例、生体約60例）、約5例の脾移植を行っており、1年目フェローは主に腎移植レシipient手術に、2年目フェローは主に肝、脾移植レシipient手術に入ることとなっています。

ドナー手術は基本的にすべてフェローの仕事ですので、脳死ドナーが出れば我々が臓器を取りに行きます。最近ようやく独り立ちできるようになり、そろそろレジデントと2人でドナー手術に行っても良いと言われるまでになりました。腎移植も4か月で約40例の執刀をさせていただき、最近は上級医の監督下にレジデントと2人で手術をさせていただいております。

日々多忙でストレスもありますが、日本ではなかなかできないような経験を多くさせていただいており、大変充実した生活を送らせていただいております。

2年目は肝移植中心に手術を行い、病棟管理から解放される分時間がありますのでリサーチも併せて行うつもりであります。

2年間のフェローが終わった後の事はまだ具体的には考えていませんが、可能であればこちらでAttending surgeonのポジションを取得できればと思っています。

ボストンは観光にも非常にいい街ですので、もし学会や見学等で来られる機会がありましたら是非声をおかけください。リサーチでご活躍中の大浦先生とともにご案内致します。

最後にこのような留学の機会を与えて下さりました武富教授、同門の先生方にこの場を借りて心からお礼申し上げます。

■ 2015年の業績

1. Kimura S, Ozaki KS, Ueki S, Zhang M, Yokota S, Stolz DB, Geller DA, Murase N. Contribution of alloantigens to hepatic ischemia/reperfusion injury: Roles of NK cells and innate immune recognition of non-self. *Liver Transpl.* 2015 Sep 3. doi: 10.1002/lt.24330. [Epub ahead of print]
2. Yokota S, Yoshida O, Dou L, Spadaro AV, Isse K, Ross MA, Stolz DB, Kimura S, Du Q, Demetris AJ, Thomson AW, Geller DA. IRF-1 promotes liver transplant ischemia/reperfusion injury via hepatocyte IL-15/IL-15Rα production. *J Immunol.* 2015 Jun 15;194(12):6045-56. doi: 10.4049/jimmunol.1402505. Epub 2015 May 11.
3. Yoshida O, Dou L, Kimura S, Yokota S, Isse K, Robson SC, Geller DA, Thomson AW. CD39 deficiency in murine liver allografts promotes inflammatory injury and immune-mediated rejection. *Transpl Immunol.* 2015 Mar;32(2):76-83. doi: 10.1016/j.trim.2015.01.003. Epub 2015 Feb 7.
4. Skoko JJ, Wakabayashi N, Noda K, Kimura S,

- Tobita K, Shigemura N, Tsujita T, Yamamoto M, Kensler TW. Loss of Nrf2 in mice evokes a congenital intrahepatic shunt that alters hepatic oxygen and protein expression gradients and toxicity. *Toxicol Sci.* 2014 Sep;141(1):112-9. doi: 10.1093/toxsci/kfu109. Epub 2014 Jun 12.
- 5.Castellaneta A, Yoshida O, Kimura S, Yokota S, Geller DA, Murase N, Thomson AW. Plasmacytoid dendritic cell-derived IFN- α promotes murine liver ischemia/reperfusion injury by induction of hepatocyte IRF-1. *Hepatology.* 2014 Jul;60(1):267-77. doi: 10.1002/hep.27037. Epub 2014 May 27.
- 6.Wakabayashi N, Skoko JJ, Chartoumpekis DV, Kimura S, Slocum SL, Noda K, Palliyaguru DL,

- Fujimuro M, Boley PA, Tanaka Y, Shigemura N, Biswal S, Yamamoto M, Kensler TW. Notch-Nrf2 axis: regulation of Nrf2 gene expression and cytoprotection by notch signaling. *Mol Cell Biol.* 2014 Feb;34(4):653-63. doi: 10.1128/MCB.01408-13. Epub 2013 Dec 2.
- 7.Stewart RK, Dangi A, Huang C, Murase N, Kimura S, Stolz DB, Wilson GC, Lentsch AB, Gandhi CR. A novel mouse model of depletion of stellate cells clarifies their role in ischemia/reperfusion- and endotoxin-induced acute liver injury. *J Hepatol.* 2014 Feb;60(2):298-305. doi: 10.1016/j.jhep.2013.09.013. Epub 2013 Sep 20.

藤好 真人

卒業年：2003年

留学先：University Medical Center Groningen

■ 近況報告

平成15年卒業の藤好真人です。

現在オランダのフローニンゲンにあるUniversity Medical Center Groningen (UMCG)の肝胆膵・移植外科に留学し、肝移植における心停止後ドナー (DCD) と機械灌流保存法について勉強させていただいております。

UMCGでは年間約60例の肝移植が行われており、昨年10月よりDCDグラフトに対するdual hypothermic oxygenated perfusion (dHOPE) 法のRCTが開始されております。



UMCGにおける機械灌流研究の歴史は長く、連綿と続けられてきた腎移植における機械灌流研究はRCTにおいてその優位性を証明するに至り、その研究成果はOrgan Assist社の灌流装置開発に結実されております。そして、次のステップである肝移植および肺移植への応用は、UMCG全体における重要な研究テーマとなっております。

今年の私の仕事は動物実験による機械灌流法の基礎研究とRCT対象症例の臨床機械灌流の施行になります。

動物実験に関しましては、全ての動物実験に関してCCDという政府機関による承認を得なくてはならず、日本に比べかなりの手間と時間がかかりますが、その分動物実験施設の設備とスタッフのレベルは非常に高いです。

機械灌流法によるDCDへのドナー適応拡大では、臓器提供数の少ない日本でこそ求められている一方で、再移植の機会が限られる日本では確立が困難であるというジレンマが存在しております。

この留学で臨床機械灌流法とDCD肝移植を包括的に学んでいければと考えております。今後とも御指導御鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

川俣 太

卒業年：2005年

留学先：オーストラリア・ブリスベン（Queensland Institute of Medical Research, QIMR）

Conjoint Gastroenterology

■ 近況報告

私は2005年卒業の川俣太です。2015年12月からポスドクとしてオーストラリア・ブリスベンのQIMRに勤務しております。QIMRはクイーンズランド大学医学部とロイヤルブリスベンホスピタルのある広大な敷地の中に存在します。臨床研究に特化した施設で、人種はオージー（オーストラリア人）とヨーロッパ人とアジア人が5：3：2くらいの割合です。ラボは大変自由な雰囲気、みなでカフェに繰り出し、みんないつも笑顔で楽しんで仕事をしています。

留学先でのテーマは、Molecular Determinants of Metastatic Colorectal Cancerであり、原発大腸癌周囲の正常粘膜、原発大腸癌、肝転移巣からDNA、RNA、miRNAを抽出し、正常粘膜から原発大腸癌、および大腸癌の転移巣の成立に至る要因についてゲノム、エピゲノムレベルでの解明を目指しています。

ブリスベンは沖縄と同じ緯度で、真冬でも10度を下回る事があまりありません。真夏も35度くらいで過ごしやすいです。気候のよさではオーストラリアトップです。街は川沿いにあるリバーシティで、素晴らしいジョギングコースもあり、みんな走っています。また、海辺や公園には無料で使えるBBQ台があちこちにあり、スイッチ一つで鉄板が熱くなります。

楽しく有意義な留学生活を送っていますが、研究留学中には、どうしても、臨床外科医としての感覚が失われていくような懸念が常にあります。今後の展望ですが、Occupational English Test（OET）という英語試験の合格を目指しています。この英語試験は、英語を母国語としない外国人医師がオーストラリアで臨床医として働くにあたって、必要な試験となっています。なんとか留学中にOET試験の合格を目指し、オーストラリアでの臨床医としての臨床経験も得ることができればと思っています。

最後に、留学をさせて頂く機会を与えてくださった武富教授、消化器外科学分野Ⅰの先生方に厚く御礼申し上げます。

■ 2015年の業績

《論文》

- 1.Does reduced-port laparoscopic surgery for medically uncontrolled ulcerative colitis do more harm than good?

Homma S, Kawamata F, Shibasaki S, Kawamura H, Takahashi N, Taketomi A.

Asian J Endosc Surg. 2015 Oct 22. Epub ahead of print

- 2.Importance of luminal membrane mesothelin expression in intraductal papillary mucinous neoplasms.

Einama T, Kamachi H, Nishihara H, Homma S, Kawamata F, Sato M, Tahara M, Okada K, Kamiyama T, Taketomi A, Furukawa H, Todo S et al.

Oncol Lett. 2015 Apr;9(4):1583-1589.

- 3.Reduced-port laparoscopic total mesorectal excision for rectal carcinoma: What are we doing?

Homma S, Kawamata F, Shibasaki S, Ishikawa T, Kawamura H, Takahashi N, Taketomi A

SURGICAL TECHNIQUES IN RECTAL CANCER - TransAnal, Laparoscopic and Robotic Approach (Springer Book) 2015 in press



2015年教室紹介

〈新入局員〉

2015年教室紹介 / 新入局員



及川 芳徳

この度、北海道大学消化器外科Ⅰに入局させていただくことになりました及川芳徳と申します。

私は北海道登別市出身で、室蘭栄高校を卒業後東京に渡り、平成15年に東京慈恵会医科大学を卒業し、以後消化器・一般外科医として東京を中心に勤務をして参りました。

新宿の国立国際医療研究センターで5年、阿佐ヶ谷の河北総合病院にて7年勤務し、その間にポリヴィア、草津、沖縄、がん研有明病院大腸外科など多岐にわたる環境で勉強させていただきまして、今回念願の地元北海道、しかも伝統ある北海道大学消化器外科Ⅰに入局させていただくことができ大変光栄に存じます。

平成27年11月より最初の勤務地として札幌厚生病院で働かせていただいております。まだまだ不慣れでご迷惑をおかけしてばかりの日々ですが、諸先輩方のあらゆる作法を一日も早く修得して早く札幌厚生病院外科の一員として認めていただけるよう努力してまいります。

また道内の研究会や全国学会にも積極的に参加し、北海道大学消化器外科Ⅰの同門のたくさんの先生方にご挨拶していきたいと思っておりますので、今後御指導の程、何卒よろしくお願いいたします。



有倉 潤

私は中学、高校を旭川で過ごし、平成8年に旭川医科大学を卒業しました。学生時代は競技スキー部ノルディック部門に所属していました。夏は北大、札幌医大との三大学対抗駅伝で走りこみ、冬は旭岳や地元の全日本スキー連盟公認の富沢クロスカントリーコースで滑り込んでいました。卒後は旭川医科大学外科学第二講座に入局し、2年目から国立札幌病院外科と札幌北楡病院で4年間、北海道大学第一外科の諸先輩方に外科学一般から透析療法まで広くご指導いただきました。

旭川医科大学大学院時代は、水戸初代教授の時代から研究されている肝細胞移植療法に関連して、葛西教授のご指導のもと骨髄細胞から肝細胞への分化に関する研究をさせていただきました。

臨床にもどり勤務した道北病院（現在の旭川医療センター）では肺癌と気胸の症例が多く、ここから呼吸器外科の道に進むことになりました。現在は、卒後研修でお世話になった北海道がんセンター呼吸器外科で平成20年から呼吸器外科専門医として仕事をさせていただいています。

本年度から北海道大学第一外科同門会に入会させていただき、早速、小樽市立病院で肺癌手術を始めさせていただきました。今後も同門の諸先生方と協力して、増えている肺癌治療を中心に診療にあたらせていただきたいと思います。宜しくお願い致します。



安達 大史

このたび北大第一外科同門会に入会させていただきました、北海道がんセンター呼吸器外科の安達大史と申します。平成8年旭川医科大学卒業で、大学時代はラグビー部でフォワードの一員としてスクラムの最前列を務め、部活漬けの毎日を送っていました。大学卒業後は旭川医科大学第2外科に入局し、平成9年から2年間市立札幌病院で外科レジデントとしてお世話になりました。平成11年に当院レジデントになり外科3科（消化器、乳腺、呼吸器）の研修を行いました。その後呼吸器外科を志望して平成13年より現職にあります。当院院長となった近藤啓史先生が呼吸器外科を立ち上げて、全国に先駆けて開発してきた胸腔鏡手術を発展、定型化させてきた丁度その時期に、修練を積んで参りました。今後は呼吸器外科専門医として、原発性肺癌、転移性肺腫瘍、縦隔腫瘍、気胸などの得意分野で皆様に少しでも貢献できれば、と考えております。どうぞよろしくおねがいいたします。

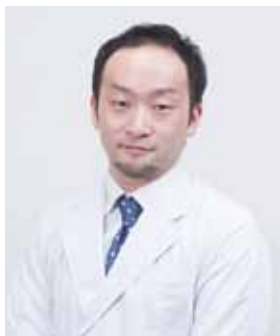
2015年教室紹介

〈2015年入局後期研修医〉

2015年教室紹介/2015年入局後期研修医

■ 新入局員アンケート

アンケート 項目	1 今年度の感想/来年度の抱負/ 今後興味ある専門分野など	2 進路(外科)を考え始めた時期 3 一外入局を考え始めた時期	4 一外入局を決めた時期 5 一外に入局した決定的な理由



今泉 健

1 現在6年目の今泉です。私は、卒業後5年間市中病院で研修を行い、今年度入局させて頂きました。大学病院での研修は、市中病院とは異なる点が多く、とても収穫の多い一年でした。まず臨床の面では、複雑な症例や進行した症例が多く、高度な手術や術前治療に関しては大学病院ならではの治療方針というものを勉強させて頂きました。執刀をする機会は市中病院と比べると少ないのは仕方がないことですが、一つの症例を深く検討すること、洗練された手術を間近で見ることができたのは大変貴重な経験になったと感じています。また、researchをされている大学院の先生方との距離が近く、researchの実際を身近に感じることができたことも収穫があった事の一つです。同期入局者にも恵まれ、楽しい医局行事もたくさんありました。

来年度からは、千葉にある国立がん研究センター東病院の大腸外科レジデントとして3年間勤務することになりました。医局に還元できるものを吸収できるように精一杯勉強してきたいと思っています。今後よろしくお願いします。

2 初期研修医の2年目

3 5年目の春頃

4 5年目の10月頃

- 5 ・大学で研究に従事してみたいと思った
・出身大学である北大を今後の基盤にしたかった
・移植、小児外科まで含めた関連領域の広さ

6 論文を投稿できたこと

7 論文を執筆すること

8 英語力



藤居 勇貴

1 北海道に戻ってきて早1年が経とうとしています。去年まで沖縄にいた自分にとって、久しぶりの雪は心踊るものでした。が、あまりの寒さのために一瞬でその思いは吹き飛びました。沖縄がちょっぴり恋しい今日この頃です。

病棟・ICUで1年過ごしました。手術する機会は減りましたが、新しく経験することも多く、成長できた部分も多いと感じます。特に、移植手術や肝・胆・膵の高難度手術を集中して見る機会はなかったため、非常に勉強になりました。術後管理に関しても、これまでの方法と異なる点も多く、改めて勉強する良い機会になったと思います。また、今年はoff-the-job trainingとして、腹腔鏡のトレーニングに費やす時間が増えました。ほくたけメディカルトレーニングセンター（通称「ほくたけ」）は設備が綺麗で使いやすく、様々なトレーニングキットがあり、非常に贅沢にトレーニングを行うことができました。

この1年間でだいぶ北海道の環境にも慣れてきたため、来年はもっとactivityを上げていきたいと思っています。外科知識の習得、手技の研鑽、論文作成、学会発表、趣味の充実などなど…やりたくて出来なかったことはたくさんあるため、少しでもやれることを増やしていきたいです。

最後になりますが、このような充実した1年を過ごすことが出来たのは、第一外科の諸先輩のおかげと存じます。この場を借りて感謝を申し上げます。自分も第一外科、ひいては北海道の医療のために力を尽くしていきたいと思っていますので、今後とも宜しくお願い致します。

2 中学生時代

3 大学5年のポリクリ時

4 後期研修医最終年の9月

- 5 レベルの高い外科医療ができると考えたため、
医局の雰囲気が良かったから

6 楽しい同期と知り合えたこと

7 移植の術前術後管理・肝切の助手経験

8 手技の向上・論文作成その他いろいろ

- 6 今年一年で特によかった出来事
7 今年一年で力がついたと思うこと

- 8 今年一年では不十分で課題と感じたこと



奥村 一慶

- 1 自分は関連病院で後期研修を2年間経験した後に入局したため、一般病院と大学病院の雰囲気の違いを感じた。市中病院では次から次へと患者が来、すぐに対処するか転院／紹介するかの振り分けも素早く行ったが、大学病院では患者・疾患に対しチームや科で頭をつき合わせて治療法をじっくり考えるというものだった。後期研修医の立場からは、ローテート期間はそのチームの疾患について集中的に勉強できた事が非常に有意義だった。特に術前カンファレンス前のチェック／文献検索などは、今後の医師生活においても重要なトレーニングであると感じ、来年度以降の臨床にも大いに活かしていきたいと思った。現在の興味のある専門分野は一番は小児外科であり、来年度以降は一般外科で広く研鑽を積み、外科／小児外科専門医取得にむけて勉強したい。

- 2 初期研修医2年目、当時は産婦人科志望だったが、より全身を広く診療できる手術科にいきたいと考えたため

- 3 外科志望になった段階で、入局は第一外科と決めていた
学生実習でローテーターの先生方が一番熱心であり、初期研修病院の外科は第一外科関連であったこともあり、特に他に候補はありませんでした

- 4 同上。一般病院での後期研修を入局の前に行ったのは、一般病院での小児外科診療を研修したいという理由のため

- 5 一番丁寧に、熱心に診療していると感じたから

- 6 数は少ないが、執刀させていただいた手術
小児外科の横隔膜ヘルニア根治術、CVカテ留置、消化管の腸切除/吻合などの基本的手技は大変勉強になった

- 7 画像の読影、特に肝胆脾領域は、今までは何となく所見を記載していたところを脈管の番号まで追求して読影できるようになった。また、小児外科での病棟／患者管理の基礎、ICUでの循環/呼吸管理は大きな収穫だったと思う

- 8 当たり前だが、手術の執刀は少ないので、今年勉強したことを来年度以降に活かしていきたい



坂本 沙織

- 1 2015年度新入局員 坂本沙織と申します。今年度は市立稚内病院で研修をさせていただいています。消化器一般外科手術・外来診療に加え、透析診療や外傷診療にも従事させていただき学ぶことが多い毎日です。菊地先生、三野先生、沢田先生のご指導のもと、優先的に様々な手術症例を経験させていただき、心より感謝申し上げます。

しかし振り返ると、上級医より与えてもらった機会に甘えてばかりの1年間だったと反省しています。今後は、主治医としての主体性を持って1例1例をマネジメントできるように、またチームの一員としての責任感を持って最善の治療を提供できるように研鑽していきたいと考えています。

来年度は出身大学の人事もあり外科診療を離れる一年間となることが予想されますが、「何処にいてもすること・できること・しなきゃいけないことはある。そしてその経験はいつか絶対に自分の糧になる」と武富教授から頂いた言葉を胸に、成長した姿で戻ってきたいと思っています。

- 2 大学時代の実習で消化器外科を回った時

- 3 初期研修臨床研修2年目の冬

- 4 医師3年目の冬

- 5 初期臨床研修病院（砂川市立病院）の一外の先生方の背中を見て憧れた

- 6 開腹手術を中心に手術症例を経験させてもらったこと

- 7 臨時入院・手術の際の優先順位や手術のセッティングなどを学ばせてもらう機会がありました

- 8 術前術後管理（ICU管理）、主体性を持った診療・手術、手術手技全般

アンケート
項目

1 今年度の感想/来年度の抱負/
今後興味ある専門分野など

2 進路(外科)を考え始めた時期
3 一外入局を考え始めた時期

4 一外入局を決めた時期
5 一外に入局した決定的な理由



村田 竜平

1 今年一年は、いろいろなグループを回らせていただき、手術、画像診断、また術後管理における流れの違いや要点を学ばせていただきました。各グループで要点は異なり、勉強になることばかりでした。来年は、手技的な面を伸ばすのはもちろんのこと、今年学んだことを生かしながら、より主体的に責任感を持って患者と接していけるよう日々精進していきます。

2 研修医2年目の秋

3 4年目の5月

4 4年目の6月

5 北海道出身であるため

6 実家に定期的に帰れたこと

7 論文の読み方・プレゼンテーション能力

8 発表のスキルや論文作成をこなす力

プレゼンテーションによって、疾患・手術に対して理解を深めることができた



大淵 佳祐

1 初期臨床研修を終えて、後期臨床研修医として1年目のスタートであったが、とても充実した1年間であったと思う。外科ローテートで各グループを見て回れるのはとても勉強になった。確かに執刀としての経験を積むのは難しいところがあるが、術前精査や術後管理の知識について、その科・グループの抑えるべきポイントを学べたと思う。また高難易度の手術を実際に体験したことで、今後に向けて強い動機づけとなった。またICUでも、移植手術前後の管理を通じて、全身管理について勉強する機会を得られたことは大きな収穫であった。

来年度は、基本手技を確実に習得し、積極的に心臓血管外科や呼吸器外科の手術にも参加して、外科専門医習得に必要な症例の確保を目標としたい。また外傷に関しても積極的に取り組んでいきたい。できればJATECのinstructor取得を目指す。

今後はまだ決まっていないが、肝胆脾に興味を持っている。

2 2年目の秋ごろ、それまでは整形外科志望

3 2年目秋ごろ

4 2年目2月

5 岩手医大か北大かで迷っていたが、わざわざ勧誘のためだけに秋田まで横尾先生、本間先生に来ていただいたこと。北海道なら、北大一外が一択であると聞いていたから。レベルの高いところで研鑽を積みたかったから

6 同期に恵まれたこと・北海道の食べ物がおいしいこと

7 全身管理・エコー・プレゼンテーション能力・文献検索

8 基本的な外科手技・執刀症例数・急性腹症の診断など。また検査の組み方・画像読影・診断から治療まで組み立てられるようになること

- 6 今年一年で特によかった出来事
- 7 今年一年で力がついたと思うこと

- 8 今年一年では不十分で課題と感じたこと



河北 一誠

1 今年初めて外科医として働きはじめた1年で、出会うことすべてが新鮮でした。本当にわからないことばかりで、術前管理・術後管理などで右往左往することも多く勉強することばかりでしたが、上級医の先生方のお力添えもありなんとか1年間を過ごすことができました。大学では市中病院ではめったに見ることのできない肝胆膵や移植などの高度な手術を目の当たりにすることができ、たくさんの刺激を受けることができた一方で、外病院で働く同期たちが自分たちで沢山執刀している現状を聞くと少し焦りを感じる時もあるのが正直な感想です。来年度は自分が主治医として働く機会も増えるかと思しますので、より一層気を引き締めて頑張っていきたいと思います。将来に関しては学生の頃より小児外科に興味があり、この一年でも気持ちは変わりませんでした。しかしながら将来に固執することなく、いろいろな分野に興味を持って学んでいければと考えています。

- 2 大学5年生

- 3 初期研修医2年目 秋

- 4 初期研修医2年目 秋

- 5 小児外科のみでなく、一般外科に関しても十分に学び、執刀する機会がある

- 6 麻酔の習得・移植医療に携われたこと

- 7 エコー

- 8 救急症例の対応力



小林 展大

1 4月から大学病院に勤務して、早9か月が経ちました。初めは何もかもがわからない状況でしたが、先生方のご指導もあり、ある程度この生活にも慣れてきました。大学病院での症例は市中病院では経験できないような濃い症例であったり、一流の手技を近くで見ることができ、とても勉強になっています。また、カンファレンスやjournal club等で論文検索をする機会が多かったのがとても印象的で、今後の勉強にも非常に役立つことと思います。

また病棟管理もさることながら、手術に関してはまだ全くと言っていいほど経験不足です。来年度以降は自分が執刀する機会も多くなると思うので、基本的な手術や緊急手術などを学んでいけたらと思います。

- 2 大学5、6年生ころ

- 3 初期研修医のとき

- 4 初期研修2年目の秋

- 5 関連病院の数

- 6 多くの同期に恵まれたこと

- 7 ICU管理・論文検索

- 8 自分一人で決断すること・実践的な経験

アンケート 項目	1 今年度の感想/来年度の抱負/ 今後興味ある専門分野など	2 進路(外科)を考え始めた時期 3 一外入局を考え始めた時期	4 一外入局を決めた時期 5 一外に入局した決定的な理由



佐野 修平

1 4月から医局員の一員として、多くのグループの先生方にお世話になり、たくさんのチャンスも与えてくださって本当に感謝しています。プレゼンの準備にも親身に付き合ってください、非常に勉強になりました。忘れがちな患者への配慮や関係性の築き方についても、改めて考えさせられました。また、ICU、麻酔科を3ヶ月ずつローテートしましたが、今後なかなか経験できないような症例や手技に携わる事ができ、非常に有意義な1年間を過ごせたと思っています。同期入局者にも恵まれ、みんなで語り合ったことや、忘年会の芸の練習をしたことは一生忘れない思い出になりました。来年以降は多くの症例を経験し、また、ひとつひとつの症例を厳かにしないよう心がけたいと思っています。将来的には腹腔鏡下手術で一人前と言われるよう、技術を磨いていきたいと思います。まだまだ未熟ですが、今後ともよろしくお願いします。

- 2 初期研修1年目
- 3 初期研修1年目
- 4 初期研修2年目の10月
- 5 初期研修の外科ローテートで素晴らしい先輩の先生方に会ったから
- 6 腹腔鏡下手術の執刀をすることができたこと
- 7 ICU・麻酔科で学んだ全身管理
- 8 学会発表の準備やプレゼンの仕方



矢部 沙織

1 去年と大きく違うのは、やはり外科を志すたくさんの同期とともに、多くの先輩方と働かせていただいたことです。人との関わりが大変多い一年でした。先輩方からは、手術手技というよりも普段の診療態度や、患者さんの長期予後や根治性を第一に考えた治療の選択など、基本的なことを学ばせていただきました。手技に関しても、少しでも空いた時間があればドライラボの時間などを使って、熱心に指導いただいたことに感謝しています。また、同期がたくさんいることは、こんなにいいことだと知ったのも入局してからです。未熟で落ち込むことも多かったですが、その何倍も、助けてもらったり刺激を受けたりする場面が多かったと思います。来年度は市中病院で働くのか、大学病棟で継続して働くのかはまだ分かりません。どちらにしても、与えられた場所で、与えられた仕事+αを精一杯頑張りたいと思います。また、初期研修から通じて、消化管分野に一番興味があるのは変わりません。

- 2 初期研修2年9月頃
- 3 初期研修2年9月頃
- 4 初期研修2年2月
- 5 第一外科の関連病院だったから
- 6 大学ならではの手術に入らせてもらったこと
- 7 手術の際に具体的なアプローチを考えること
- 8 執刀経験不足

- 6 今年一年で特によかった出来事
- 7 今年一年で力がついたと思うこと

- 8 今年一年では不十分で課題と感じたこと



田仲 大樹

1 今年度は市中病院で研修していましたが、手術症例は比較的幅広く、腹腔鏡での消化管手術はもちろんのこと、肝切除や膵頭十二指腸切除も手術に入って経験することができました。また肝破裂や特発性腹腔内出血など非常に刺激的な症例も紛れ込んでおり、改めて外科医を選択してよかったと思っています。ただ実質臓器、小児、乳腺系は症例が少なく、今後の専門はまだ決め兼ねています。全体を通してこの一年は一例一例がとても勉強になりました。この1年を糧にして、来年度はもう少し知力・度胸を付け、消化管の執刀もさせて頂けるよう精進して行きたいと考えています。何かと未熟でお手数をおかけすることと存じますが、ご指導。ご鞭撻の程お願いいたします。

- 2 大学入学時には大まかに外科系と考えており、最終的に確定したのは初期臨床研修中です
- 3 初期臨床研修中
- 4 初期臨床研修中
- 5 初期臨床研修中に研修病院まで教授直々に研修病院まで勧誘に来ていただいたため
- 6 Open ICUであったため、術後の重症患者の患者も経験できたこと
- 7 腹腔鏡の執刀を経験でき、左手も大分自由に動くようになったこと
- 8 抗癌剤治療に携わることが少なかったため、今後勉強が必要だと思っています

2015年教室紹介

〈秘書・クラーク・実験助手〉

2015年教室紹介 / 秘書・クラーク・実験助手

■ 医局秘書

川口 菜穂子

2011年2月より医局秘書として勤務しております川口菜穂子と申します。

働かせて頂いてから5年が経ち、雇用期間満了の為退職させて頂くことになりました。

初めは慣れないことも多く戸惑ったこともありましたが、先生方や秘書のみなさんに助けて頂き続けることができました。5年間はあっという間でしたが、貴重な経験をさせて頂き、また、楽しくお仕事をさせて頂いたことに感謝しております。5年間大変お世話になりました。ありがとうございました。

中澤 有紀

平成23年2月より医局秘書として働かせていただいております。当初3年の予定から5年へと雇用が延長になりましたが、まだまだ先のことと思っていた雇用期間満了時期が近づき、月日の過ぎる速さを痛感しております。

至らぬ私が5年間勤めることができましたのも、ひとえに温かくご指導いただきました先生方のお陰と、只々感謝の気持ちで一杯です。

在職中、大変お世話になり、本当にありがとうございました。

医局を離れましても、皆様方のますますのご活躍と教室のご発展をお祈りしております。

小原 美都

平成26年4月より秘書として勤務させていただいております。

担当業務は、医局長関連業務、同門会事務局、医学部学生・大学院学生関連業務（学位申請等）、業績収集、教室年報・HP関連業務で、6月の同門会歓迎会、12月の忘年会に出席させていただき、たくさんの方の先生方にお会いできる事や、先生方の会報誌へのご寄稿文を拝読できることをとても楽しみにしながら働かせていただいております。

この1年で10名の先生方の学位申請をお手伝いさせていただきましたことも印象深く、お忙しい先生方のお役に少しでも立つことができたかな、と嬉しく思っております。

どの業務でも、先生方のご要望に迅速にお応えできるよう、今後も精一杯努めてまいりますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

星川 愛弓

今年度の6月より医局秘書として働かせて頂いております星川愛弓と申します。担当業務は、主に先生方の出張・兼業業務等の事務管理、北海道外科学会事務局・小児外科関連事務局等の学会関連業務等を担当しております。務め始めて早数カ月が経ちました。まだまだ至らない点も多い私ですが、優しい先生方、先輩秘書さんに助けていただきながら、楽しく働かせていただいております。今後も日々精進して勤めて参りますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

■ 病棟クラーク

鈴木 愛

主な業務は診療記録関連です。

NCDへの症例登録、手術動画作成、診療記録の検索等を担当させて頂いております。

先生方のお役に立てるよう努力して参りますので、今後ともご指導のほど、お願い申し上げます。

■ 実験助手

三好 早香

TissueBank検体の処理と管理、in Vitro実験のお手伝いをさせて頂いております。与えられた実験のみをこなすのではなく、より効率的に実験データを出していくための提案や方法改善もしていけるよう、新たな知識・技術の習得に努めていきたいと考えております。どうぞ宜しくお願い致します。

五十嵐 瑠美

移植患者さんの免疫モニタリングアッセイ、実験のお手伝いをさせて頂いております。

よい実験結果につながるよう、正確な仕事をするように心掛けております。

どうぞよろしくお願いいたします。

小林 希

一外に所属させていただいてから気づいたらあっという間の9年でした。

少しでも足跡を残せただろうかと振り返っております。

vitro実験室のさらなる発展に微力ではありますが貢献できたらと思っています。

堀米 正敏

動物実験助手の堀米です。

最近は医局の実験室に出入りしています。

宜しくお願いします。

2015年業績紹介

(学会・論文・学位取得者・研究費一覧)

2015年業績紹介

2015年学会一覧

《学会発表（国内）》

2015.1.10 日本外科学会北海道地区生涯教育セミナー（札幌市）
Laparoscopic percutaneous extraperitoneal closure method (LPEC法) ～最近の知見および再発予防のために～
本多昌平

2015.1.23 第82回大腸癌研究会（東京都）
大腸癌に対する腹腔鏡下大腸切除術の治療成績
吉田雅、本間重紀、柴崎晋、川村秀樹、高橋典彦、武富紹信

2015.1.23 第6回周術期管理フォーラム（福岡市）
消化器外科領域におけるVTE予防（特別講演）
武富紹信

2015.1.24 肝移植周術期管理マネジメントフォーラム（京都市）
細胞治療による免疫寛容誘導（講演）
山下健一郎

2015.2.13 第17回大阪肝移植研究会（大阪市）
肝癌に対する肝移植適応の変遷
嶋村剛

2015.2.21 第102回北海道外科学会（札幌市）
若年性小腸GISTの1例
豊島雄二郎、旭火華、正村裕紀、高橋学、中川隆公、佐々木文章、
中西勝也

胃大腸重複癌に対してReduced port surgeryにより同時切除
を施行し得た4例
高橋徹、川村秀樹、本間重紀、太田拓児、吉田雅、柴崎晋、高橋
典彦、武富紹信

脳死肝移植にて救命しえた劇症肝炎5例の検討
石川倫啓、川村典生、腰塚靖之、高橋徹、後藤了一、山下健一郎、
武富紹信、嶋村剛

2015.2.27 第3回北海道小児外科フォーラム（札幌市）
中心静脈カテーテル関連血流感染症に対する抗生剤及びエタノー
ルロック療法による治療経験
柏倉さゆり、本多昌平、藤澤空彦、湊雅嗣、武富紹信

2015.3.4-6 第87回日本胃癌学会総会（広島市）
腹腔鏡下胃全摘の再建における当科の成績と方針
川村秀樹、柴崎晋、吉田雅、本間重紀、高橋典彦、武富紹信、高
橋周作、高橋昌宏

高齢者胃癌幽門側胃切除症例の検討
下國達志、木井修平、長津明久、西川眞

硬膜外麻酔を使用しない腹腔鏡下胃切除の周術期疼痛管理法の有
効性
柴崎晋、川村秀樹、吉田雅、本間重紀、高橋典彦、高橋周作、高
橋昌宏、武富紹信

2015.3.7-8 第116回日本消化器病学会北海道支部例会（札幌市）
当科における腹腔鏡下胃切除術の現状
柴崎晋、川村秀樹、吉田雅、本間重紀、高橋典彦、武富紹信

大腸癌に対する腹腔鏡下切除術の治療成績
吉田雅、本間重紀、柴崎晋、川村秀樹、高橋典彦、武富紹信

術前診断し得た後腹膜原発パラガングリオーマの1切除例
霜田佳彦、高橋典彦、吉田雅、柴崎晋、本間重紀、川村秀樹、武
富紹信

2015.3.9 第21回北海道肝移植適応研究会（札幌市）
脳死肝移植待機中の血液製剤由来HIV/HCV重複感染2症例―術
前準備の重要性
後藤了一、財津雅昭、川村典生、腰塚靖之、山本真由美、柏浦愛
美、太田稔、山下健一郎、嶋村剛

2015.3.14 第91回日本小児外科学会北海道地方会（札幌市）
原因不明のS状結腸狭窄を認めた乳児の2例
本多昌平、藤澤空彦、湊雅嗣、武富紹信

上下部消化管出血の治療に難渋している胆道閉鎖症の13歳女児例
藤澤空彦、本多昌平、志智俊介、湊雅嗣、武富紹信

2015.3.14 第14回東日本肝移植周術期研究会（東京都）
多発性肝嚢胞に対する肝移植における工夫
後藤了一、鈴木友己、山下健一郎、嶋村剛

2015.3.21 第27回北海道癌治療研究会学術講演会（札幌市）
消化器癌における脳転移モデルの作成と責任分子の同定
小丹枝裕二、西原広史、本間重紀、吉田雅、柴崎晋、川村秀樹、
高橋典彦、田中伸哉、武富紹信

2015.4.16-18 第115回日本外科学会定期学術集会（名古屋市）
改正臓器移植法が肝移植に及ぼした影響と推進に向けた現状での
次善策、今後の改善策について
嶋村剛

肝門部胆管癌に対する手術適応の限界（Video）：肝門部胆管癌
左葉系切除におけるTransparenchymal glissonean approach
（TGA）による手術限界
蒲池浩文、敦賀陽介、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、横尾英樹、
後藤了一、山下健一郎、神山俊哉、武富紹信

直腸癌に対するReduced port surgery
本間重紀、吉田雅、柴崎晋、川村秀樹、高橋典彦、武富紹信

胆道閉鎖症に対するMRCPと腹部超音波検査を併用した非侵襲
的診断法
本多昌平、湊雅嗣、藤澤空彦、岡田忠雄、武富紹信

高齢者胃癌幽門側胃切除症例の検討
下國達志、木井修平、長津明久、西川眞

Anti-CD28 antagonism using FR104, a monovalent Fab
antibody for the prolongation of human skin allograft
survival.
Zaitsu M, Issa F, Hester J, Milward K, Vanhove B, Wood K

99mTc-GSAシンチグラフィーとCTの3D fusion画像を用いた
残肝機能予測
敦賀陽介、蒲池浩文、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、横尾英樹、
神山俊哉、武富紹信

当科における解剖学的肝切除手技の定型化と治療成績の検討
折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、若山顕治、敦賀陽介、
蒲池浩文、武富紹信

vp3、4肝細胞癌の門脈腫瘍栓に対する術前放射線治療の有効性
の検討
柿坂達彦、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、

蒲池浩文、武富紹信

腹腔鏡下大腸切除術における実践的教育法

柴崎晋、本間重紀、吉田雅、川村秀樹、高橋典彦、武富紹信

下大静脈、右心房に腫瘍栓を伴う肝細胞癌に対する治療戦略

若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、折茂達也、蒲池浩文、敦賀陽介、嶋村剛、武富紹信

腹腔鏡下大腸切除術における術後鎮痛法の検討

吉田雅、本間重紀、柴崎晋、下國達志、崎浜秀康、川村秀樹、高橋典彦、武富紹信

機械灌流保存後マウス肝移植モデルにおける臨床的灌流法の再現

藤好真人、武富紹信

OCIAD2の高メチル化は肝芽腫の予後不良因子である

湊雅嗣、本多昌平、岡田忠雄、檜山英三、鈴木拓、武富紹信

低温酸素化体外灌流における水素ガスの肝保護効果

石川隆壽、深井原、島田慎吾、若山顕治、山下健一郎、嶋村剛、武富紹信

当院における肝移植後 *de novo* ドナー特異的抗HLA抗体陽性症例の検討

深作慶友、後藤了一、江本慎、川村典生、腰塚靖之、高橋徹、太田稔、青柳武史、鈴木友己、神山俊哉、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

膝島移植におけるプロテアソーム阻害による早期グラフト障害の抑制

小野仁、旭火華、吉田雅、腰塚靖之、渡辺正明、外丸詩野、江本慎、深井原、嶋村剛、武富紹信、藤堂省、山下健一郎

新規免疫抑制剤NK026680とdonor specific transfusionの併用によるドナー特異的免疫修飾効果

江本慎、後藤了一、柴崎晋、長津明久、小野仁、深井原、嶋村剛、雑賀寛、武富紹信、藤堂省、山下健一郎

肝細胞癌におけるAdenomatous polyposis coli結合蛋白EB1の新規バイオマーカーとしての可能性

相山健、横尾英樹、折茂達也、大畑多嘉宣、畑中佳奈子、畑中豊、松野宏、高橋秀徳、若山顕治、柿坂達彦、敦賀陽介、蒲池浩文、神山俊哉、武富紹信

肝細胞癌における癌幹細胞マーカーCD44およびCD133発現の意義

高橋秀徳、相山健、神山俊哉、佐々木彩実、大畑多嘉宣、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、敦賀陽介、蒲池浩文、横尾英樹、武富紹信

家族性アミロイドポリニューロパチー症例を2ndドナーとしたドミノ肝移植における手術手技

志智俊介、腰塚靖之、川村典生、高橋徹、後藤了一、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

高度狭窄進行大腸癌に対する術前成分栄養剤投与の検討

柏倉さゆり、本間重紀、吉田雅、柴崎晋、川村秀樹、高橋典彦、武富紹信

MR シネによる腸管機能不全の診断的活用

石川倫啓、本多昌平、湊雅嗣、藤澤空彦、岡田忠雄、武富紹信

尿管管膿瘍に対するドレナージ術の効果

柴田泰洋、本多昌平、湊雅嗣、藤澤空彦、岡田忠雄、武富紹信

胃大腸重複癌に対してReduced port surgeryにより同時切除を施行し得た4例

高橋徹、川村秀樹、本間重紀、太田拓児、吉田雅、柴崎晋、高橋典彦、武富紹信

術前診断し得た後腹膜原発バラングリオーマの1切除例

霜田佳彦、高橋典彦、吉田雅、柴崎晋、本間重紀、川村秀樹、武富紹信

2015.5.15-16 第69回手術手技研究会（高崎市）

DCD/ECDドナー肝機能修復法の実験的検討

武富紹信、深井原、藤好真人、石川隆壽

Reduced Port Surgeryによる胃癌・大腸癌同時切除の経験

川村秀樹、本間重紀、吉田雅、柴崎晋、高橋典彦、武富紹信

2015.5.20 第41回日本急性肝不全研究会（熊本市）

当院における、内科医と移植医が連携した急性肝不全に対する集学的治療

腰塚靖之、川村典生、高橋徹、後藤了一、柏浦愛美、山本真由美、岡本花織、太田稔、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

2015.5.21-22 第51回日本肝臓学会総会（熊本市）

非B非C型肝細胞癌に対する肝切除症例の検討

折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、若山顕治、武富紹信

予後、再発因子からみた肝内胆管癌の治療戦略

横尾英樹、神山俊哉、折茂達也、若山顕治、島田慎吾、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

2015.5.28-29 第33回日本肝移植研究会（神戸市）

成人肝移植症例のマネージメントの課題ー特に免疫抑制療法に関連する諸問題についてー（講演）

山下健一郎

急性肝不全患者治療における内科との連携：紹介から肝移植まで
腰塚靖之、川村典生、高橋徹、後藤了一、柏浦愛美、山本真由美、岡本花織、太田稔、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

当科における抗体関連グラフト障害に対する戦略 移植前クロスマッチ陽性から移植後抗ドナー抗体陽性まで

後藤了一、深作慶友、腰塚靖之、川村典生、高橋徹、青柳武史、太田稔、鈴木友己、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

2015.5.28-30 第52回日本小児外科学術学術集会（神戸市）

小腸ストーマをもつ短腸症候群に対し再STEPを施行することでQOL が改善した1幼児例（続報）

本多昌平、藤澤空彦、湊雅嗣、近藤享史、岡田忠雄、武富紹信

腸管原発悪性リンパ腫の検討

宮城久之、北河徳彦、新開真人、武浩志、望月響子、臼井秀仁、中村香織、田中水緒、田中祐吉

OCIAD2はDNAメチル化により制御される肝芽腫の癌抑制遺伝子である

湊雅嗣、本多昌平、小林希、三好早香、岡田忠雄、檜山英三、鈴木拓、武富紹信

出生前 Double bubble sign を認めた Gross 分類A型食道閉鎖と高位空腸閉鎖を合併した1例

河北一誠、本多昌平、藤澤空彦、湊雅嗣、近藤享史、武富紹信

縦隔下部横隔膜近傍まで口側盲端を認め診断に苦慮した Gross 分類C型食道閉鎖の1例

近藤享史、本多昌平、湊雅嗣、藤澤空彦、武富紹信

将来保健室の先生を目指す養護教育専攻学生（養教学生）が小児外科疾患の手術見学をする意義
岡田忠雄、本多昌平、藤澤空彦、湊雅嗣、近藤享史、武富紹信

2015.6.3 Meet the Surgeon and Professor（千葉市）
夢の見つけ方～消化器癌・移植医療の最前線（特別講演）
武富紹信

2015.6.11-13 第27回日本肝胆膵外科学会学術集会（東京都）
大腸癌同時肝転移に対する一期的腹腔鏡下肝・大腸切除術
神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

肝門部領域胆管癌における門脈塞栓の適応と成績
蒲池浩文、敦賀陽介、島田慎吾、若山顕治、柿坂達彦、折茂達也、横尾英樹、神山俊哉、武富紹信

大腸癌多発肝転移に対する下右肝静脈灌流領域を評価した術前ブラッキング
横尾英樹、神山俊哉、折茂達也、若山顕治、島田慎吾、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

Study of preoperative biliary drainage methods in neoadjuvant chemoradiation therapy for patients with pancreatic cancer.
Tsuruga Y, Kamachi H, Wakayama K, Orimo T, Kakisaka T, Yokoo H, Kamiyama T, Taketomi A

肝細胞癌に対する無水エタノールを用いた術前門脈塞栓術の検討
柿坂達彦、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

肝細胞癌再発に対するアイエーコール動注＋UFT経口併用療法
若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、折茂達也、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

肝切除術後胆管狭窄に対する皮下埋め込み式胆道内瘻術
折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

2015.6.27 第11回移植医療教育セミナー（東京都）
肝移植における免疫寛容誘導の実践（講演）
山下健一郎

2015.6.27 第21回北海道内視鏡外科研究会（札幌市）
当科における鏡視下手術教育プログラム
下國達志、吉田雅、本間重紀、崎浜秀康、川村秀樹、武富紹信

2015.6.27 第26回北海道肝がん研究会（札幌市）
術前黄疸を認め減黄後に切除した巨大肝細胞癌の1例
島田慎吾、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信、小川浩司

2015.6.27 第33回札幌肝胆膵研究会（札幌市）
これからの肝臓外科治療（特別講演）
武富紹信

2015.7.3 第83回大腸癌研究会（久留米市）
同時性肝転移を伴った大腸癌に対する腹腔鏡下肝・大腸同時切除の安全性
吉田雅、本間重紀、柴崎晋、下國達志、崎浜秀康、高橋典彦、川村秀樹、柿坂達彦、神山俊哉、武富紹信

2015.7.9-11 第19回日本癌免疫学会学術総会（東京都）
Crucial roles of IL-6 in suppression of antitumor immune responses under tumor microenvironments.
豊島雄二郎、北村秀光、大野陽介、金海俊、角田健太郎、本間重紀、川村秀樹、武富紹信

2015.7.10 第37回日本癌局所療法研究会（千葉市）
肝細胞癌遠隔転移症例に対するソラフェニブ治療の有効性
横尾英樹、神山俊哉、折茂達也、若山顕治、島田慎吾、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

2015.7.11 第107回日本臨床外科学会北海道支部総会（室蘭市）
Diffuse Cystic Malformationに合併した多発胃癌の1例
奥村一慶、吉田雅、下國達志、本間重紀、崎浜秀康、川村秀樹、武富紹信

腺癌を合併した難治性感染性肝嚢胞の1切除例
小林展大、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、島田慎吾、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信、岡田宏美

2015.7.11 第40回九州MMC研究会講演（福岡市）
消化器癌における腫瘍血管内皮細胞の機能解析（特別講演）
武富紹信

2015.7.15-17 第70回日本消化器外科学会総会（浜松市）
高度脈管浸潤を伴う肝細胞癌に対する治療戦略
武富紹信

NBNC肝細胞癌に対する外科治療戦略
横尾英樹、神山俊哉、折茂達也、若山顕治、島田慎吾、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

当科での短期・長期成績から考える腹腔鏡下胃切除の妥当な適応範囲について
川村秀樹、柴崎晋、吉田雅、本間重紀、高橋典彦、武富紹信

高齢者大腸癌切除症例での手術リスク評価におけるE-PASSスコアの有用性
下國達志、木井修平、長津明久、西川眞

Study of preoperative biliary drainage methods in neoadjuvant chemoradiation therapy for patients with pancreatic cancer.
Tsuruga Y, Kamachi H, Wakayama K, Orimo T, Kakisaka T, Yokoo H, Kamiyama T, Taketomi A

当科における肝細胞癌に対する腹腔鏡下肝切除術の治療成績
柿坂達彦、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

肝内胆管癌に対するリンパ節郭清、肝外胆管切除の意義についての検討
折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

横隔膜浸潤を伴う肝右葉巨大腫瘍に対する、LigaSureを用いた右横隔膜切除、肝右葉受動先行右系肝葉切除
若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、折茂達也、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

Preoperative elemental diet for obstructive colorectal cancers.
Yoshida T, Homma S, Kashiwakura S, Shibasaki S, Takahashi N, Kawamura H, Taketomi A

Preoperative diagnosis of lymph node metastasis by transabdominal ultrasonography in colon cancer patients.
Ishikawa T, Homma S, Shibasaki S, Nishida M, Yoshida T, Kawamura H, Takahashi N, Taketomi A

内視鏡手術時代における消化器外科医の教育～当教室でのearly exposure program～
本間重紀、吉田雅、柴崎晋、川村秀樹、高橋典彦、武富紹信

Postoperative pain management after laparoscopic gastrectomy.
Shichi S, Kawamura H, Yoshida T, Shibasaki S, Homma S, Takahashi N, Taketomi A, Takahashi S, Takahashi M

Postoperative analgesia after laparoscopic colorectal resection.
Chida K, Homma S, Yoshida T, Shibasaki S, Kawamura H, Takahashi N, Taketomi A

2015.7.15-17 第17回日本RNA学会学術総会（札幌市）
担がん生体におけるIL-6と関連したmiR-4708の新規機能
豊島雄二郎、北村秀光、大野陽介、寺田聖、大竹淳矢、本間重紀、川村秀樹、武富紹信

2015.7.23-24 第51回日本肝癌研究会（神戸市）
胆管内腫瘍栓を伴う肝細胞癌に対する肝切除症例の検討
折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

巨大肝癌右横隔膜浸潤症例に対する、横隔膜合併切除、肝右葉授動先行右系肝葉切除
若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、敦賀陽介、島田慎吾、蒲池浩文、武富紹信

2015.7.31-8.1 第4回Reduced port surgery forum（秋田市）
Reduced port surgeryによる胃癌・大腸癌同時切除の6例の経験
川村秀樹、本間重紀、吉田雅、柴崎晋、高橋典彦、武富紹信

2015.8.8 第64回北海道血管造影Interventional Radiology研究会（札幌市）
中肝静脈パッチ再建を要した大腸癌肝転移切除2例
大淵佳祐、神山俊哉、横尾英樹、島田慎吾、若山顕治、折茂達也、後藤了一、小林展大、河北一誠、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

2015.8.21 市民公開講座（士別市）
知っていますか？メタボと肝がん（特別講演）
武富紹信

2015.8.28-29 第42回日本膵切研究会（大阪市）
膵管チューブ抜去後の膵管空腸縫合不全に対し、拳上空腸盲端より経皮的に膵管チューブを再留置し得た膵頭十二指腸切除の1例
敦賀陽介、蒲池浩文、阿保大介、島田慎吾、若山顕治、折茂達也、横尾英樹、神山俊哉、武富紹信

2015.8.29-30 第117回日本消化器病学会北海道支部例会（札幌市）
胆管内腫瘍栓を伴う肝細胞癌に対する肝切除症例の検討
折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、若山顕治、島田慎吾、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

2015.9.3 広島ネクサパール承認6周年記念セミナー（広島市）
外科医が考える肝がんの集学的治療（特別講演）
武富紹信

2015.9.4 第11回広島臓器移植セミナー（広島市）
肝細胞癌に対する肝移植 全国集計結果から見てきたもの
嶋村剛

2015.9.5 第92回日本小児外科学会北海道地方会（札幌市）
1歳8ヵ月時に指摘された直腸会陰（皮膚）瘻の1例
宮城久之、本多昌平、河北一誠、湊雅嗣、守屋仁彦、武富紹信

臍腸瘻に対し根治術を施行した2児例
河北一誠、本多昌平、宮城久之、湊雅嗣、武富紹信

2015.9.19 第10回膵癌術前治療研究会（大宮市）
局所進行膵癌に対する術前化学放射線療法後切除検体における癌幹細胞の多様性と予後の検討
蒲池浩文、水上達三、敦賀陽介、島田慎吾、若山顕治、柿坂達彦、折茂達也、田原宗徳、横尾英樹、神山俊哉、武富紹信

2015.9.19 第103回北海道外科学会（札幌市）
局所進行膵癌に対する術前放射線化学療法症例における術前胆道ドレナージ法の検討
敦賀陽介、蒲池浩文、島田慎吾、若山顕治、折茂達也、横尾英樹、神山俊哉、武富紹信

当院における過去15年間の鼠径ヘルニア手術例の検討
江本慎、小林清二、河合朋昭、宮岡陽一、柴田賢吾、吉田祐一、小笠原和宏

一期的に腹部大動脈瘤手術と脳死膵腎同時移植を実施した1例
藤居勇貴、腰塚靖之、財津雅昭、川村典生、後藤了一、山下健一郎、鈴木友己、杉谷篤、若狹哲、松居喜郎、武富紹信、嶋村剛

自然退縮をきたした肝静脈腫瘍栓を伴う肝細胞癌の1例
村田竜平、神山俊哉、菅野宏美、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、島田慎吾、佐野修平、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

Umbilical portion/ vein graftによる中肝静脈再建を行った転移性肝癌の2切除例
大淵佳祐、神山俊哉、横尾英樹、島田慎吾、若山顕治、折茂達也、後藤了一、小林展大、河北一誠、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

2015.9.19 第36回日本大腸肛門病学会北海道地方会（札幌市）
高度狭窄大腸癌症例に対する術前成分栄養剤投与の有効性の検討
矢部沙織、本間重紀、吉田雅、下國達志、崎浜秀康、川村秀樹、武富紹信

双孔式人工肛門閉鎖時の器械吻合法・環状皮膚縫縮法の有用性の検討
奥村一慶、吉田雅、下國達志、本間重紀、崎浜秀康、川村秀樹、武富紹信

2015.9.26 第25回日本臨床化学会北海道支部例会（札幌市）
システインによるLDL酸化抑制に関する研究
橋本咲月、武田晴治、寺嶋駿、布田博敏、恵淑萍、千葉仁志

2015.10.1-3 第51回日本移植学会総会（熊本市）
臓器摘出医の育成に関して
川村典生、財津雅昭、腰塚靖之、後藤了一、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

フルコナゾールがタクロリムス血中濃度に及ぼす影響について
腰塚靖之、川村典生、財津雅昭、後藤了一、柏浦愛美、山本真由美、岡本花織、太田稔、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

2015.10.8-10 第74回日本癌学会学術総会（名古屋市）

OCIAD2 functions as a tumor suppressor in hepatoblastoma cells and is downregulated by DNA methylation.
Minato M, Honda S, Suzuki H, Hiyama E, Taketomi A

Vp3、4肝細胞癌の門脈腫瘍栓に対する術前放射線治療とAPC-binding protein EB1の発現の意義
相山健、折茂達也、横尾英樹、大畑多嘉宣、畑中佳奈子、畑中豊、松野吉宏、神山俊哉、武富紹信

IL-6 suppresses Type-1 antitumor immune responses in tumor microenvironments.
豊島雄二郎、北村秀光、大野陽介、金海俊、角田健太郎、本間重紀、川村秀樹、武富紹信

2015.10.8-11 JDDW2015（第13回日本消化器外科学会大会）（神戸市）
胆管内腫瘍栓を伴う肝細胞癌に対する肝切除症例の検討
折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

2015.10.11-12 第22回日本末病システム学会学術総会（札幌市）
肝臓外科領域における脂肪肝の諸問題
武富紹信

システインはLDLを安定化させて酸化を抑制する
橋本咲月、武田晴治、寺嶋駿、布田博敏、恵淑萍、千葉仁志

2015.10.17-20 第68回日本胸部外科学会定期学術集会（神戸市）
肝細胞癌肺転移症例に対する外科的治療の新しい適応基準の提唱
相山健、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、蒲池浩文、敦賀陽介、武富紹信

2015.10.29-31 第53回日本癌治療学会学術集会（京都市）
Translational implication of four aberrantly methylated genes in hepatoblastoma.
Honda S, Minato M, Miyagi H, Hiyama E, Taketomi A

肝細胞癌肺転移初回切除後10年以上生存4例の検討
相山健、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、島田慎吾、高橋秀徳、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

肝癌細胞株における浸潤能と糖鎖異常の解析
高橋秀徳、柿坂達彦、神山俊哉、相山健、島田慎吾、若山顕治、折茂達也、敦賀陽介、蒲池浩文、横尾英樹、西村紳一郎、武富紹信

2015.10.31-11.1 第55回日本臨床化学会年次学術集会（吹田市）
LDL酸化に及ぼすアミノ酸の影響に関する研究
橋本咲月、武田晴治、寺嶋駿、布田博敏、恵淑萍、千葉仁志

2015.11.13 第42回日本臓器保存生物医学会学術集会（盛岡市）
低温灌流時の酸化的リン酸化と細胞内シグナルの制御～尿管上皮を用いた検討
深井原、島田慎吾、若山顕治、石川隆壽、山下健一郎、嶋村剛、武富紹信

2015.11.13-14 第70回日本大腸肛門病学会学術集会（名古屋）
Stage IV大腸癌に対する腹腔鏡下手術の安全性
吉田雅、本間重紀、柴崎晋、下國達志、崎浜秀康、高橋典彦、川村秀樹、武富紹信

家族性大腸腺腫症の術後30年目に発生した結腸人工肛門部癌の

1例
今泉健、本間重紀、吉田雅、下國達志、崎浜秀康、川村秀樹、武富紹信

2015.11.14 第8回ヘルニアを学ぶ会（札幌市）
LPEC施行3ヵ月後に対側再発した1幼児例
本多昌平、宮城久之、古来貴寛、川村秀樹、武富紹信

2015.11.18-20 第44回日本免疫学会学術総会（札幌市）
Blocking of IL-6-signal cascade improves Type-1 immune responses in tumor microenvironment.
豊島雄二郎、北村秀光、大野陽介、角田健太郎、大竹淳矢、寺田聖、金海俊、本間重紀、川村秀樹、武富紹信

2015.11.19-20 第26回日本消化器癌発生学会総会（鳥取市）
肝細胞癌におけるAdenomatous polyposis coli結合蛋白EB1と浸潤の関連性
相山健、横尾英樹、折茂達也、大畑多嘉宣、柿坂達彦、畑中佳奈子、畑中豊、松野吉宏、高橋秀徳、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、神山俊哉、武富紹信

2015.11.25 第9回肝臓内視鏡外科研究会（福岡市）
上腹部開腹歴のある症例に対する腹腔鏡下肝切除の検討
若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、島田慎吾、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

2015.11.26-28 第77回臨床外科学会総会（福岡市）
臓器移植の発展と解決すべき問題点：改正臓器移植法が肝移植に及ぼした影響と推進に向けた活動
嶋村剛

当科における局所進行癌に対する術前化学放射線療法の問題点
蒲池浩文、敦賀陽介、島田慎吾、若山顕治、折茂達也、横尾英樹、神山俊哉、武富紹信

肝内胆管癌の治療成績向上を目指した集学的治療戦略
横尾英樹、神山俊哉、折茂達也、若山顕治、島田慎吾、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

術前に減黄処置を必要とした胆管内腫瘍栓合併肝細胞癌に対する肝切除症例の検討
折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、若山顕治、島田慎吾、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

チューター制による内視鏡外科技術認定医合格への取り組み
下國達志、吉田雅、本間重紀、崎浜秀康、川村秀樹、武富紹信

同時性肝転移を伴った大腸癌に対する腹腔鏡下大腸・肝同時切除の安全性
吉田雅、本間重紀、柴崎晋、下國達志、崎浜秀康、高橋典彦、川村秀樹、武富紹信

顕微鏡的門脈侵襲を有する肝細胞癌の臨床病理学的検討
島田慎吾、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

腺癌を合併した難治性感染性肝嚢胞の1切除例
小林展大、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、島田慎吾、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信、岡田宏美

長期生存し得た横行結腸内分泌細胞癌の1切除例
今泉健、本間重紀、吉田雅、下國達志、崎浜秀康、高橋典彦、川村秀樹、武富紹信

肺巨細胞癌の小腸転移が疑われた腸重積の1切除例
藤居勇貴、本間重紀、吉田雅、今泉健、下國達志、崎浜秀康、高橋典彦、川村秀樹、武富紹信

2015.11.27-29 第57回日本小児血液がん学会学術集会（甲府市）

肝芽腫の化学療法抵抗性に関わる DNA メチル化異常解析
DNA methylation associated with chemoresistance in hepatoblastomas.

本多昌平、湊雅嗣、宮城久之、檜山英三、武富紹信

2015.12.3-4 第28回日本バイオセラピー学会学術集会総会（川越市）

がん微小環境下におけるIL-6シグナル遮断による大腸がん免疫治療

豊島雄二郎、大野陽介、金海俊、寺田聖、角田健太郎、本間重紀、川村秀樹、武富紹信、北村秀光

2015.12.5 第108回日本臨床外科学会北海道支部例会（札幌市）
健診を契機として、偶発的に診断された下大静脈原発悪性腫瘍の1切除例

大淵佳祐、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、島田慎吾、藤居勇貴、敦賀陽介、蒲池浩文、後藤了一、岡田宏美、三橋智子、嶋村剛、武富紹信

大腸癌の循環腫瘍細胞と骨髄腫瘍細胞～予後予測因子としての比較検討～

崎浜秀康、石黒友唯、吉田雅、下國達志、本間重紀、川村秀樹、武富紹信

大腸癌術後9年目で孤立性腋窩リンパ節転移を来した1例
矢部沙織、本間重紀、吉田雅、下國達志、崎浜秀康、川村秀樹、武富紹信

巨大多発性肝嚢胞に対し手術治療が有効であった2例
奥村一慶、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、島田慎吾、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

膵十二指腸動脈アーケードを温存し膵頭十二指腸切除術を施行し得た1例
藤居勇貴、蒲池浩文、敦賀陽介、島田慎吾、若山顕治、折茂達也、横尾英樹、神山俊哉、武富紹信

A型肝炎ウイルスによる劇症肝炎に対し脳死肝移植を施行した1例

河北一誠、腰塚靖之、川村典生、財津雅昭、後藤了一、柏浦愛美、山本真由美、岡本花織、太田稔、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

2015.12.10-12 第28回日本内視鏡外科学会総会（大阪市）
当科におけるReduced port gastrectomyの方法と成績
川村秀樹、吉田雅、下國達志、崎浜秀康、本間重紀、武富紹信、高橋昌宏

当科における段階的鏡視下手術教育プログラムー初期教育における有用性の検討ー
下國達志、本間重紀、吉田雅、崎浜秀康、川村秀樹、武富紹信

高齢者大腸癌に対する腹腔鏡下大腸切除術の検討
吉田雅、本間重紀、下國達志、崎浜秀康、高橋典彦、川村秀樹、武富紹信

胃大腸重複瘻に対してReduced port surgeryでの同時切除6例の検討
今泉健、本間重紀、吉田雅、下國達志、崎浜秀康、高橋典彦、川

村秀樹、武富紹信

2015.12.12 HULT PRIZE @Hokkaido（札幌市）

Water changes the World.

Hashimoto S, Yamada M, Takimoto M, Nagai Y

《学会発表（国際学会）》

2015.3.11-13 British Transplantation Society Annual Congress, Bournemouth, England

Prevention of human skin rejection by selective blockade of CD28 costimulatory signaling.

Zaitu M, Issa F, Hester J, Milward K, Vanhove B, Wood K

2015.5.2-6 American Transplant Congress 2015, Philadelphia, USA

The higher MFI of *de novo* donor-specific anti-HLA antibodies is correlated with graft fibrosis progression in living donor liver transplantation.

Fukasaku Y, Goto R, Emoto S, Kawamura N, Koshizuka Y, Takahashi T, Ota M, Aoyagi T, Yamashita K, Taketomi A, Shimamura T

Proteasome inhibitor Bortezomib prevents early graft failure after islet transplantation.

Ono H, Asahi Y, Yoshida T, Koshizuka Y, Watanabe M, Tomaru U, Kobayashi N, Emoto S, Fukai M, Taketomi A, Todo S, Yamashita K

In Vivo Expansion of Donor-Specific Regulatory T cells by a New Triazolopyrimidine Derivative and Donor-Specific Transfusion.

Emoto S, Goto R, Shibasaki S, Nagatsu A, Ono H, Igarashi R, Fukai M, Shimamura T, Saiga K, Murakami M, Taketomi A, Todo S, Yamashita K

2015.6.13 IASGO Advanced Post-Graduate Course in Tokyo, Tokyo

Current Topics in Liver Cancer

Taketomi A

2015.7.8-11 The ILTS 21st Annual International Congress, Chicago, USA

Development of machine perfusion method in the mouse model of liver transplantation.

Fujiyoshi M, Fukai M, Taketomi A

2015.8.23-26 14th Congress of the Asian Society of Transplantation (CAST2015), Singapore

Signal transduction during hypothermic oxygenated conditions in human renal tubular cells.

Fukai M, Ishikawa T, Wakayama K, Shimada S, Kimura T, Yamashita K, Shimamura T, Taketomi A

HYDROGEN GAS AMELIORATES HEPATIC REPERFUSION INJURY AFTER HYPOTHERMIC MACHINE PERFUSION FOR DONOR AFTER CARDIAC DEATH (DCD) GRAFT IN ISOLATED PERFUSED RAT LIVER.

Ishikawa T, Fukai M, Wakayama K, Shimada S, Fujiyoshi M, Kimura T, Yamashita K, Shimamura T, Taketomi A

2015.9.13-16 17th Congress of the European Society for Organ Transplantation (ESOT2015), Brussels, Belgium

A Clinical trial of cell therapy-based tolerance induction in living donor liver transplantation: An update.

Yamashita K, Goto R, Zaitzu M, Nagatsu A, Oura T, Watanabe M, Aoyagi T, Suzuki T, Shimamura T, Kamiyama T, Sato N, Sugita J, Hatanaka K, Demetris AJ, Bashuda H, Okumura K, Todo S

Time course of autophagy and oxidative phosphorylation during hypothermic oxygenated conditions and subsequent re-warming in human renal tubular cell line (HK2).

Fukai M, Ishikawa T, Wakayama K, Shimada S, Fujiyoshi M, Kimura T, Yamashita K, Shimamura T, Taketomi A

Sub-normothermic oxygenated machine perfusion ameliorated recipient survival after mouse liver transplantation using DCD grafts.

Fujiyoshi M, Fukai M, Taketomi A

HYDROGEN GAS AMELIORATES HEPATIC REPERFUSION INJURY AFTER HYPOTHERMIC MACHINE PERFUSION FOR DONOR AFTER CARDIAC DEATH (DCD) GRAFT IN ISOLATED PERFUSED RAT LIVER.

Ishikawa T, Fukai M, Wakayama K, Shimada S, Fujiyoshi M, Kimura T, Yamashita K, Shimamura T, Taketomi A

2015.9.30-10.2 2nd International Workshop for Clinical Tolerance, Chicago, IL, USA

A Clinical trial of cell therapy-based tolerance induction in living donor liver transplantation: An update. "Invited speaker".

Yamashita K and Todo S

2015.11.13-17 AASLD Liver Meeting 2015, San Francisco, USA

Significance of functional hepatic resection rate using 3D fusion image of CT and 99mTc-galactosyl human serum albumin scintigraphy.

Tsuruga Y, Kamiyama T, Kamachi H, Shimada S, Wakayama K, Orimo T, Yokoo H, Taketomi A

2015.11.15-19 IPITA-IXA-CTS 2015 Joint Congress, Melbourne Australia

A Proteasome Inhibitor, Bortezomib Prevents Pancreatic Islet Graft Loss After Transplantation.

Ono H, Asahi Y, Yoshida T, Koshizuka Y, Watanabe M, Tomaru U, Kobayashi N, Emoto S, Fukai M, Shimamura T, Taketomi A, Todo S, Yamashita K

Peroxisome proliferator-activated receptor-gamma agonist, pioglitazone, prevents early graft loss in canine islet autotransplantation, due to the prevention of graft apoptosis.

Asahi Y, Yamashita K, Watanabe M, Ogura M, Ono H, Emoto S, Nagatsu A, Yoshida T, Koshizuka Y, Taketomi A, Todo S

2015年論文一覧

《論文発表》

Matsuzawa F, Einama T, Abe H, Suzuki T, Hamaguchi J, Kaga T, Sato M, Oomura M, Takata Y, Fujibe A, Takeda C, Tamura E, Taketomi A, Kyuno K. Accurate diagnosis of axillary lymph node metastasis using contrast-enhanced ultrasonography with Sonazoid. *Mol Clin Oncol*. 2015 Mar;3(2):299-302.

Einama T, Kamachi H, Nishihara H, Homma S, Kanno H, Ishikawa M, Kawamata F, Konishi Y, Sato M, Tahara M, Okada K, Muraoka S, Kamiyama T, Taketomi A, Matsuno Y, Furukawa H, Todo S. Importance of luminal membrane mesothelin expression in intraductal papillary mucinous neoplasms. *Oncol Lett*. 2015 Apr;9(4):1583-1589.

Kitagawa N, Shinkai M, Take H, Mochizuki K, Asano F, Usui H, Miyagi H, Kido T, Kurauchi N, Osaka H, Yamashita S. Mediastinoscopic extended thymectomy for pediatric patients with myasthenia gravis. *J Pediatr Surg*. 2015 Apr ;50(4):528-30, 2015.

Kitagawa N, Shinkai M, Mochizuki K, Usui H, Miyagi H, Nakamura K, Tanaka M, Tanaka Y, Kusano M, Ohtsubo S. Navigation using indocyanine green fluorescence imaging for hepatoblastoma pulmonary metastases surgery. *Pediatr Surg Int*. 2015 Apr;31(4):407-11.

Zaitzu M, Yamashita K, Shibasaki S, Tsunetoshi Y, Fukai M, Ogura M, Yoshida T, Igarashi R, Kobayashi N, Umezawa K, Todo S. 3-[(dodecylthiocarbonyl) methyl]-glutarimide attenuates graft arterial disease by suppressing alloimmune responses and vascular smooth muscle cell proliferation. *Transplantation* 2015 May;99(5): 948-56, 2015

Shimada S, Fukai M, Wakayama K, Ishikawa T, Kobayashi N, Kimura T, Yamashita K, Kamiyama T, Shimamura T, Taketomi A, Todo S. Hydrogen Sulfide Augments Survival Signals in Warm Ischemia and Reperfusion of the Mouse Liver. *Surg Today* 2015 Jul;45(7):892-903, 2015

Shibasaki S, Takahashi N, Homma S, Nishida M, Shimokuni T, Yoshida T, Kawamura H, Oyama-Manabe N, Kudo K, Taketomi A. Use of transabdominal ultrasonography to preoperatively determine T-stage of proven colon cancers. *Abdom Imaging*. Aug;40(6):1441-1450, 2015.

Matsuzawa F, Omoto K, Einama T, Abe H, Suzuki T, Hamaguchi J, Kaga T, Sato M, Oomura M, Takata Y, Fujibe A, Takeda C, Tamura E, Taketomi A, Kyuno K. Accurate evaluation of axillary sentinel lymph node metastasis using contrast-enhanced ultrasonography with Sonazoid in breast cancer: a preliminary clinical trial. *Springerplus*. 2015 Sep;17:4:509.

Kamiyama T, Yokoo H, Kakisaka T, Orimo T, Wakayama K, Kamachi H, Tsuruga Y, Yamashita K, Shimamura T, Todo S, Taketomi A. Multiplication of alpha-fetoprotein and protein induced by vitamin K absence-II is a powerful predictor of prognosis and recurrence in hepatocellular carcinoma patients after a hepatectomy. *Hepatol Res*. 2015 Oct;45(10):E21-31.

Homma S, Kawamata F, Shibasaki S, Kawamura H, Takahashi N, Taketomi A. Does the reduced port laparoscopic surgery for medically uncontrolled ulcerative colitis do more harm than good? *Asian J Endosc Surg*. 2015 Oct 22. doi: 10.1111/ases.12250. [Epub ahead of print]

Yoshida T, Yamashita K, Watanabe M, Koshizuka Y, Kuraya D, Ogura M, Asahi Y, Ono H, Emoto S, Mizukami T, Kobayashi N, Shibasaki S, Tomaru U, Kamachi H, Matsushita M, Shiozawa S, Hirono S, Todo S. The Impact of c-Fos/Activator Protein-1 Inhibition on Allogeneic Pancreatic Islet Transplantation. *Am J Transplant*. Oct;15(10):2565-2575, 2015

Baba M, Takahashi M, Yamashiro K, Yokoo H, Fukai M, Sato M, Hosoda M, Kamiyama T, Taketomi A, Yamashita H. Strong cytoplasmic expression of NF- κ B/p65 correlates with a good prognosis in patients with triple-negative breast cancer. *Surg Today*. 2015 Oct 22. [Epub ahead of print]

Mochizuki K, Shinkai M, Take H, Kitagawa N, Usui H, Miyagi H, Nakamura K, Obatake M. Impact of an external lengthening procedure on the outcome of long-gap esophageal atresia at our hospitals. *Pediatr Surg Int*. 2015 Oct;31 (10):937-42

Fujiyoshi M, Kuno A, Gotoh M, Fukai M, Yokoo H, Kamachi H, Kamiyama T, Korenaga M, Mizokami M, Narimatsu H, Taketomi A; Hepatitis Glyco-biomarker Study Group. Clinicopathological characteristics and diagnostic performance of Wisteria floribunda agglutinin positive Mac-2-binding protein as a preoperative serum marker of liver fibrosis in hepatocellular carcinoma. *J Gastroenterol*. 2015 Nov;50(11): [Epub ahead of print]

Ishikawa T, Homma S, Shibasaki S, Yoshida T, Minagawa N, Kawamura H, Taketomi A. Dual-port laparoscopic abdominoperineal resection using the intended stoma site as the multichannel port. *Surg Today*. 2015 Dec;45(12):1583-7

Uzuki Y, Cho K, Honda S, Fujisawa S, Taketomi A, Morikawa M, Minakami H. Atypical Double-Bubble in MRI of a Fetus with Double Atresia Involving Esophagus and Jejunum. *J Neonatal Biol* 2015;4(2):178

Ishii C, Sato T, Murano K, Kawamura H. Automatic identification for laparoscopic surgical procedure for ligation and online distinction of abnormal manipulation for thread knotting. *Int J Clin Med*. 6: 887-898, 2015.

Kondo T, Honda S, Minato M, Fujisawa S, Miyagi H, Cho K, Minakami H, Taketomi A. A preoperative diagnostic challenge of a long overlapping upper pouch with distal tracheoesophageal fistula. *J Neonatal Biol* 2015, 4:4

Kubo K, Ohnishi S, Hosono H, Fukai M, Kameya A, Higashi R, Yamada T, Onishi R, Yamahara K, Takeda H, Sakamoto N. Human Amnion-derived Mesenchymal Stem Cell Transplantation. Ameliorates Liver Fibrosis in Rats. *Transplantation Direct* [Epub ahead of disclosure]

Kato K, Honda S, Minato M, Miyagi H, Okada T, Cho K, Taketomi A. Torsion of an accessory spleen: A rare case and review of the literature. *J Clin Case Rep* 2015 (in press)

Kawamura H, Tanioka T, Shibuya K, Takahashi, M. Neoadjuvant chemotherapy outcomes for clinical para-

aortic lymph node metastasis-positive gastric cancer. *Hepato-Gastroenterology* (in press)

Kawamura H, Shibasaki S, Yoshida T, Homma S, Takahashi M, Taketomi A. Strategy of laparoscopic partial resection for gastric gastrointestinal stromal tumors according to the growth pattern. *Surg Laparosc Endosc Percutan Tech* (in press)

Fukai M, Kobayashi N, Ishikawa T, Wakayama K, Shimada S, Umemoto K, Ohtani S, MFujiyoshi M, Yamashita K, Shimamura T, and Taketomi A. 14-3-3 ζ -mediated stimulation of oxidative phosphorylation exacerbates oxidative damage under hypothermic oxygenated conditions in human renal tubular cells (HK-2). *Transplant Proc* (in press) 2015.

Shibasaki S, Homma S, Yoshida T, Kawamura H, Takahashi N, Taketomi A. Epidermal Sutureless Closure of the Umbilical Base Following Laparoscopic Colectomy for Colon Cancer. *Ind J Surg* (in press)

Shibasaki S, Kawamura H, Homma S, Yoshida T, Takahashi S, Takahashi M, Takahashi N, Taketomi A. A Comparison Between Fentanyl Plus Celecoxib Therapy And Epidural Anesthesia for Postoperative Pain Management Following Laparoscopic Gastrectomy. *Surg Today* (in press)

Wakayama K, Kamiyama T, Yokoo H, Kakisaka T, Orimo T, Shimada S, Tsuruga Y, Kamachi H, Taketomi A. A Preceding Diaphragm Resection and Partial Mobilization of the Hepatic Right Lobe Technique Using a Vessel Sealing Device (LigaSure™) to Treat Huge Hepatic Tumors with Diaphragm Invasion. *Surgery Today* (in press)

Ohno Y, Kitamura H, Takahashi N, Ohtake J, Kaneumi S, Sumida K, Honma S, Kawamura H, Minagawa N, Shibasaki S, Taketomi A. IL-6 down-regulates HLA class II expression and IL-12 production of human dendritic cells to impair activation of antigen-specific CD4+ T cells. *Cancer Immunol Immunoth* (in press)

Yamada K, Maishi N, Akiyama K, Towfik Alam M, Ohga N, Kawamoto T, Shindoh M, Takahashi N, Kamiyama T, Hida Y, Taketomi A, Hida K. CXCL12-CXCR7 axis is important for tumor endothelial cell angiogenic property. *Int J Cancer*. 2015 Dec 15; 137(12): 2825-36.

武富昭信：【最新肝臓学—基礎と臨床の最新研究動向—】肝臓の治療 外科的治療 肝移植肝細胞癌に対する肝移植の適応 国内のコンセンサスは得られるのか？（解説/特集）日本臨床（0047-1852）73巻増刊1 最新肝臓学 Page709-713（2015.01）

浅野史雄、新開真人、武浩志、北河徳彦、望月響子、臼井秀仁、宮城久之、大浜用克：肝前性門脈圧亢進症に対する臍静脈を用いたRexバイパス手術。小児外科47巻1号 65-69（2015.01）

豊島雄二郎、稲垣光裕、岡田尚樹、柳田尚之、赤羽弘充、中野詩朗、佐藤啓介：後腹膜気腫を伴う特発性下行結腸後腹膜穿孔の1例。日本臨床外科学会雑誌 76巻1号 Page74-78（2015.01）

豊島雄二郎、中野詩朗、赤羽弘充、稲垣光裕、柳田尚之、芝木泰

一郎、正村裕紀、庄中達也、木村鐘康、岡田尚樹、河本徹：特発性巨大食道粘膜下血腫の1例. 消化器外科38巻1号 Page113-116 (2015.01)

武富紹信：【C型肝炎治療update】治療 特殊な病態におけるC型肝炎治療 DAA時代の肝移植後C型肝炎再発治療（解説/特集）. 日本臨床73巻2号 Page312-316 (2015.02)

岡田忠雄、本多昌平、宮城久之、湊雅嗣、藤澤空彦、近藤享史、武富紹信：小児外科におけるトピックスと最新治療（解説）. 北海道外科雑誌 特別記念号 Page106-115 (2015.03)

高橋典彦、本間重紀、吉田雅、柴崎晋、川村秀樹、武富紹信：下部消化管外科の最新治療. 北海道外科雑誌特別記念号 Page41-44 (2015.03)

小泉忠史、古家乾、馬場英、定岡邦昌、関谷千尋、服部淳夫、後藤一、青柳武史、山下健一郎、嶋村剛：メチルドパにより亜急性型劇症肝炎を発症した1例. 日本内科学会雑誌 104巻3号 Page 586-589 (2015.03)

臼井秀仁、新開真人、望月響子、武浩志、北河徳彦、宮城久之、中村香織：脾炎で発症した先天性十二指腸膜様狭窄症に対する腹腔鏡下脾切除術. 日本小児外科学会雑誌 51巻2号 Page251-254 (2015.04)

折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信：【わかりやすい消化器癌治療のコンセンサス】大腸癌の診断と治療 大腸癌肝転移に対する治療戦略. 消化器外科 38巻5号 Page665-669 (2015.4)

正司裕隆、今裕史、石川隆壽、柴崎晋、本間重紀、川村秀樹、高橋典彦、武富紹信：虫垂Goblet Cell Carcinoidの1例 本邦57例の検討. 日本外科系連合学会誌 40巻2号 Page266-272 (2015.04)

敦賀陽介、蒲池浩文、三橋智子、田原宗徳、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、横尾英樹、神山俊哉、武富紹信：自己免疫性脾炎に合併した胆嚢IgG4関連炎症性偽腫瘍の1例. 日本消化器外科学会雑誌 48巻5号 Page414-420 (2015.05)

本間重紀、高橋典彦、川村秀樹、今井敦、森田恒彦、武富紹信：下部消化管疾患に対する外科治療—直腸癌に対する腹腔鏡下手術—. 北海道外科雑誌 60巻1号 Page2-7 (2015.06)

武富紹信：生涯教育シリーズ 消化器疾患診療の最前線 肝細胞癌に対する外科治療の進歩（解説）. 北海道医報 1162号 Page8-11 (2015.07)

本間重紀、武富紹信：第Ⅱ章臨床腫瘍学の基礎 8. 外科療法. 新臨床腫瘍学 改訂第4版(南江堂) Page191-194 (2015.7)

松井博紀、柴崎晋、戸井博史、津田一郎、中村貴久、武富紹信：術前診断し腹腔鏡下手術を施行しえた特発性大網捻転症の1例. 外科 77巻7号 Page832-835 (2015.07)

豊島雄二郎、横田良一、菊地弘展、田口宏一、吉田行範、岩木宏之：Lynch症候群に関連する4重複癌に発症した胆管内乳頭状腫瘍の1例. 日本臨床外科学会雑誌 76巻8号 Page2036-2031 (2015.08)

谷道夫、川村秀樹、柴崎晋、本間重紀、高橋典彦、武富紹信：急速増大した胃脾間膜原発腹腔内デスマイド腫瘍の1例. 日本臨床外科学会雑誌 76巻8号 Page1890-1896 (2015.08)

折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、若山顕治、島田慎吾、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信：【特集 難治な胆道良性疾病の対処法を考える】肝切除術後胆汁漏. 肝胆脾 71巻3号 Page501-507 (2015.9)

石川隆壽、本間重紀、柴崎晋、川村秀樹、高橋典彦、武富紹信：長期無再発生存を得た直腸癌によるフルニエ症候群の1例. 日本外科系連合学会 40巻5号 Page938-943 (2015.10)

吉田雅、本間重紀、下國達志、崎浜秀康、川村秀樹、武富紹信：【特集 新外科専門医到達のための特別講義】手術侵襲と手術のリスク. 外科(南江堂) 77巻12号 Page1372-1376、2015

深井原、島田慎吾、若山顕治、石川隆壽、嶋村剛、山下健一郎、武富紹信：臓器保存におけるオートファジーの病態と評価法. Organ Biology 22巻2号 Page26-31、2015

石黒友唯、嶋村剛、本間重紀、川村秀樹、高橋典彦、腰塚靖之、後藤一、山下健一郎、武富紹信、藤堂省：生体肝移植後8年で発症した胃gastrointestinal stromal tumorの1切除例. 日本消化器外科学会雑誌 48巻11号 Page921-928、2015

安部崇重、丸山覚、七戸俊明、本間重紀、工藤正尊、篠原信雄：ロボット支援腹腔鏡手術の現状と将来の展望. 北海道医学雑誌 90(1)、13-16、2015

近藤享史、本多昌平、宮岡陽一、湊雅嗣、岡田忠雄、武富紹信：拡張胆管が門脈を圧排・閉塞し門脈圧亢進症を呈し先天性胆道拡張症. 小児外科 2015 (in press)

横尾英樹、神山俊哉、折茂達也、若山顕治、島田慎吾、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信：肝細胞癌遠隔転移症例に対するソラフェニブ治療の有効性. 癌と化学療法 2015 (in press)

折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信：肝切除術における術前腸管処置のsurgical site infection発生に及ぼす影響. 癌と化学療法 42巻12号 2015 (in press)

腰塚靖之、武富紹信：肝癌に対する生体肝移植. Annual Review 消化器 2016 (in press)

■ 学位取得者

馬場 基

■ 学位所得年月

2015年3月

■ 学位論文名

細胞質のNF- κ B/p65強発現はトリプルネガティブ乳癌において予後良好な因子である

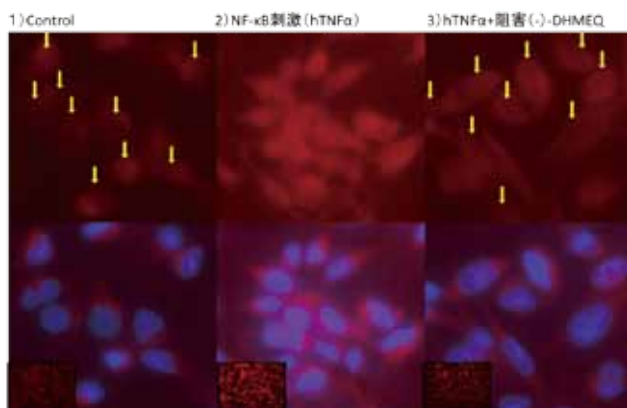
■ 基礎論文

Baba M, Takahashi M, Yamashiro K, Yokoo H, Fukai M, Sato M, Hosoda M, Kamiyama T, Taketomi A, Yamashita H. Strong cytoplasmic expression of NF- κ B/p65 correlates with good prognosis in triple negative breast cancer. Surg Today. 2015, Oct 22. [Epub ahead of print]

■ 要 旨

乳癌におけるNF- κ Bの局在と化学療法感受性や予後との関連があるとの知見をもとに、依然化学療法のみが薬物療法である予後不良なトリプルネガティブ乳癌においてNF- κ Bの局在や染色性が、術前化学療法の奏効や予後に与える影響を研究した発表である。基礎実験において、トリプルネガティブ乳癌細胞株MDA-MB-231は、human TNF α にて刺激すると核染色を認め、(-)-DHMEQを添加すると再び細胞質染色に戻ることを認めた。化学療法薬剤（アンスラサイクリン、タキサン）と(-)-DHMEQを併用した実験を一部行ったが結果が得られなかった。乳癌組織を用いた臨床解析では術前化学療法を行ったトリプルネガティブ乳癌34症例の薬物療法前後のがん組織検体を用いて検討を行った。NF- κ B/p65染色では、核染色を認める検体はごく少数でかつ染色率も低く、有意な結果は得られなかった。しかし新たに細胞質染色強度を検討した所、薬物療法前組織検体6例に強染色性を認め、化学

Figure 1 MDA-MB-231 株による NF- κ B/p65 染色局在変化（蛍光染色）



療法感受性や予後との相関性は統計学的な優位な差を認めなかったものの6例中2例が病理学的完全奏効（pCR）となり、6例全例無再発生存していた。今後のトリプルネガティブ乳癌に対する治療のターゲットを検索する上で、新たな手掛かりになるとの内容であった。

Figure 2 NF- κ B/p65 核 a ならびに細胞質染色

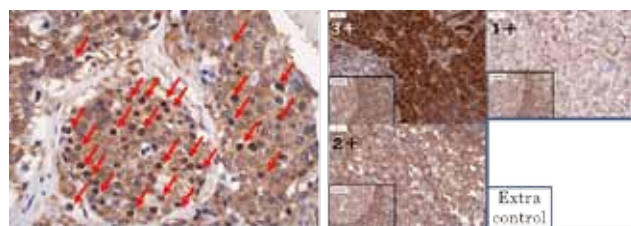
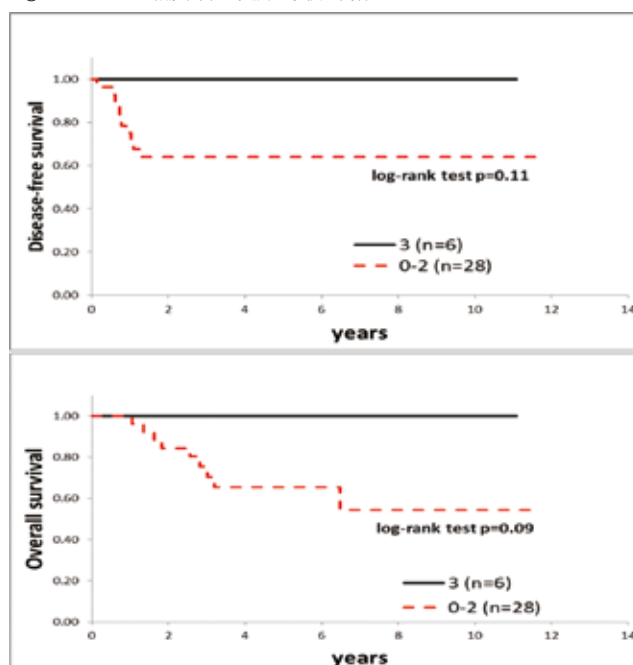


Figure 3 NF- κ B 細胞質染色強度と予後の関係



大野 陽介

■ 学位所得年月

2015年3月

■ 学位論文題名

Studies on functional regulation of human dendritic cells by IL-6/STAT3 signaling pathway and the effects of anti-tumor immunity in a tumor microenvironment. (IL-6/STAT3シグナル経路によるヒト樹状細胞の機能制御と抗腫瘍免疫への影響に関する研究)

■ 基礎論文題名

Ohno Y, Kitamura H, Takahashi N, Ohtake J, Kaneumi

S, Sumida K, Homma S, Kawamura H, Minagawa N, Shibasaki S, Taketomi A. IL-6 down-regulates HLA class II expression and IL-12 production of human dendritic cells to impair activation of antigen-specific CD4+ T cell. Cancer Immunol Immunother, in press.

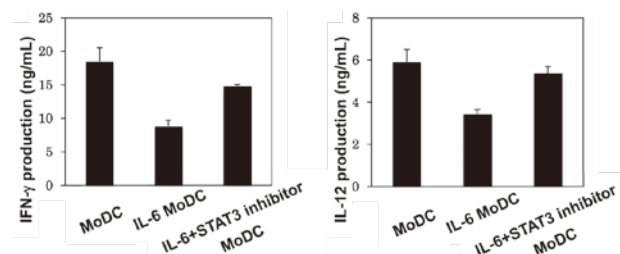
■ 要 旨

【背景】がん微小環境下での免疫抑制状態は、より効果的ながん免疫治療の開発において打破すべき主要な問題とされている。樹状細胞の適切な機能制御は、よりよいがん免疫治療の開発に寄与すると考えられる。これまでIL-6/STAT3シグナル経路がマウス樹状細胞の抗原提示能を減弱させることが報告されている。当研究においては、ヒト樹状細胞におけるIL-6/STAT3シグナル経路の作用を明らかにするとともに、より効果の高いがん免疫治療への応用の可能性について検討を行った。

【方法と結果】健康人末梢血単核球よりMonocyte-derived dendritic cellsを誘導し、IL-6による機能変化を評価した。IL-6はSTAT3依存的にHLA-DRの発現低下、およびCD86の発現を低下させ、抗原提示能の低下とともにIL-12依存的なCD4陽性T細胞のIFN- γ 産生能低下を低下させた。またIL-6/STAT3シグナル経路下流の機能分子としてCOX2、Arginase-1、Cathepsin Lの働きを確認した。また、実際の癌組織中のCD11b⁺CD11c⁺樹状細胞では末梢血中の同細胞と比較してHLA-DR、およびCD86の発現、およびT細胞の活性化能が低下していた。さらに、COX-2、Arginase-1、Cathepsin LのmRNA発現が亢進していた。また、免疫染色においてHLA-DR発現とCD4あるいはCD8陽性T細胞の浸潤に相関関係を認めた。

【考察と結語】本研究より、IL-6/STAT3シグナル経路はArginase-1、COX-2、Cathepsin Lの活性化を介して、ヒト樹状細胞の抗原提示能を低下させると考えられた。またIL-12は抗腫瘍免疫に重要なTh1型免疫応答を誘導するサイトカインであり、IL-12産生能低下は、がん患者におけるTh1型免疫反応の誘導を抑制し、腫瘍細胞の免疫逃避を促進することが考えられる。また、免疫染色の結果からも腫瘍内へのT細胞浸潤とその活性化には、腫瘍内における抗原提示細胞の存在が重要であると考えられる。以上より、腫瘍内に浸潤したミエロイド系細胞はIL-6/STAT3シグナルの影響を受け、抗原提示

細胞としての機能的な成熟が抑制されることが示唆されIL-6/STAT3シグナル経路の遮断による樹状細胞を介した免疫抑制の改善は、より効果的ながん免疫治療を開発するための有望な標的の一つと考えられる。



IL-6 attenuated Th1 immunity through reduced IL-12 production by MoDCs in a STAT3-dependent manner.

木村 鐘康

■ 学位所得年月

2015年6月

■ 学位論文題名

肝移植後早期においてNK細胞によるアロ認識が好中球浸潤の増幅をもたらす肝虚血再灌流障害を増悪させる

(Allorecognition by NK cells contribute to augmented hepatic ischemia/reperfusion injury with higher host neutrophil infiltration during early phase after liver transplantation)

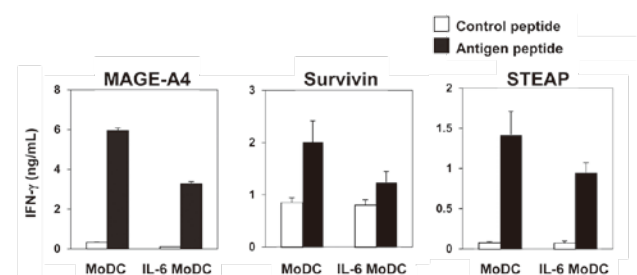
■ 基礎論文題名

Kimura S, Ozaki KS, Ueki S, Zhang M, Yokota S, Stolz DB, Geller DA, Murase N. Contribution of alloantigens to hepatic ischemia/reperfusion injury: Roles of NK cells and innate immune recognition of non-self. Liver Transpl. 2015, Sep 3. doi: 10.1002/lt.24330. [Epub ahead of print]

■ 要 旨

虚血再灌流障害においては、自然免疫システムが中心的な役割を示している。NK細胞は自然免疫システムにおける重要な細胞であり、その抗原認識方法として、自己のMHC class Iを持たない細胞を認識し傷害する事がわかっている。我々は肝移植後に起こる肝虚血再灌流障害において、自然免疫細胞、中でもNK細胞によるアロ抗原認識により、アロジェニック移植でシンジェニック移植よりも虚血再灌流障害によるダメージが大きいと仮説を立てた。

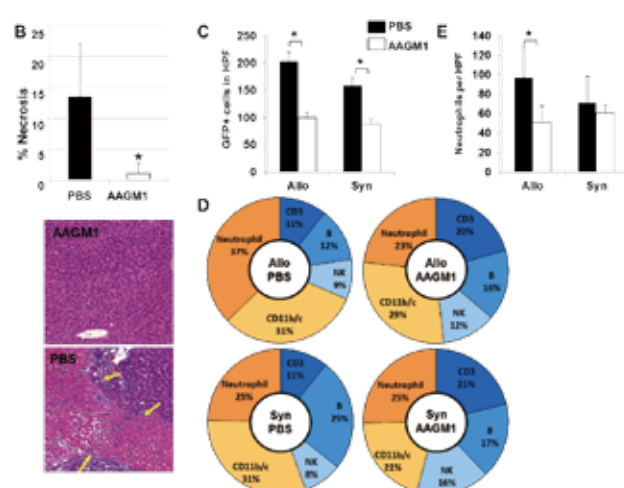
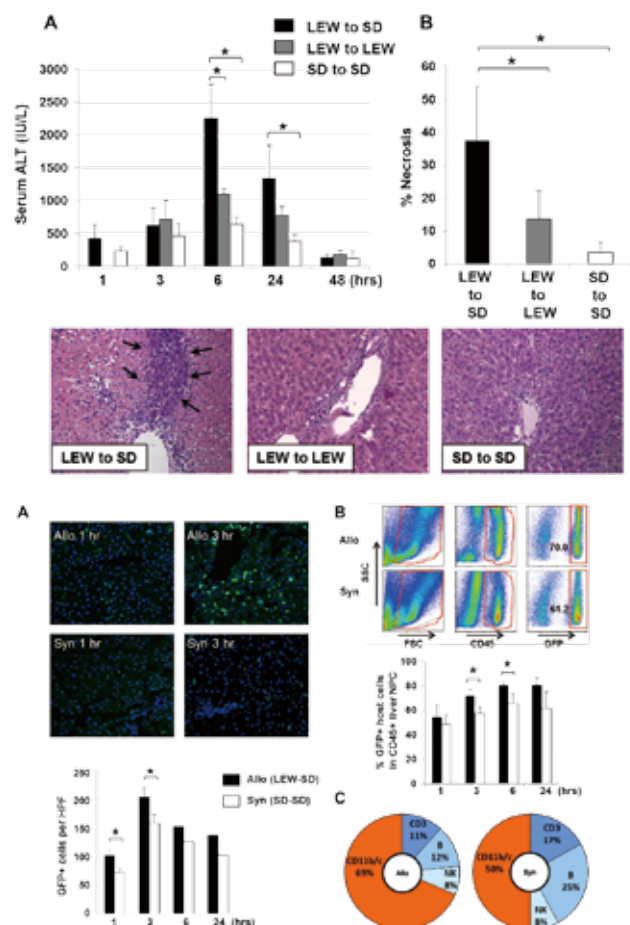
ラット肝移植後に血清ALTの値を測定したところ、アロジェニック移植群でシンジェニック移植群と比較しALTは高値を示した。また、炎症性サイトカインNKG2DのmRNAレベルはアロジェニック移植群でシンジェニック移植群よりも高値



IL-6 reduced IFN- γ production by cancer related antigen-specific CD4+ T cells after the stimulation with human MoDCs.

を示した。次に肝移植後早期のグラフト肝を抗CD161抗体を用いて免疫組織染色したところ、アロジェニックグラフトでグラフトNK細胞の数が早期から減少した。フローサイトメトリーによる解析でも同様にシンジェニックグラフトではNK細胞の割合がほとんど変化しなかったのに対し、アロジェニックグラフト肝内のNK細胞は肝移植後1時間以内に速やかに減少した。このアログラフトでのNK細胞数の減少は、主にCD11b/c+の成熟NK細胞の減少によるものであった。次にフローサイトメトリーで肝内の宿主由来浸潤細胞を解析したところ、GFP+宿主由来浸潤細胞の割合はアロジェニックグラフトで高く、肝移植後3時間、6時間で有意差を持って高値となった。次にAAGM1を使用しNK細胞除去実験を行った。アロジェニック肝移植群においては、AAGM1ドナー前治療群がALT値にして50～70%の著明なダメージ減少効果を認めたのに対し、シンジェニック肝移植群では効果は40～50%と限定的であった。また、アロジェニックグラフトの好中球浸潤の割合が37%⇒25%と著明に減少していることが分かった。これらの結果より、肝内成熟NK細胞が宿主好中球の動員、浸潤に関連している可能性が示唆された。

本研究は、NK細胞が肝虚血再灌流障害において重要な役割を持つ事を示し、また、アロジェニック細胞を認識することで、シンジェニックグラフトよりもアロジェニックグラフトでALTの高値、壊死組織の増大、宿主好中球の浸潤増加により肝障害が増大することを示した。



財津 雅昭

■ 学位所得年月

2015年6月

■ 学位論文題名

Studies of efficacies of 3-[(dodecylthiocarbonyl) methyl] glutarimide on graft arterial disease in mice.
(マウス移植後動脈硬化症モデルにおける3-[(dodecylthiocarbonyl) methyl] glutarimideの効果およびその機序の検討)

■ 基礎論文題名

Zaitzu M, Yamashita K, Shibasaki S, Tsunetoshi Y, Fukai M, Ogura M, Yoshida T, Igarashi R, Kobayashi N, Umezawa K, Todo S. 3-[(Dodecylthiocarbonyl) methyl]- Glutarimide Attenuates Graft Arterial Disease by Suppressing Alloimmune Responses and Vascular Smooth Muscle Cell Proliferation. Transplantation. May;99(5):948-956, 2015.

■ 要 旨

【背景と目的】長期グラフト生着率を妨げる主要な原因として移植後動脈硬化症が挙げられるが、免疫抑制剤の進歩した今日においてもその治療法がない。本研究は移植後動脈硬化症における抗生物質9-メチルストレプトチミドン由来の新規化合物である3-[(dodecylthiocarbonyl) methyl] glutarimide (DTCM-G) の効果について検討した。

【材料と方法】(1) *In vitro*: C57BL/6 (B6) とB6.CH-2^{bm12} (Bm12) のマウスの脾細胞およびBm12マウスの胸部大動脈から血管平滑筋細胞を用いて、それぞれDTCM-G添加による増殖抑制試験を行った。(2) *In vivo*: Bm12マウス心をB6マウスに異所性心移植を行いDTCM-Gを腹腔内投与した。

移植後28日目に組織学的評価を行いDTCM-Gの移植後動脈硬化症に対する効果の検討を行った。

【結果】DTCM-Gはリンパ球増殖反応を濃度依存性に抑制した。*In vivo*ではDTCM-Gは有意にグラフトへの細胞浸潤が抑制しながらグラフト動脈内腔閉塞を減弱させた(図1)。移植後14日目の脾細胞にドナー抗原にて再刺激を加えたところ、DTCM-G治療群はINF- γ の産生およびドナー特異的CD154発現を有意に抑制した。DTCM-Gは細胞周期のG1-S期の移行を抑制し、cyclin D1の発現を有意に抑制することから血管平滑筋細胞の増殖を抑制することがわかった(図2)。

【結論】DTCM-Gはアロ免疫抑制効果に加えて、血管平滑筋細胞の増殖を抑制することでグラフト動脈内腔狭窄を減弱させたと考えられる。DTCM-Gは移植後動脈硬化症の予防および治療に有用である可能性が示された。

図1

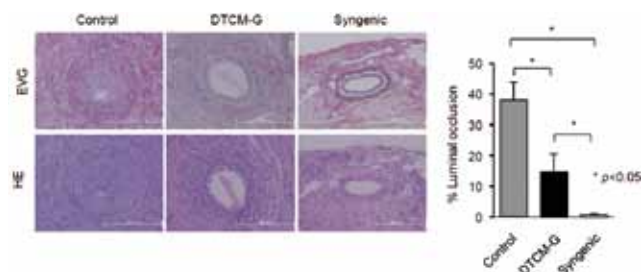
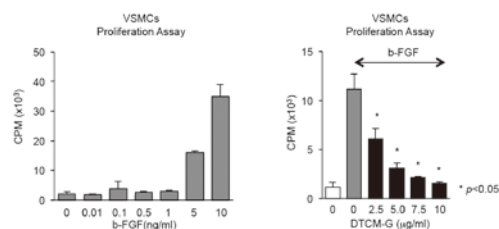


図2



藏谷 大輔

■ 学位所得年月

2015年9月

■ 学位論文名

NF- κ B阻害剤DHMEQはHMGB1を抑制することによりマウス膵島移植後早期グラフト傷害を抑制する

(DHMEQ, a NF- κ B inhibitor, prevents early islet graft damage by suppressing HMGB1 in murine pancreatic islet transplantation)

■ 基礎論文名

Kuraya D, Watanabe M, Koshizuka Y, Ogura M, Yoshida T, Asahi Y, Kamachi H, Nakamura T, Harashima H, Ozaki M, Umezawa K, Matsushita M, Yamashita K, Todo S. Efficacy of DHMEQ, a NF-

κ B Inhibitor, in Islet Transplantation: I. HMGB1 Suppression by DHMEQ Prevents Early Islet Graft Damage. Transplantation. Sep 15;96(5):445-53, 2013.

■ 要 旨

【背景】膵島移植において、レシピエントの肝内に経門脈的に移植された膵島グラフトの大部分は、マクロファージなどの免疫担当細胞が引き起こす炎症反応により破壊される。炎症反応において中心的な役割を果たす、nuclear factor (NF)- κ Bを阻害することによる膵島移植後の炎症反応抑制効果を検証した。

【材料と方法】マウス同種同系膵島移植モデルにおいて、NF- κ B阻害剤dehydroxymethylepoxyquinomicin (DHMEQ)を使用した。C57BL/6マウスの膵島175個を、糖尿病を誘発したマウスの肝臓内に経門脈的に移植した。移植後、レシピエントの腹腔内または静脈内に20mg/kgのDHMEQを投与した。

【結果】対照群の11%のみが移植後に血糖正常化した。DHMEQ 3回投与群では66.7%、DHMEQ 4回投与群では83.3%、リボソーム化DHMEQ投与群では85.7%で血糖正常化した(Fig. 1)。DHMEQ治療群では、移植12時間後の肝内におけるTNF- α 、MCP-1、MIP-1 β 、IL-1 β およびIL-6のmRNA発現量が有意に低値であった。また移植12時間後のレシピエント血清中のHMGB1の濃度が有意に低値であった(Fig. 2)。マウス膵島200個をHMGB1 (20 μ g/ml)で刺激したRAW 264.7細胞と共培養した。DHMEQ添加により、培養後の膵島数の減少は有意に抑制された(Fig. 3)。また培養上清中のHMGB1、TNF- α 、IL-6のタンパク量は対照群と比較して有意に減少した。

【考察】マクロファージが産生し、破壊された膵島からも放出されるHMGB1が、マクロファージの炎症性サイトカイン分泌を介して膵島を破壊し、HMGB1が放出されるというフィードバックループにおいて、DHMEQによるNF- κ B阻害がマクロファージの活性化を抑制することで膵島の破壊を抑制するという機序が明らかになった。

Fig. 1

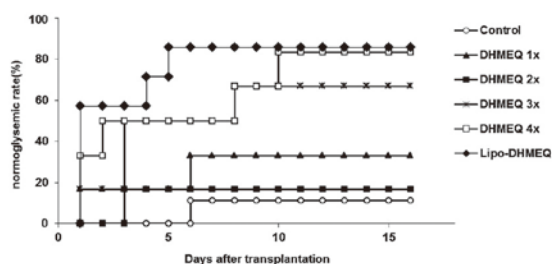


Fig. 2

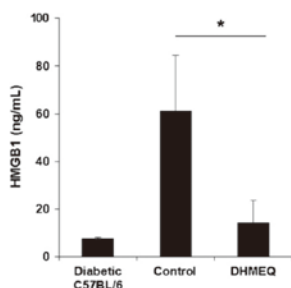
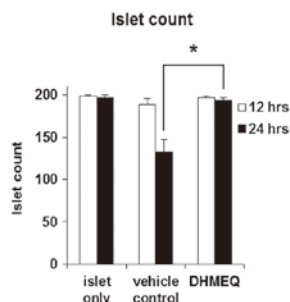


Fig. 3



藤好 真人

■ 学位所得年月

2015年9月

■ 学位論文題名

マウス肝移植モデルにおける機械灌流保存法およびsiRNAを用いた移植前グラフト治療法に関する研究

(Studies of machine perfusion preservation and pre-transplant graft therapy using siRNA in mouse liver transplantation model)

■ 基礎論文題名

Fujiyoshi M, Nagatsu A, Ueki S, Fukai M, Shimamura T, Taketomi A. Orthotopic Liver Transplantation Following Sub-Normothermic Oxygenated Machine Perfusion Preservation in Mice. 再投稿準備中.

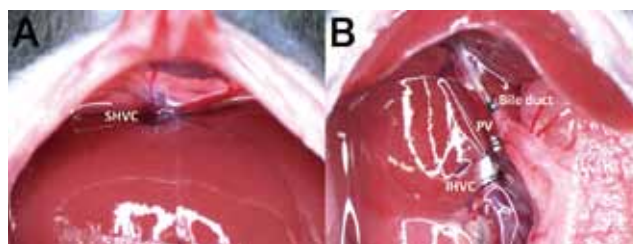
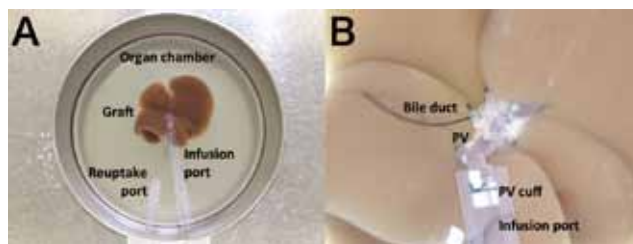
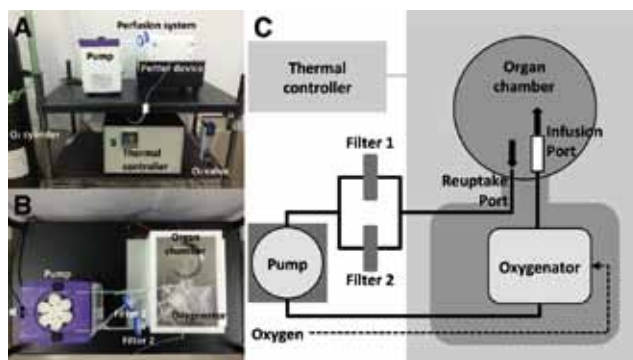
■ 論 旨

近年、肝移植領域において、ECDおよびDCDグラフトのリスクを軽減する技術として機械灌流保存法が注目されている。

本研究では、機械灌流操作をマウス肝移植に組み込み、非循環型灌流装置を用いた乳酸リンゲル液による短時間の冷温機械灌流を実現した。そして、循環型灌流装置を用いた supplemented William Medium E (sWME) による数時間にわたる冷温機械灌流にまで拡張し、良好な移植成績を得た。続いて、非冷温機械灌流保存のため温度制御システム、酸素化モジュールおよび赤血球含有灌流液の導入を行った。このシステムでは、灌流温度の上昇に伴うグラフト酸素消費量の増加と酸素化モジュールの良好な酸素化能が確認することができたが、25℃でのsub-normothermic machine perfusion (SNMP) では全てのレシピエントが移植直後に死亡した。同システムによる冷温機械灌流においても結果は同様であったため、我々は赤血球含有灌流液の使用を中止し、sWMEを用いたAcellular SNMPに灌流形式を変更した。この方法でもグラフトへの十分な酸素供給が可能であり、これにより移

植後生存率は5日目で50%、28日目で37.5%まで改善した。さらに、移植直前まで機械灌流を継続できるよう灌流装置と術式を改変し、灌流液の濾過方法の工夫により残留ドナー血球による灌流液の汚染を防止したところ、移植後生存率は5日目で100%、28日目で87.5%にまで向上し、移植後28日目の肝機能検査および組織学的所見は正常であった。このSNMPをDCD肝移植に適用すると、冷温浸漬保存法に比べ移植後生存を有意に延長させた。

本研究において我々は、高リスクグラフトのさらなる安全性向上に向けて、siRNAによるRNA干渉作用を応用した移植前グラフト治療法の開発研究も行った。肝臓グラフトへのsiRNA導入方法としてドナー体内におけるin vivo lipofection法を用いた検討では、良好な導入効率が見られ、移植前にグラフトに取り込まれたsiRNAは、移植後にレシピエントで遺伝子抑制作用を発現した。この導入方法では、導入時間を2時間まで短縮しても十分なsiRNA導入が可能であったが、導入時間を1時間とすると導入効率は大幅に低下した。摘出後グラフトへの体外導入に関しても検討を行ったが、冷温浸漬保存中の経門脈投与ではsiRNAは導入されず、SNMP上で20℃、3時間の経灌流液投与を行っても、導入効率は非常に低かった。



吉田 雅

■ 学位所得年月

2015年9月

■ 学位論文題名

同種異系膵島移植におけるc-Fos/Activator protein-1阻害による免疫抑制効果に関する研究

(Studies on Immunosuppressive Effect of c-Fos/Activator Protein-1 Inhibition on Allogeneic Pancreatic Islet Transplantation)

■ 基礎論文

Yoshida T, Yamashita K, Watanabe M, Koshizuka Y, Kuraya D, Ogura M, Asahi Y, Ono H, Emoto S, Mizukami T, Kobayashi N, Shibasaki S, Tomaru U, Kamachi H, Matsushita M, Shiozawa S, Hirono S, Todo S: The Impact of c-Fos/Activator Protein-1 Inhibition on Allogeneic Pancreatic Islet Transplantation. Am J Transplant. Oct;15(10):2565-2575, 2015.

■ 論 旨

【背景と目的】膵島移植の術後長期成績は非常に不良であり、T細胞を介した急性拒絶反応がその一因として挙げられる。本研究では、マウス同種膵島移植モデルにおける新規Activator protein (AP)-1阻害剤T-5224の免疫抑制効果について検討した。また、AP-1と密接な関係を持つNFAT阻害薬Tacrolimusとの併用効果についても検討した。

【材料と方法】抗CD3+抗CD28抗体刺激によるC57BL/6 (B6: H-2^b) マウスのT細胞核内におけるT-5224のc-Fos/AP-1-DNA結合抑制能、T細胞の増殖抑制能、サイトカイン産生抑制能、CD4+T細胞中のCD25発現抑制能を検討した。T-5224とTacrolimusの併用によるサイトカインmRNA発現抑制効果を検討した。Streptozotocin誘導糖尿病B6マウスへBALB/c (H-2^d) マウス膵島600、300個を経門脈的に肝内へ移植し、T-5224を術直後から14日間、1日1回、経口投与した。また、Tacrolimusは術後4日目から14日間、1日1回、腹腔内投与した。

【結果】T-5224 (80μg/mL) 群は、対照群に対し、抗体刺激によるB6由来c-Fos/AP-1-DNA結合 ($p<0.01$, Fig.1)、T細胞増殖 ($p<0.05$)、IL-2 ($p<0.01$)、IFN- γ ($p<0.01$) 産生、CD25発現 ($p<0.05$) を抑制した。また、IL-6、IL-10、IFN- γ のmRNA産生を抑制し ($p<0.05$)、Tacrolimusと併用すると、IFN- γ の抑制効果が更に増強した ($p<0.05$)。膵島アログラフト生着期間中央値 (MST) は無治療群15日に対し、T-5224単独群 (50、100、250、500mg/kg/day) では、それぞれ20.5日 ($p=0.60$)、28日 ($p=0.06$)、30

日 ($p=0.01$)、101.5日 ($p=0.0004$) と延長した (Fig.2)。Tacrolimus単独群 (1.0mg/kg/day) のMSTは、14日 ($p=0.71$) であったが、T-5224 (100mg/kg/day) と併用すると、全例300日以上血糖正常化を維持した (Fig.3)。しかし、移植膵島を300個に減少させると血糖正常化率50%、MST14日まで低下した。

【考察】新規AP-1阻害剤T-5224は、c-Fos/AP-1を阻害する事により、抗CD3+抗CD28抗体刺激下マウスT細胞の増殖、IL-2/IFN- γ 産生、CD25発現を抑制することが判明した。また、アロ膵島移植モデルにおいてレシピエントのアロ免疫反応を抑制し、アログラフト生着期間を有意に延長させた。また、T-5224とTacrolimusと併用すると主にTh1系サイトカインのmRNA発現を抑制し、アログラフト生着期間を著明に延長させたが、toleranceは誘導出来ていない可能性が高いと判断した。T-5224によるc-Fos/AP-1阻害法は、膵島移植において有望な免疫抑制療法と考えられる。

Fig. 1

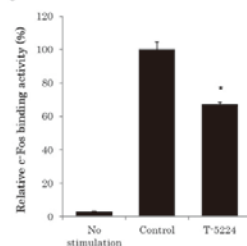


Fig. 2

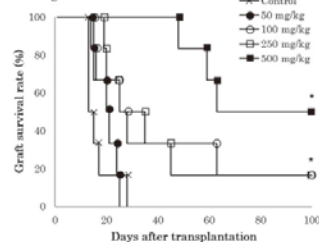
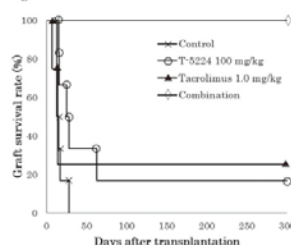


Fig. 3



研究費一覧

種別	事業名	研究者	代表・分担	交付額	研究課題名
科研費	挑戦的萌芽研究	武富 紹信	代表	1,300,000	siRNAを用いた肝移植グラフトの革新的体外治療法の開発
科研費	基盤研究 (S)	武富 紹信	分担	1,000,000	がん幹細胞化に関与するSphere形成メカニズムを標的とした革新的治療開発
AMED	日本医療研究開発機構 感染症実用化研究事業 肝炎等克服実用化研究事業 ii	武富 紹信	分担	10,000,000	人工キメラ遺伝子と肝臓特異的な輸送担体の開発を基盤とした肝臓内HBVDNA不活化を目指した新規治療法の開発(溝上班)
AMED	日本医療研究開発機構 感染症実用化研究事業 肝炎等克服実用化研究事業 i	武富 紹信	分担	1,538,462	C型肝炎の病態の解明と肝癌発症制御法の確立に関する研究(松浦班)
AMED	日本医療研究開発機構 感染症実用化研究事業 肝炎等克服実用化研究事業 i	武富 紹信	分担	769,231	次世代シーケンシング・ゲノムワイド関連解析を用いたC型肝炎治療に伴う肝病態進展軽快・肝発癌に関わる宿主因子の解析(坂本班)
AMED	日本医療研究開発機構 感染症実用化研究事業 肝炎等克服実用化研究事業 i	武富 紹信	分担	1,000,000	ゲノム網羅的解析によるB型肝炎ウイルス感染の病態関連遺伝子の同定と新規診断法の開発(徳永班)
AMED	日本医療研究開発機構 感染症実用化研究事業 肝炎等克服実用化研究事業 i	武富 紹信	分担	538,462	多施設共同研究による肝移植後肝炎ウイルス新規治療の確立と標準化(前原班)
AMED	日本医療研究開発機構 感染症実用化研究事業 肝炎等克服実用化研究事業 i	武富 紹信	分担	28,210,000 (総額)	肝疾患病態指標血清マーカーの開発と低侵襲かつ効率的に評価・予測する新規検査系の実用化(成松班)
AMED	日本医療研究開発機構 感染症実用化研究事業 肝炎等克服実用化研究事業 i	武富 紹信	分担	2,500,000	非炎症性肝がんに関与する微小環境の解明に基づく病態関連マーカーと治療法の開発(考藤班)
その他	受託研究 バイエル薬品株式会社	武富 紹信	代表	3,688,417	肝細胞癌患者を対象とした肝動脈化学塞栓療法後のソラフェニブ投与の有無ならびにソラフェニブ投与開始時期が予後へ与える影響を検討する国際共同前向き介入
その他	公益財団法人 三井生命厚生財団 医学研究助成	武富 紹信	代表	1,000,000	脂肪性肝炎を母地とする肝癌の切除成績向上の取り組み～質量分析イメージング法を用いた肝脂質代謝プロファイルの評価
その他	小野薬品工業 共同研究	武富 紹信	代表	2,950,000	DGKの機能解明
その他	メルクセロノ	武富 紹信	代表	1,000,000	消化器癌再発における上皮間葉転換した循環腫瘍細胞の意義とその精密な検出法の開発
その他	武田薬品工業 タケダ・リサーチサポート	武富 紹信	代表	1,500,000	消化器癌再発における上皮間葉転換した循環腫瘍細胞の意義とその精密な検出法の開発
その他	武田薬品工業 タケダ・リサーチサポート	武富 紹信	代表	1,500,000	肝芽腫局所進展に関わるエピゲノム変異解析
科研費	基盤研究 (S)	神山 俊哉	分担	1,250,000	網羅的糖鎖解析による新規癌マーカーの探索と診断技術の開発
その他	JSPS研究拠点事業(アジア・アフリカ学術基盤形成型)	神山 俊哉	分担	250,000	東アフリカおよびインドにおける疾患予防・診断技術の開発
科研費	基盤研究 (B)	嶋村 剛	代表	1,300,000	臓器不足解消を目指した画期的脂肪肝グラフト修復法の開発
科研費	挑戦的萌芽研究	嶋村 剛	代表	1,400,000	シャペロン分子により生存シグナルを増強させる画期的な肝グラフト修復法の開発
厚労科研	厚生労働科学研究費補助金 エイス対策研究事業 エイス対策政策研究事業	嶋村 剛	分担	500,000	血液製剤によるHIV/HCV重複感染患者の肝移植に関する研究
科研費	挑戦的萌芽研究	高橋 典彦	代表	500,000	肝細胞癌血管内皮の多様性と新規分子標的薬への応用
科研費	基盤研究 (C)	中西 一彰	代表	800,000	新規バイオマーカー APC結合蛋白EB1の肝細胞癌発癌進展における分子機構の解明
AMED	日本医療研究開発機構 未来医療を実現する医療機器・システム研究開発事業	横尾 英樹	分担	300,000	医療情報の高度利用による医療システムの研究開発
その他	公益信託 榆刀会外科医学研究助成基金	横尾 英樹	代表	400,000	肝細胞癌新規バイオマーカー候補E-FABPの血清マーカーとしての確立
その他	日本イーライリリー	横尾 英樹	代表	500,000	新規バイオマーカー APC結合蛋白EB1の肝細胞癌発癌進展における分子機構の解明
科研費	基盤研究 (A)	山下健一郎	代表	4,300,000	体外誘導免疫制御性リンパ球を用いた細胞治療による免疫寛容誘導に関する研究
AMED	日本医療研究開発機構 免疫アレルギー疾患等実用化研究事業 移植医療技術開発研究分野	山下健一郎	分担	7,400,000 (総額)	制御性T細胞治療による臨床肝移植における免疫寛容誘導法の多施設共同研究
科研費	基盤研究 (C)	深井 原	分担	50,000	心停止下ドナーによる肝移植のための新規保存液を用いたグラフト灌流保存法の開発
その他	日本イーライリリー	深井 原	代表	500,000	癌細胞の生存シグナルタンパクのリン酸化に対するエネルギー代謝プロファイルの影響
科研費	基盤研究 (C)	崎浜 秀康	代表	700,000	消化器癌の微小転移同定システムの臨床応用
その他	榆刀会外科医学研究助成基金	本間 重紀	代表	500,000	消化器癌再発における上皮間葉転換した循環腫瘍細胞の意義とその精密な検出法の開発
科研費	基盤研究 (C)	本間 重紀	代表	300,000	大腸癌浸潤・転移におけるHCGβの機能解析とその臨床応用
科研費	基盤研究 (C)	本多 昌平	代表	1,600,000	肝芽腫の発生・進展過程におけるDNAメチル化異常の解明
厚労科研	厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等政策研究事業 (難治性疾患政策研究事業)	本多 昌平	分担	100,000	小児期からの希少難治性消化管疾患の移行期を包含するガイドラインの確立に関する研究(田口班)
その他	橋渡し研究加速ネットワークプログラム	本多 昌平	代表	1,920,000	肝芽腫における新規予後予測分子マーカーを目指した新規がん抑制遺伝子のDNAメチル化異常
その他	公益財団法人 がんの子どもを守る会 治療研究助成	本多 昌平	代表	400,000	肝芽腫のシスプラチン耐性に関わるDNAメチル化異常の解明と予後予測分子マーカーの確立
科研費	若手研究 (B)	柿坂 達彦	代表	700,000	血漿タンパク質LRGの翻訳後修飾に着目した肝癌早期診断マーカーの解析
科研費	挑戦的萌芽研究	三野 和宏	代表	1,400,000	遺伝子導入を用いずに移植片のシャペロン発現を体外で調節する方法の開発
科研費	若手研究 (B)	若山 顕治	代表	600,000	体外でタンパク質を発現させる画期的な心グラフト機能修飾法の開発

2015年の年表・年間行事

2015年の年表・年間行事

月	医局行事	学会	研究会・特別講演・セミナーなど
1月	1.5 仕事始め 1.31 教室総会	1.23 第82回大腸癌研究会 1.24 肝移植周術期管理マネージメントフォーラム	1.9 New Year Seminar 2015 1.10 日本外科学会北海道地区生涯教育セミナー 1.27 第10回モーニングセミナー 1.30 第2回医工連携セミナー
2月		2.13 第17回大阪肝移植研究会 2.21 第102回北海道外科学会	2.6 第23回消化器外科セミナー 2.13 第3回札幌VTRカンファレンス 2.14 第2回肝臓内視鏡外科セミナー 2.21 第3回北海道小児外科フォーラム 2.28 第27回代用臓器・再生医学研究会
3月	3.7 第9回医局対抗バスケットボール大会 3.12 平成27年3月修了学位審査「公開発表会」 3.14 ウェットラボ講習会 3.18 病棟送別会 3.26 第3回鏡視下縫合結紮競技会 (人事異動)	3.4-6 第87回日本胃癌学会総会 3.7-8 第116回日本消化器病学会北海道支部例会 3.9 第21回北海道肝移植適応研究会 3.11-13 British Transplantation Society Annual Congress 3.14 第91回日本小児外科学会北海道地方会 3.14 第14回東日本肝移植周術期研究会 3.21 第27回北海道癌治療研究会学術講演会	
4月	(人事異動) 4.1 年度始めの会 後期研修医11名が入局 4.17 日本外科学会定期学術集会 第一外科 同門親睦会 4.22 7-2病棟歓迎会	4.16-18 第115回日本外科学会定期学術集会	
5月	5.20 消化器外科Ⅰ 縫合結紮講習会	5.2-6 American Transplant Congress 2015 5.15-16 第69回手術手技研究会 5.20 第41回日本急性肝不全研究会 5.21-22 第51回日本肝臓学会総会 5.28-29 第33回日本肝移植研究会 5.28-30 第52回日本小児外科学術学術集会	5.9 第2回北海道ヘルニア倶楽部 5.23 第2回北海道手術手技研究会
6月	6.6 北海道大学第一外科同門会「楯刀会」総会 平成27年度新入会員歓迎会 6.13 ウェットラボ講習会 6.15 平成27年度6月修了学位審査「公開発表会」 6.20-21 医局旅行	6.11-13 第27回日本肝臓内視鏡外科学会・学術集会 6.27 第11回移植医療教育セミナー 6.27 第21回北海道内視鏡外科研究会 6.27 第26回北海道肝がん研究会	6.23 第11回モーニングセミナー
7月	7.5 医局対抗野球大会 7.6 6年生選択実習慰労会 7.10-11 アニマルラボ 7.16 日本消化器外科学会総会 消化器外科Ⅰ 懇親会 7.25 人材確保委員会	7.3 第83回大腸癌研究会 7.8-11 The ILTS 21st Annual International Congress 7.9-11 第19回日本免疫疫学会学術総会 7.10 第37回日本癌局所療法研究会 7.11 第107回日本臨床外科学会北海道支部総会 7.15-17 第70回日本消化器外科学会総会 7.23-24 第51回日本肝臓研究会 7.31-8.1 第4回Reduced port surgery forum	7.25 第2回Hokkaido Hepatology Seminar
8月	8.18 医局BBQ	8.8 第64回北海道血管造影Interventional Radiology研究会 8.23-26 14th Congress of the Asian Society of Transplantation (CAST2015) 8.28-29 第42回日本膵切研究会 8.29-30 第117回日本消化器病学会北海道支部例会	8.7 第3回北海道消化器癌カンファレンス 8.28 第4回札幌VTRカンファレンス
9月	9.10 第1回鏡視下縫合結紮競技会 9.11 消化器外科Ⅰ・医局説明会 9.15 平成27年度9月修了学位審査「公開発表会」	9.4 第11回広島臓器移植セミナー 9.5 第92回日本小児外科学会北海道地方会 9.13-16 17th Congress of the European Society for Organ Transplantation (ESOT2015) 9.19 第10回膵癌術前治療研究会 9.19 第103回北海道外科学会 9.19 第36回日本大腸肛門病学会北海道支部学術集会 9.26 第25回 日本臨床化学会北海道支部例会 9.30-10.2 2nd International Workshop for Clinical Tolerance	9.5 第4回北海道サージカルフォーラム 9.19 第36回日本大腸肛門病学会北海道支部学術集会 9.19 第3回北海道サージカルアカデミー
10月	10.3 第2回アニマルラボ	10.1-3 第51回日本移植学会総会 10.8-10 第74回日本癌学会学術総会 10.8-11 JDDW2015 (第13回日本消化器外科学会大会) 10.11-12 第22回日本未病システム学会学術総会 10.17-20 第68回日本胸部外科学会定期学術集会 10.29-31 第53回日本癌治療学会学術集会 10.31-11.1 第55回日本臨床化学会年次学術集会	10.16 第3回 North Japan Cancer Forum 10.23 第3回北海道周術期管理フォーラム
11月	11.21 関連病院院長医長会議 11.23 医局対抗サッカー大会 予選リーグ 11.26 日本臨床外科学会総会 消化器外科Ⅰ 懇親会	11.13 第42回日本臓器保存生物医学学会学術集会 11.13-14 第70回日本大腸肛門病学会学術集会 11.13-17 AASLD Liver Meeting 2015 11.14 第8回ヘルニアを学ぶ会 11.15-19 IPITA-IXA-CTS 2015 joint congress 11.18-20 第44回日本免疫疫学会学術総会 11.19-20 第26回日本消化器癌発生学会総会 11.25 第9回肝臓内視鏡外科研究会 11.26-28 第77回臨床外科学会総会 11.27-29 第57回日本小児血液がん学会学術集会	11.6 第4回サージカルフォーラム 11.14 敗血症性DICセミナー -Up to Date- 11.17 第12回モーニングセミナー 11.20 Surgical oncology meeting -CRC treatment-
12月	12.5 北海道大学第一外科同門会「楯刀会」忘年会 12.6 医局対抗サッカー大会 決勝トーナメント 12.11 北海道大学病院手術室忘年会 12.11 日本内視鏡外科学会総会 消化器外科Ⅰ 懇親会 12.16 7-2病棟忘年会 12.28 仕事納め	12.3-4 第28回日本バイオセラピー学会学術集会総会 12.5 第108回日本臨床外科学会北海道支部例会 12.10-12 第28回日本内視鏡外科学会総会 12.12 HULT PRIZE @Hokkaido	

1/9 New Year Seminar 2015が開催されました。

1月9日（金）ホテルモントレエーデルホフ札幌において、2015New Year Seminarが開催されました。

一般演題として北海道がんセンター 消化器外科 篠原敏樹先生より「大腸癌肝転移肝切除と周術期化学療法」について発表していただきました。

また特別講演として、東京医科歯科大学大学院 腫瘍外科学分野 准教授 植竹宏之先生より「新時代を迎える分子標的薬の使い分け」と題してご講演いただきました。分子標的薬治療の臨床試験結果の解釈と、症例ごとに分子標的薬の有効な使い方についてお話をいただきました。

当日は雪のなか多くの方がご出席され、New Year Seminarを終了することができました。



1/10 平成26年度日本外科学会北海道地区生涯教育セミナーが開催されました。

1月10日（土）、北海道大学フラテホールで日本外科学会北海道地区生涯教育セミナーが開かれました。6名の講師の方に「若手に伝えるヘモ・ヘルニア手術」のテーマでお願いし、若い人のみならずベテランの先生方にも大変参考になる内容であったと思います。

身近な話題のためか出席者も多く盛況のうちにセミナーを無事終了することができました。



平成26年度日本外科学会 北海道地区生涯教育セミナーのご案内

日本外科学会北海道地区生涯教育セミナーを下記の要領で開催いたします。
会員の先生の方々の多数のご参加をお待ちしております。 北海道地区委員会 委員長 武蔵 紹徳

■ 日 時：平成27年1月10日（土）13:00～16:30

■ 会 場：北海道大学医学部 学生会館「フラテ」
札幌市北区北15条西7丁目 TEL: 011-716-2111（北海道大学代表）

■ 参加受講料：無 料

■ 主 題：「若手に伝えるヘモ・ヘルニア手術」

- 幹事会：北海道大学消化器外科 I 神山 俊哉 先生
1. 痔核根治手術 13:00～13:30
司会：札幌医科大学消化器・総合、乳腺・内分泌外科学講座 平田 公一 先生
講師：札幌いしやま病院 石山 勇司 先生
 2. 痔瘻根治術 13:30～14:00
司会：札幌医科大学消化器・総合、乳腺・内分泌外科学講座 平田 公一 先生
講師：くむちと病院 藤本 正雄 先生
 3. 腹腔鏡下ヘルニア修復術 14:00～14:30
司会：札幌医科大学外科学講座血管外科学分野 東 徳典 先生
講師：札幌医科大学保健医療学部 看護学科 古畑 昭久 先生
- 休 憩 (14:30～14:40) -----
4. 腹腔鏡下経皮的腹腔外ヘルニア閉鎖術 (LPEC法) の現状と問題点 14:40～15:10
司会：旭川医科大学外科学講座血管外科学分野 東 徳典 先生
講師：北海道大学消化器外科 I 本多 昌平 先生
 5. 腹腔鏡下経路ヘルニア手術：
腹腔内アプローチ (TAPP) と腹腔外アプローチ (TEP) 15:10～15:40
司会：北海道大学消化器外科 II 平野 聡 先生
講師：KKR札幌医療センター斗南病院 川原田 陽 先生
 6. 前方アプローチによる経路ヘルニア修復術 15:40～16:10
司会：北海道大学消化器外科 II 平野 聡 先生
講師：みやぎ外科・ヘルニアクリニック 宮崎 恭介 先生

■ 受講者（3種以上の講演を受講した方）には生涯教育セミナー参加証をお渡しします。
本セミナーへの出席は、日本外科学会での各種資格（外科専門医、指導医、認定登録医）の申請、更新等などの研修実績になります。

●日本外科学会教育委員会

委員長：橋上 哲哉 紹徳（地区委員長）

北海道地区小委員会

委員長：武蔵 紹徳

委員：前田 公一、藤本 正雄、平野 聡、

安 貴、青 慎、藤谷 雅之、平田 公一、橋上 哲哉、渡辺 敦、

古川 陽之、松田 昌徳、山下 啓子、

●日本外科学会北海道地区生涯教育セミナー事務局

〒060-8638 札幌市北区北15条西7丁目 noripko@med.nokudai.ac.jp

TEL: 011-706-5927（内線5927）FAX: 011-717-7515

1/15 ASCO GI 2015

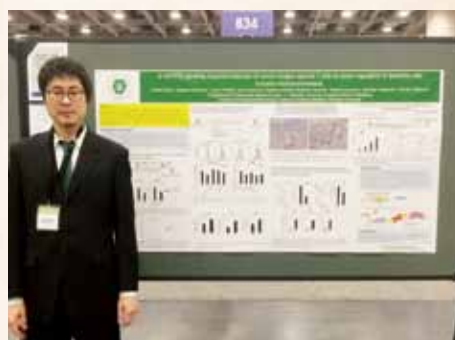
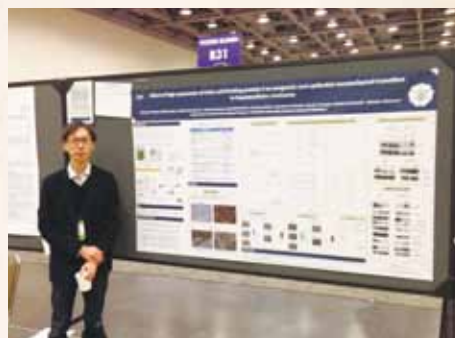
1月15日から17日までASCO GI2015が米国のサンフランシスコで開催されました。

当科からは大学院生2名（大畑、大野）と関連施設から市立函館病院の砂原正男先生が参加して参りました。

大畑は、Effect of high expression of fatty acid binding protein 5 on prognosis and epithelial-mesenchymal transition in hepatocellular carcinoma、大野は IL-6/STAT3 signaling impaired induction of cancer-antigen specific T cells via down-regulation of dendritic cells in tumor microenvironment、砂原先生が Video-assisted thoracoscopic transdiaphragmatic liver resection for malignant tumors located in the posterosuperior segmentsの演題でポスター発表を行いました。

ASCO Annual MeetingよりもLiquid BiopsyやNGSなどといった今後の研究に参考となるような基礎研究での発表が数多くあり大変勉強になりました。

日本の施設からの発表も多数ありましたが、当科からも世界に向けて積極的に発信していかなければならないと強く思いました。



1/27 第10回モーニングセミナーが開催されました。

1月27日（火）第10回モーニングセミナーを開催しました。講師には大阪大学・微生物病研究所・分子ウイルス分野・助教の福原崇介先生をお招きし、ウイルス研究分野での遺伝子改変技術とその応用についてレクチャーして頂きました。特に、近年開発され今後は分子生物学の世界では必須となると思われるCRISPR/Cas9法について、今まで蓄積してこられたコツを惜しげもなくとても詳しくご講演頂きました。大変勉強になりました。今後は当科でも技術を習得し研究に組み込んでいけるようにしたいと考えています。

消化器外科 I
第10回モーニングセミナー

大阪大学微生物病研究所
分子ウイルス分野 助教

福原 崇介 先生

**「CRISPR/Cas9法を用いた遺伝子
改変技術とウイルス研究への応用」**

日時：2015年1月27日（火） 7：30 - 8：30
場所：第一外科医局カンファレンスルーム
お問い合わせ：相山



1/30 第2回医工連携セミナーが開催されました。

1月30日（金）に、第2回医工連携セミナーが開催されました。

一般演題として当科消化管グループ 本間重紀先生に、「現在取り組んでいる手術手技と技術認定医取得に向けての傾向と対策」についてお話していただきました。

また、特別講演として千葉大学 フロンティア医工学センター 教授 林秀樹先生に、「医工連携は異文化交流～10年の経験を振り返って～」を講演していただきました。

医工学の道に進んで10年の経験から、これまでとは異なる視点での考えをご講演していただき、大変参考になる内容であったと思います。

当日は天気も良くない中、多くの方がご出席され、盛況の内に会を終了することができました。



1/31 2015年教室総会が開催されました。

2015年1月31日消化器外科Ⅰの教室総会が、北大医学部臨床大講堂で開催されました。大学、関連病院等から数十名の医局員の先生方が参加されました。

大学の各グループ責任者の先生方から、今年度の成績、結果の分析、来年度の目標などが示されました。また、横尾医局長から今年度の教室行事に関する報告があり、本間重紀先生への医局長交代が発表となりました。最後に武富教授から今年度の総括があり、身が引き締まる思いでした。

総会終了後、顔見せ会が医局で行われました。大学・関連病院の先生方が談笑され、近況などを報告しあい、来年度へ向けて、気持ちを新たにされていました。



2/14

第2回北海道肝胆膵内視鏡外科セミナーが 開催されました。

2月14日（土）センチュリーロイヤルホテルにて第2回肝胆膵内視鏡外科セミナーが開催されました。特別講演といたしまして、「腹腔鏡下肝切除術 必勝マニュアル」と題し、がん・感染症センター 都立駒込病院 本田五郎先生にご講演いただきました。

前半は体位、ポート位置、プリングル方法、deviceなど腹腔鏡下肝切除の基本的なお話から、気腹圧・CVP・気道内圧の三要素から出血コントロールの論理まで非常に勉強になりました。後半は貴重な手術動画を供覧いただき、安全かつ華麗な手術を拝見いたしまして、大変興味深いご講演となりました。懇親会も大変盛り上がり、有意義な時間を過ごさせていただきました。

当日は悪天候の中、飛行機の状態も心配されましたが、無事お越しいただきまして誠にありがとうございました。また、多くの先生方にもご参加いただきましたまして感謝いたします。

本田先生、ご参加されました多くの先生にこの場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。



2/27

第3回北海道小児外科フォーラムが 開催されました。

2月27日（金）18時45分より京王プラザホテル札幌にて、第3回北海道小児外科フォーラムが開催されました。

特別講演には、神奈川県立こども医療センター 外科医長 北河徳彦先生をお招きし、「あきらめない小児がん手術」をテーマにご講演頂きました。肝芽腫の肺転移に対し、部分切除を繰り返すことで局所コントロールを図り、良好な成績が得られることを提示して頂きました。化学療法と遜色ない積極的な外科治療の結果に、会場からは驚愕の声が上がっていました。

当日は小児外科だけでなく小児科の先生方にも多数ご参加頂き、その後の懇親会も含め大変盛況なフォーラムとなりました。今後も小児外科、小児科の積極的な交流を図ることができれば幸いです。

ご講演頂いた諸先生、ご参加頂いた皆様にこの場を借りて心より御礼申し上げます。



2/28 第27回代用臓器再生医学研究会

2月28日（土）に、第27回代用臓器再生医学研究会が当科武富紹信教授会長のもと開催されました。

今回の学会は当科主催によるもので円滑にすすめることができました。一般演題として当科臓器保存グループ 深井原先生に、「ヒト肝細胞リソース樹立のための組織片処理法と培養条件の検討」についてお話していただきました。

また、特別講演として東京都長寿医療センター研究所 研究副部長 大澤郁朗先生に、「水素分子による生体機能制御」を講演していただきました。

水素のメカニズムはまだはっきりしていないですが、生体に良好な効果が認められている報告はいくつもされており、最近の知見・水素水等、大変興味深い内容でした。

基礎医学と臨床医学、そして医工学という近そうで遠い分野による、知識の交流ができ、活発な議論が行われ盛況に会を終えることができました。

多数の参加された皆様方、また遠路より来てくださった大澤先生、誠にありがとうございました。



3/7 第9回医局対抗バスケットボール大会準優勝

3月7日（土）に東区体育館で第9回医局対抗バスケットボール大会が行われました。

当初より毎回参加している第一外科ですが、昨年は3位でした。

今回は予定が合わず人数が少なめでしたが、西部先生、中川先生、旭先生お忙しい中御参加いただき誠にありがとうございました。

予選リーグは消化器外科Ⅱ（他科合同チーム）、麻酔科でしたが、2勝し、順調に決勝トーナメントに進出となりました。この間に残念なことで、重症な怪我人が出てしまい非常にバスケットボールは危ないスポーツであると再認識しました。

準決勝は形成外科が相手でした。昨年と同様の対戦カードであり、リベンジに燃えておりました。最後の最後に再び怪我人が出てしまい、人数が足りないところで神山先生にも出場していただき、リードを守り勝利を掴み取りました。

決勝の相手は整形外科の予定でしたが、当科の人数が怪我人続出で不足の状態となり、残念ながら決勝は棄権せざるを得ず、今年の結果は準優勝でした。

ここ数年は徐々に成績があがり、来年は優勝を狙いたいと思います。そのためにも入局者をますます増やす必要があると思いました。

今回応援に来てくださった看護師さん、関係者の方々ありがとうございました。来年度も応援にぜひ来ていただければ幸いです。



3/12 平成26年度3月修了 学位審査「公開発表会」

平成26年度3月学位取得者が決定し、学位審査「最終審査」に係る公開発表会が行われました。

当分野からは、

馬場基先生（平成15年入局・学位論文タイトル「細胞質のNF- κ B/p65発現はトリプルネガティブ乳癌において予後良好な因子である」）

大野陽介先生（平成20年入局・学位論文タイトル「Studies on functional regulation of human dendritic cells by IL-6/STAT3 signaling pathway and the effects of anti-tumor immunity in a tumor microenvironment」）が発表されました。

馬場先生、大野先生、おめでとうございます。

これからの益々の研鑽を期待したいと思います。



3/14 2014年度第3回内視鏡トレーニングが開催されました。

今回宿泊先の品川でVTRカンファレンスとして後期研修医の2人のビデオ発表と神奈川県川崎市にあるアドバンスドトレーニングセンターにて、今年度3回目となる内視鏡トレーニングが行われました。今回は後期研修医10名の参加となりました。私はVTRカンファレンスで発表の機会を与えていただきましたが、自分の手術ビデオを丹念に見返し、上級医に評価していただく機会は少ないため、非常に勉強になりました。ラボでは、麻酔を施した豚を対象とし、腹腔鏡下における縫合結紮、幽門側胃切除術、高位前方切除術をタスクとして約6時間のトレーニングを行いました。

また、今回は法政大学理工学部機械工学科 石井千春教授に御協力いただき、鏡視下の結紮縫合の鉗子操作時の熟練医と初心者の違いとして、結紮縫合時の力み等に関して測定していただきました。この研究で自分の鉗子操作に関して定量的なフィードバックがあると、今後のトレーニングの指標になるため、非常に画期的なシステムだと思いました。

私達のチームは後期研修医4人の構成で、前回のトレーニングの反省を生かしながら執刀し、何とか時間内にタスクを行うことができました。腹腔内での縫合結紮は前回と比較して明らかにスムーズになっており、ドライラボでのトレーニングの成果が出ていることが実感できました。ただ、自分達の判断で視野を作り、手術を進めていくという実際の手術手技はまだまだ不慣れで、今後の課題だと思いました。

今回、ウェットラボでしかできない貴重な経験させていただき、ご指導頂いた上級医の先生方及び法政大学 石井教授をはじめ、このような機会を頂きました皆様にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。



3/18 消化器外科 I 送別会を行いました。

今年も送別の時期となり、3月18日（水）、毎年恒例の送別会を開催しました。1年間ともに過ごした仲間とお別れということで、すこし寂しい気分もあったのですが、結局飲んだらやっぱり普通に楽しくなっていました。

特に後輩たちに対しては、今後も努力を怠らず、新天地でますます成長していった欲しいと強く願います。今後の自分の行く末を決めるのは、結局は自分次第です。本当に優秀で立派な人は、どこに行っても成長できるはず（と、自分の過去を反省しながら、後輩たちにエールを送りました）。

近い将来、成長した後輩たちに会える日が楽しみです。自分も精進を怠らず成長していこう、と強く思う1日でした。



3/26 2014年度第3回鏡視下縫合結紮競技会が開催されました。

3月26日（木）消化器外科 I ・医局内カンファレンスルームにおいて、今年度第3回鏡視下縫合結紮競技会が開催されました。

今回は、春休み中ということもあり、学生さんの参加が無かった為、後期研修医8名のみの参加となりました。

皆さん、普段のトレーニングの効果を発揮され、ほとんどの先生方が前回のタイムよりも短時間でタスクを終了させていました。

優勝者は、1分45秒の坂本先生でした。これからも、普段のトレーニングを欠かさずに技術を磨いていって下さい。



4/1

帯広協会病院院長に阿部厚憲先生が御就任されました。

昭和59年杏林大学卒業後、北大第1外科に入局させていただきました阿部厚憲です。以来、市立札幌病院を皮切りに31年間関連病院で研修、勤務させていただきました。この度、及能健一前病院長並びに第1外科武富紹信教授よりご推挙いただき、北海道社会事業協会吉田秀明理事長の命を受け帯広協会病院院長を拝命いたしました。当初、到底私に勤まるとは思えませんでしたので辞退申し上げておりましたが、浅学非才を顧みずお引き受けしてしまいました。若い医師、職員から応援され、今年4月1日より何とか走り出すことができました。ここまで来られたのも、偏にこんな私にご指導いただきました第1外科諸先生のお陰と、心より深く感謝しております。ありがとうございました。

帯広協会病院は北大第1外科の重要な関連施設の一つと自覚しております。十勝帯広の皆様に満足いただける医療を提供すること、若い医療者を一人前に育て上げること、全職員が安心して働ける職場環境を構築することを至上の使命と考えております。当院は昭和12年に設立されて以来、78年間帯広・十勝の基幹病院として、また、北海道社会事業協会の旗艦病院としてその役割を果たして参りました。しかしながら伝統ある組織故のひずみを多く抱えており、習慣として行われていた医療行為がまかり通っているのも現状であります。かくいう私もかなり古い部類の医師になってしまいました。全職員とともに切磋琢磨して、もう少し進化した病院を創って行こうと決意しているところです。皆様の期待に沿えるよう職務を全うしたいと考えております。皆様から暖かいご理解、ご協力をいただき、第1外科のご支援を賜りますようお願い申し上げます。



4/1

年度始めの会

4月1日（水）、医局カンファレンスルームで平成27年度年度始めの会を行いました。

本年度は、人事により新たに大学病院勤務となった崎浜先生、下國先生、財津先生、宮城先生、島田先生の5名をはじめ、新入局員10名、大学院生5名の先生方を迎え、総勢60名での消化器外科Ⅰのスタートとなりました。新加入の先生方の挨拶では、皆、それぞれの新たな決意と目標を話され、カンファレンスルーム全体のモチベーションが高く、いつも以上に活気にあふれていました。最後に武富教授より挨拶があり、その一節にあった”Change before you have to”（変革せよ。変革を迫られる前に。）というジャック・ウェルチの言葉は身が引き締まる思いでした。その言葉を胸に、気持ちを新たに診察・研究・教育に携わっていきます。



4/16

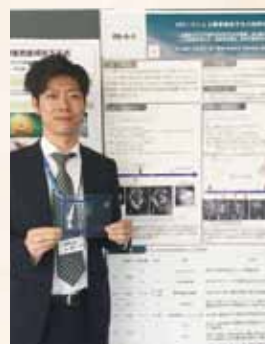
第115回日本外科学会定期学術集会 研修医優秀演題受賞！

4月16日（木）から18日（土）にかけて開催された第115回日本外科学会（於名古屋）にて、教室からは34題が発表されました。

後期研修医は10人全員が演題発表を行いました。

うち石川倫啓先生（演題名：MRシネによる腸管機能不全の診断的活用）、千田圭悟先生（演題名：下大静脈閉塞を伴った多包性肝エキノコッカス症の1例）が「研修医・医学生ポスターセッション」で見事「優秀演題賞」として表彰されました。おめでとうございます。

後期研修医の皆様方の今後の益々の研鑽を期待致します。



4/16

第115回日本外科学会定期学術集会Traveler's Grant取得 Young Investigator's Award受賞

4月16日（木）から18日（土）にかけて開催された第115回日本外科学会（於名古屋）で、消化器移植グループの財津雅昭先生（平成15年入局 演題名：Anti-CD28 antagonism using FR104, a monovalent Fab antibody for the prolongation of human skin allograft survival）がInternational Sessionでの発表で「Traveler's Grant」を、また、大学院生の湊雅嗣先生（平成21年入局 演題名：OCIAD2 の高メチル化は肝芽腫の予後不良因子である）が「Young Investigator's Award」を見事受賞されました。お二方の今後の益々の研鑽を期待致します。



4/17 平成27年度同門親睦会が開催されました。

4月17日（金）、第115回日本外科学会定期学術集会@名古屋に合わせ、名古屋錦町 鳥銀風月にて消化器外科Ⅰの同門親睦会が開催されました。同門会副会長である静和記念病院 院長 草野満夫先生をはじめ、総勢53名の諸先生方が参加され、大変盛大な会となりました。皆、それぞれの近況をご自分の勤めている施設も含め報告しあいながら、それぞれが良い刺激を受けているようでした。僕も含め若手の先生方は、普段なかなかお話す機会のない先輩の先生方のお話をじっくりと聞ける絶好の機会となり、大変有意義な会となりました。来年以降もっと多くの先生方がこの会に出席され、さらに大きな消化器外科Ⅰ 同門親睦会を開催していきたいと感じました。



4/22 消化器外科Ⅰ 歓迎会を開催致しました。

去る4月22日（土）に、再び大学病棟勤務で戻られた先生、研究で大学に戻られた先生、消化器外科Ⅰに入局したフレッシュな先生、消化器外科病棟で勤務することとなった看護師さんたちを対象とした歓迎会を開催致しました。新たな仲間が加わり、よしまた今年1年頑張ろう、という気持ちになりました。後輩たちを見ていると、若い頃の自分を思い出さずにはいられません。自分が当時こうしておけばよかったという後悔を後輩たちにはさせたくないの、厳しくも実りのある研修を積めるように、常に気を配ってやっていきたいと思います。

また4月いっぱいをもって、乳腺外科の山本貢先生が異動されることとなりました。約5年の長い大学勤務でしたが、新天地でもますますご活躍されることをご期待申し上げます。



4/22

大阪大学・微生物病研究所・分子ウイルス分野 に研究見学に行ってきました。

報告が遅くなりまして申し訳ありません。

3月31日（火）～4月11日（土）大阪大学・微生物病研究所・分子ウイルス分野・松浦善治教授のラボに行きまして参りました。松浦教授のラボでは先駆けてCRISPR/Cas9 systemによるゲノム編集技術を導入・確立しており、今回はそれを習得するために小生と小林とで見学して参りました。大変ありがたいことに、短期間の間に多くの手技を体験できるようにスケジュール調整や事前の準備をして頂いた上に、これまでに苦労して積み上げてきた方法やちょっとした（しかし、とても重要な）コツなどを惜しげもなく教えて頂きました。また、最先端に行く活気のあるラボの雰囲気と皆の意気込みを肌で感じることができ、貴重な経験となりました。今後当科でもCRISPR/Cas9 systemを自在に操れるように手技を確立し研究に活かして参りたいと思います。

最後に改めて、快く見学を承諾して頂きました松浦教授を始め、直接丁寧に御指導頂きました福原先生に感謝いたします。また、このような機会と費用を工面して下さいました武富教授を始め当教室員の方々にお礼申し上げます。



5/1

溪和会江別病院長に大森一吉先生が御就任されました。

平成27年4月1日より、溪和会江別病院長に大森一吉先生（昭和59年卒 北大60期）が御就任されました。

この度、大森先生から御挨拶を頂戴致しました。

今後とも御指導御鞭撻の程、何卒宜しくお願い申し上げます。

この度、溪和会江別病院3代目院長に就任しました北大60期卒の大森です。当院は、開院以来、公正・向上・信頼・安心をモットーに、皆様の暖かい御支援・お力添えもあり、本年11月で開院28年を迎える江別市の急性期医療を担う中核病院の一つです。医療を取り巻く情勢は、さらなる消費税導入・マイナンバー制度導入・度重なる診療報酬改定など今後も厳しい状況が予想されますが、これからも地域医療に貢献し、様々な逆風にも力強く生き残っていく病院であり続けられるよう、組織の宝はそこで働く”人”であることを念頭に、浅学非才ではありますが、より一層の努力を惜しまぬ所存です。今後とも第一外科医局ならびに同門の諸先生方々のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



5/2

学会報告（ATC：American Transplant Congress 2015）

2015年5月2～6日、PhiladelphiaでATC 2015が開催されました。当科からは深作慶友、江本慎先生、小野仁先生の3名の演題が採択され、以下の発表をさせていただきました。

深作：The Higher MFI of De Novo Donor-Specific Anti-HLA Antibodies Is Correlated With Graft Fibrosis Progression in Living Donor Liver Transplantation

江本：In Vivo Expansion of Donor-Specific Regulatory T Cells by a New Triazolopyrimidine Derivative and Donor-Specific Transfusion

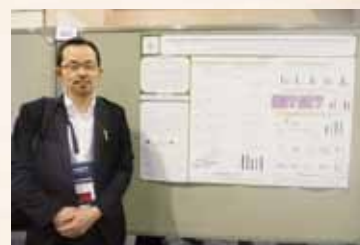
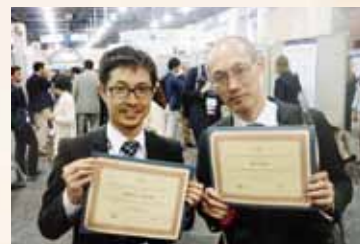
小野：Proteasome Inhibition by Bortezomib Prevents Early Graft Failure After Pancreatic Islet Transplantation

また、深作、江本先生はYoung Investigator Awardを受賞いたしました。

学会内容ですが、DSAに関しては、腎移植においてC1q binding DSAがCAMR（Chronic antibody mediated rejection）に関与するといった報告やEculizumabによる治療に関する報告が見られ、また、肝移植においてHigh MFIがBiliary complicationに関与するといった報告が見られました。全体として、肝移植におけるDSAは病理組織像や治療効果などまだ検討すべき事項が多くある印象でした。

個人的には、初めての国際学会発表で大変緊張し、英語力の乏しさを痛感しましたが、海外での今の研究内容を知る良い機会となり、大変勉強になりました。

来年以降も発表ができるよう研鑽をつんで参ります。



5/8

教室・関連施設から6名が 日本内視鏡外科学会技術認定医に合格しました。

2014年度の第11回日本内視鏡外科学会技術認定医合格者が発表されました。

教室・関連施設から、年間合格者数としては過去最多の6名の先生が合格致しました。

合格率約30%の難関突破、本当におめでとうございます。

次世代の技術認定医育成を含め、今後の益々のご活躍を期待致します。

第11回日本内視鏡外科学会技術認定（消化器・一般外科領域）合格者（敬称略）

小林 清二（胃） 昭和61卒 釧路労災病院

高田 譲二（大腸）昭和63卒 日鋼記念病院

植村 一仁（胃） 平成5卒 独立行政法人国立病院機構 北海道医療センター

船越 徹（大腸）平成14卒 JA北海道厚生連 旭川厚生病院

野口 慶太（大腸）平成15卒 国立がん研究センター東病院（現JA北海道厚生連 札幌厚生病院）

吉田 雅（大腸）平成15卒 北海道大学病院 消化器外科



第2回北海道ヘルニア倶楽部 開催されました。

5月9日（土）、札幌グランドホテルにて、第2回北海道ヘルニア倶楽部が開催されました。特別講演に別府医療センターより川中博文先生をお招きし、「腹部ヘルニアに対する腹腔鏡下修復術（TEPPと腹壁瘢痕ヘルニア）」についてご講演いただきました。続いて、KKR札幌医療センター外科部長の今裕史先生の司会で当教室同門の先生方である、花本尊之先生（苫小牧市立病院）、船越徹先生（旭川厚生病院）、葛西弘規先生（市立札幌病院）に手術ビデオを供覧いただき、ビデオクリニックが行われました。40名近くの多くの参加者にご来場いただき、腹部ヘルニアに対する腹腔鏡下修復術を中心に活発なディスカッションが行われました。終了後には懇親会と前回同様にハンズオンセミナーが開催され大盛況の中で終了いたしました。

関係者の方々、参加いただいた先生方、大変ありがとうございました。

第2回 北海道ヘルニア倶楽部

日時:2015年5月9日(土) 15:00～18:15

札幌グランドホテル 本館3階 紅葉

札幌市中央区北1条西4

011-261-3311

プログラム

開会挨拶 武富 紹儀先生 16:00～16:10
(北海道大学大学院医学研究科外科学講座 消化器外科学分野Ⅰ 教授)

I. 特別講演 15:10～16:10

●議長：武富 紹儀 先生
(北海道大学大学院医学研究科外科学講座 消化器外科学分野Ⅰ 教授)

●演者：川中 博文 先生
(独立行政法人国立病院機構 胆府医療センター 臨床研究部長)

『腹部ヘルニアに対する腹腔鏡下修復術
(TEPPと腹壁瘢痕ヘルニア)』

II. ビデオディスカッション(TEPP, TAPP) 16:10～17:10

●司会：今 裕史先生 (KKR札幌医療センター 外科部長)

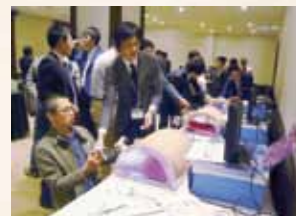
●コメンテーター 川中 博文 先生 (別府医療センター 臨床研究部長)
横田 良一先生 (砂川市立病院 外科部長)
市川 伸樹先生 (釧路市立病院 外科部長)

●演者：花本 尊之先生 (苫小牧市立病院 外科部長)
船越 徹先生 (旭川厚生病院 外科部長)
葛西 弘規先生 (市立札幌病院 外科副部長)

III. 腹壁シミュレーターの使用方法の説明 17:10～17:15

IV. ハンズオンセミナー(TAPP, 腹壁瘢痕ヘルニア) ～懇親会と同時開催～ 17:15～18:15

主催 株式会社メディコン



5/20 消化器外科 I 縫合結紮講習会を開催しました。

5月20日（水）、医学部生を対象とした消化器外科 I 縫合結紮講習会を開催しました。

講習は「糸結び（男/女結び、外科結紮）」「鑷子・持針器での縫合結紮」による2部構成で、当科医局員が学生の傍らにつき実技指導をする形式で行いました。

当日は医学部3年生～6年生、計19名の方々に御参加いただきました。参加された学生の皆様は大変熱心に取り組んでおりました。指導する側としても非常に教え甲斐があり、あっという間に過ぎた2時間でした。その後の親睦会にも講習会に参加できなかった学生の方々が御参加くださるなど、外科に関心を持たれている学生の皆様の熱気を感じた一夜となりました。

御参加いただいた学生の皆様方、ありがとうございました。

今後も実りのある講習会を企画していきますので、是非とも御参加ください。



5/23 第2回北海道手術手技研究会が開催されました。

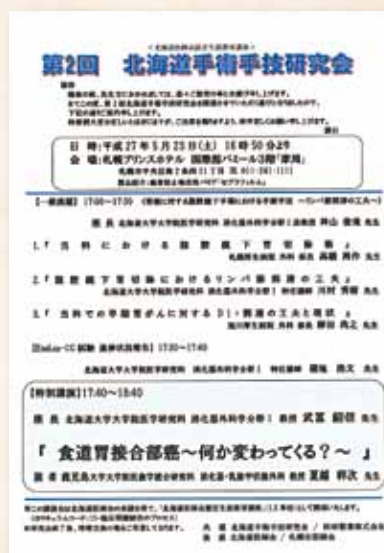
5月23日（土）、札幌プリンスホテル国際館バミールにて第2回北海道手術手技研究会が開催されました。

一般講演では神山准教授の司会のもと、高橋周作先生（JA北海道厚生連 札幌厚生病院）、川村秀樹先生（当科消化管グループ）、柳田尚之先生（JA北海道厚生連 旭川厚生病院）のお三方に、腹腔鏡下胃切除術における各施設での手術手技・工夫に関する御発表をいただきました。

続いて武富教授の司会のもと、特別講演として鹿児島大学大学院医歯学総合研究科消化器・乳腺甲状腺外科教授 夏越祥次先生をお招きし、「食道胃接合部癌～何か変わってくる？～」を御講演いただきました。各種モダリティを駆使した術前診断の取り組み、センチネルノードナビゲーション手術・CLEAN-NET・術前化学放射線療法の取り組みなど、食道胃接合部癌に関して治療の個別化を見据えた多岐に渡る貴重なお話を拝聴することが出来ました。

懇親会では水戸迪郎先生（北大31期 元旭川医大第二外科教授）から乾杯の御挨拶を頂戴するなど、教室・関連施設から多数の先生の御参加をいただき、盛会のうちに終了致しました。

御講演いただいた諸先生方、御参加くださった皆様方に感謝申し上げます。



5/28 第52回日本小児外科学会総会が開催されました。

5月28日（木）～30日（土）、神戸国際会議場（兵庫）にて第52回日本小児外科学会総会が開催されました。本多先生、湊先生、近藤先生、奥村先生、河北先生、ほか同門の先生方で計11名からの発表がありました。学生さん2名も一緒に参加して頂きました。28日には武富教授はじめ同門の先生方と懇親会が開かれ大いに盛り上がりしました。

以下、参加しました医学部6年 佐戸川弥紀さんの感想です。

小児グループ 宮城久之

第52回日本小児外科学会学術集会に参加して

医学部6年 佐戸川弥紀

今回、神戸国際会議場にて5月28日から30日まで開催された第52回日本小児外科学会学術集会に参加させて頂きました。地方会には既に2回も参加させて頂いていましたが、全国学会に参加したのは初めてでした。

専門性が高く勉強不足で理解できない点も多くありましたが、議論が活発に行われており、より知識を深めて理解できるようになりたい、議論の輪に入れるよう努力していきたいと意欲が掻き立てられました。特に一日目の漢方に関する要望演題では越婢加朮湯のリンパ管腫に対する効能を初めて知り、非常に興味深く感じました。もちろんその他の演題も勉強になることばかりで、充実した時間を過ごすことができました。

私の到着時には既に第一外科のお世話になっている先生方の発表は終わってしまっており、拝聴できなかったことが心残りでしたが、全国学会の空気に触れる貴重な機会を与えて下さり、本当にありがとうございました。



6/6 平成27年度同門会総会並びに新入会員歓迎会が開催されました。

6月6日（土）北海道大学第一外科同門会「楡刀会」総会、ならび新入会員歓迎会をニューオータニイン札幌にて開催いたしました。本年度は昨年度以上の129名が出席され、新たに13名の新入会員を迎えました。新入会員の先生方の挨拶では、皆、緊張した面持ちで意気込みなどを語っていました。また、各テーブルでは、先輩である諸先生方に激励の言葉をかけていただけていました。

さらに、今総会では、現会長である川村明夫先生の御退任と、次期会長に中島保明先生の御就任も発表され、盛会のうちに終了いたしました。

ご出席いただきました諸先生方に感謝申し上げるとともに、今後とも、忘年会・新入会員歓迎会と楡刀会行事へのご参加をよろしくお願い申し上げます。

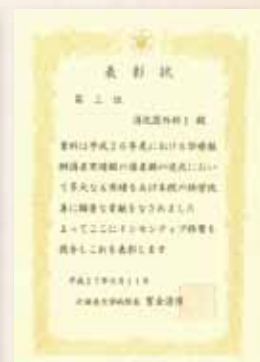


6/11

当科が平成26年度北海道大学病院 インセンティブ経費を授与されました。

当科が「診療報酬請求実績額の請求額達成」(第三位)、「限界利益改善額の増加達成」で北海道大学病院の経営改善に貢献したとの御評価をいただき、平成26年度北海道大学病院インセンティブ経費を授与されました。

普段の臨床業務に関し御評価をいただけたことを大変嬉しく存じます。今後も更なる御評価をいただけるよう取り組んでいく所存です。



6/13

ウェットラボ講習会が開催されました。

6月13日(土)、ほくたけトレーニングセンター Village PlusにてWet-Labo講習会が開催されました。

当日は道内各地の当科関連病院所属の初期研修医27名、医学部生2名、当科後期研修医、関連病院上級医からなる総勢50名の先生方に御参加いただきました。

講習は『豚皮膚・腸管を用いた縫合吻合練習』『鏡視下縫合結紮練習』の2部構成で、初期研修医の先生方・学生を中心とし、後期研修医・上級医が傍らにつき実技指導をする形式で行われました。

豚器官を用いた縫合吻合操作は普段機会が少ないこともあり、初期研修医の先生方は大変熱心に取り組んでおりました。今回、大半の後期研修医の先生方には指導側となっていたいただきましたが、御自身の手技を後輩に伝えることに頑張っておられました。

鏡視下縫合結紮は各施設で行われていることもあり、開始当初から高い技術を披露する先生もいらっしゃいました。初めて鏡視下操作を行う方も、講習終了時には確実な縫合結紮を行えておりました。講習会終了後にいただいたアンケートの通り、『4時間では物足りない』熱気に満ちあふれた会となりました。

今回御参加いただいた研修医の先生方、お忙しい中会場でご指導いただいた上級医の先生方、週末業務多忙のなか若手先生の講習会参加の御配慮をいただいた関連病院の諸先生方に深く感謝申し上げます。また、予想を上回る事前参加登録のため、参加をお断りした先生にはお詫びを申し上げます。(追加開催も含めて) 今後も更に魅力ある若手講習会を企画していきたいと存じます。何卒宜しくお願い申し上げます。



6/15 平成27年度6月修了学位審査「公開発表会」

平成27年度6月学位取得者が決定し、学位審査「最終審査」に係る公開発表会が行われました。

司会進行は当分野特任助教 後藤了一先生がご担当され、木村鐘康先生（平成15年入局・学位論文タイトル「肝移植後早期においてNK細胞によるアロ認識が好中球浸潤の増幅をもたらす肝虚血再灌流障害を増悪させる（Alloreognition by NK cells contribute to augmented hepatic ischemia/reperfusion injury with higher host neutrophil infiltration during early phase after liver transplantation）」）

財津雅昭先生（平成15年入局・学位論文タイトル「Studies of efficacies of 3-[(dodecylthiocarbonyl) methyl] glutarimide on graft arterial disease in mice. (マウス移植後動脈硬化症モデルにおける3-[(dodecylthiocarbonyl) methyl] glutarimideの効果およびその機序の検討)」）が発表されました。

木村先生、財津先生、おめでとうございます。

これからの益々の研鑽を期待したいと思います。



6/20 平成27年度医局旅行（キロロリゾート：ホテルピアノ）

6月20（土）、21日（日）に平成27年度医局旅行が開催されました。

医師、看護師、秘書を含め、30名以上が参加しました。

ホテルに着いた後は宴会までパークゴルフ、セグウェイ、バギーや温泉で一休み等、各々リフレッシュしました。宴会では今年は新たにビンゴを開催し、初ビンゴは教授が当たるという「もってるな」という一場面もあり、2次会でもスタッフの先生の普段とは違う一面があり、盛況でした。宴会を通じて医師、看護師、秘書との親交も深められ、今後とも毎年このような機会が必要と感じました。

参加いただいた皆様、今回時折至らない点もあったと思いますが、色々ご協力いただきありがとうございました。



6/23 第11回モーニングセミナーが開催されました。

6月23日（火）、第11回モーニングセミナーを開催致しました。

講師には、北海道大学大学院医学研究科 生理学講座 細胞生理学分野・教授 大場雄介先生をお招きしました。「細胞内シグナル伝達の光による可視化と操作」という題目で、緑色蛍光タンパク質（green fluorescent protein ; GFP）やフェルスター共鳴エネルギー移動（Förster/ fluorescence resonance energy transfer ; FRET）などを用いた技術をご講演いただきました。生きた細胞内でのシグナル伝達をリアルタイムで観察できるなど、非常にインパクトのある映像の数々で大変感銘を受けました。ご講演いただいた技術を、今後、当科の研究にも生かせたらなと思いました。



7/3 第83回大腸癌研究会

平成27年7月3日、萃香園ホテル（福岡県久留米市）にて第83回大腸癌研究会が開催されました。今回は、大腸鋸歯状病変の癌化、切除可能な遠隔転移を有する大腸癌における外科治療の位置づけ、というメインテーマでした。大学からは、腹腔鏡下肝・大腸同時切除の安全性について吉田が発表致しました。夜は、前教授の藤堂省先生ご夫妻をはじめ、同門の先生方との懇親会が開かれて大いに盛り上がりしました。

以下、研究会に参加しました医学部6年小野寺慧洲君から頂戴した参加報告です。



大腸癌研究会に行って

小野寺慧洲

この度、7月3日に久留米で行われた大腸癌研究会に、同行させて頂いた。学会に参加するのも初めてであり、九州の地に足を踏み入れるのも初めてであった。

2日の便で福岡空港に降り立ったが、思いのほか暑くない。吉田先生と荷物を待ちながら周りを見回しても、自分ほど軽装のものは少ないようであった。そのままバスで久留米に向かい、夜は本間先生と合流し前教授の藤堂先生とお食事した。楽しいへん有意義な時間を過ごすことができた。

3日の大腸癌研究会のテーマは2つあり、主題Ⅰは「大腸鋸歯状病変の癌化」、主題Ⅱは「切除可能な遠隔転移を有する大腸癌における外科治療の位置づけ」であった。正直、難しい内容が多く、特に主題Ⅰの口演は理解できないものが多かった。基礎研究に基づいた話もされていたが、そういった勉強もこれから必要になると感じた。主題Ⅱの口演やポスターセッションでは、それぞれの施設での術前術後補助化学療法や転移症例の同時切除施行例、等を比較検討されており、たいへん興味深く面白かった。似た内容のことが多くの施設で行われているのは、いまだに答えが出ていないということでもあるが、同時に同じ疾患であっても多様性、複雑性を擁しており、その治療もそれだけに対応していかなければならないということでもあろうかと思う。ガイドラインやプロトコルはあり、それに準拠した治療を行うことは大事であるが、目の前の患者がそれで必ず治る保証はされていないということも言えよう。臨床の面白さと難しさを垣間見ることができたように思う。

4日は定刻より早く新千歳に着いた飛行機に乗りながら、庭園のきれいなホテルや屋台などを思い出し、もう少し九州の地を知りたいとも感じた。

梅雨時だと聞いていましたが、3日間通して雨に降られることもなく、いろいろと見聞を広めることができ、たいへんよい経験となりました。このような機会を与えてくださいました！外の皆様に心より感謝申し上げます。

7/5 平成27年度医局対抗野球

先日行われた医局対抗野球大会の結果をご報告致します。

1回戦は7月5日に星置公園で行われました。対戦相手は婦人科・脳外科・耳鼻科の合同チームでした。後期研修医を中心としたチーム構成で、初期研修医や病棟の看護師さんも参加してくれました。ピッチャーの大淵君が力投してくれましたが、実力差が否めず、10-3で敗退しました。去年の2回戦も婦人科相手に敗退しましたが、今年もリベンジを果たすことができませんでした。応援に来てくださった病棟看護師や女性医師には大きな声援をいただき、大変感謝しております。来年までには成長して、リベンジを果たしたいと思いますので、応援よろしくをお願いします。



7/6 6年生選択実習慰労会を開催いたしました。

7月6日（月）、当科で選択実習Ⅰ（4月6日～5月22日）、選択実習Ⅱ（5月25日～7月3日）をまわられた医学部6年生の方々6名を囲み「選択実習慰労会」を開催致しました。

大学病院当科・道内の当科関連病院・Cleveland Clinic等、多岐にわたる施設での実習をこなし、小児外科学会・大腸癌研究会等の全国学会へ参加するなど、6週間の実習期間で臨床に関連する多くの経験をしていただきました（ホームページトップピックス別項で、学生の方から今回の実習の御報告をしていただきます）。

慰労会では、実習先でのエピソードや将来への自分の想いなど、学生の方々から多くの話を聞く事ができ、大いに盛り上がりました。

6名の皆様方、本当にお疲れさまでした。

今回の実習での経験が、皆様方の糧となりますことを願っております。



7/10 アニマルラボが開催されました。

7月10日（金）～11日（土）、福島県須賀川市のトレーニングセンターにて、豚を使った腹腔鏡手術トレーニングに参加してまいりました。

講師に北海道医療センター・植村一仁先生、北海道がんセンター・前田好章先生をお招きし、当科・川村秀樹先生の監督のもと、上級医1名・後期研修医5名の受講生6名でトレーニングを行いました。1テーブルにつき2人ずつの割り当てとなり、それぞれのチームで課題となるタスクに取り組みました。「縫合結紮」、「腸管切離・吻合」、「幽門側胃切除」、「直腸切除」と、設定されたタスクは実際の手術を想定した非常に多岐にわたるものでしたが、どのチームも協力しながら達成することができました。朝10時から昼食をはさんで夕方5時まで、約6時間の濃密なトレーニングを行うことができました。

天候にも恵まれ充実した研修になりました。講師の先生方、諸関係の皆様には厚く御礼申し上げます。

今回、学んだ事を日々の診療に生かせるよう励んでまいりたいと思います。



7/16

第70回日本消化器外科学会総会中に消化器外科 I 懇親会が開催されました。

7月16日（木）、第70回日本消化器外科学会総会（浜松市）の開催に合わせ、すずかけセントラル病院 鈴木友己先生（昭和63年卒 聖マリアンナ医大）と今井敦先生（平成9年卒 北大73期）のお計らいで消化器外科 I 懇親会が開催されました。

当日は武富教授・神山准教授をはじめとし、教室・関連病院から計23名の先生方に御参加いただきました。

鈴木・今井両先生御推薦のお店で、浜松名物の鰻をはじめ美味なる料理・お酒をいただきながら、非常に楽しく有意義な時間を過ごすことができました。

台風で雨脚の強い中にも関わらず御参加いただいた先生方に感謝申し上げます。

最後に、会開催のお心遣いをいただいた鈴木先生・今井先生に深く御礼を申し上げます。ありがとうございました。



7/25

第2回Hokkaido Hepatology Seminarが開催されました。

7月25日（土）、札幌グランドホテルにて第2回Hokkaido Hepatology Seminarが開催されました。

特別講演として東京慈恵会医科大学消化器外科学教授 矢永勝彦先生、国立国際医療センター肝炎免疫センター長 溝上雅史先生をお招きし、それぞれ『高齢者に対する肝胆脾外科手術の適応』『C型慢性肝炎・代償性肝硬変に対する新規治療法について』と題してご講演をいただきました。

フロアが満席になるほどの大盛況で、多くの先生方に御来場いただきました。内科医と外科医の別々の視点から意見が飛び交い、大変貴重なディスカッションとなりました。

終了後には懇親会も開催され、若手・ベテラン医師の枠を超えて意見交換を行うことができました。

関係者の方々、参加いただいた先生方、大変ありがとうございました。

第2回 Hokkaido Hepatology Seminar

日時：平成 27 年 7 月 25 日（土）15:00～17:00
場所：札幌グランドホテル 本館3F（札幌）
札幌市中央区北1条西4丁目
TEL：011-261-3311

■製品紹介 15:00～15:10
CSLベーシング株式会社

■特別講演① 15:10～16:00
座長 北海道大学病院 消化器外科 I
速報 神山 俊哉 先生
『高齢者に対する肝胆脾外科手術の適応』
東京慈恵会医科大学 消化器外科学教授 矢永勝彦先生

■特別講演② 16:10～17:00
座長 北海道大学大学院医学研究科 消化器外科学
教授 武富 朝彦 先生
『C型慢性肝炎・代償性肝硬変に対する新規治療法について』
国立国際医療センター 肝炎免疫センター長 溝上雅史先生

※研究発表終了後、情報交換の場をご用意しております。

本講演会は北海道医師会の承認を得て、北海道医師会認定生涯学習講座（15単位）として開催します。
（1会場につき20名）20名以上の参加は認定のための条件（1会場につき20名）150名以上の参加は認定のためです。
生活習慣病予防の推進に貢献します。参加費は無料です。参加費は無料です。参加費は無料です。参加費は無料です。
参加費は無料です。参加費は無料です。参加費は無料です。参加費は無料です。

主催：CSLベーシング株式会社
後援：北海道医師会、札幌市医師会



7/29

本多昌平先生が平成26年度医学研究科優秀教員賞を受賞されました。

平成26年度北海道大学医学研究科優秀教員賞を本多昌平先生が受賞されました。

医学科4年生対象の臨床講義を行った全教員の中から、優秀教員5名のうちの一人として選考されました。

当科からは岡田 忠雄先生（現北海道教育大学 教育学部札幌校 養護教育専攻 教授）に続いての受賞でした。

日頃からの学生に対する懇切丁寧な指導が評価されました。おめでとうございます。



8/7

第3回北海道消化器癌カンファレンスが開催されました。

8月7日（金）、札幌グランドホテルにて第3回北海道消化器癌カンファレンスが開催されました。

はじめに高橋典彦先生（北海道大学病院手術部 准教授）の司会で、基調講演として札幌医科大学医学部 消化器・総合・乳腺・内分泌外科学講座 助教 沖田憲司先生をお招きし、「がん化学療法における制吐療法の進歩」と題して、化学療法の制吐薬に関するこれまでのエビデンス、制吐薬適正使用ガイドライン作成への取り組み等に関し御講演をいただきました。

続いて武富教授の司会のもと、特別講演として九州大学大学院医学研究科 消化器・総合外科 教授 前原喜彦先生をお招きし、「これまで獲得した、ある程度大きな科研費とその成果」を御講演いただきました。九州大学第二外科の臨床および研究体制、科研費取得の意義、これまで獲得された数多くの科研費とそれらから生み出された多数の臨床/基礎研究の成果、消化器外科学会評議員の現況とその取得意義など、私達北海道の外科医に多岐にわたる貴重な提言をしていただきました。

懇親会では草野満夫先生（静和記念病院 院長）から乾杯の御挨拶を頂戴しました。教室・関連施設から多数の先生の御参加をいただき、盛会のうちに終了致しました。

御講演いただいた御二人の先生方、御参加くださった先生方に感謝申し上げます。

第3回北海道消化器癌カンファレンス
 2015. 8. 7 (Fri.) 19:00-20:30
 【場所】札幌グランドホテル 3階「GINSEN」

製品説明 19:00-19:10
 「アプラキサン点滅器100mg」 大崎薬品工業株式会社 札幌支店 青藤 晴平

基調講演 19:10-19:40
 【座長】
 北海道大学病院 手術部 准教授 高橋 典彦 先生
 「がん化学療法における制吐療法の進歩」
 札幌医科大学医学部 消化器・総合・乳腺・内分泌外科学講座
 助教 沖田 憲司 先生

特別講演 19:40-20:30
 【座長】
 北海道大学大学院医学研究科 消化器外科学分野
 教授 武富 紹信 先生
 「これまで獲得した、ある程度大きな科研費とその成果」
 九州大学大学院医学研究科 消化器・総合外科
 教授 前原 喜彦 先生

主催 大崎薬品工業株式会社
 後援 北海道医師会 札幌市医師会
 共賛 札幌市医師会 札幌市医師会



8/18 医局BBQを開催いたしました。

8月18日（火）、去年に引き続き今年もI外バーベキューイベントを医局のある建物の横で開催しました。

前日までは夏日が続いていたにも関わらず、その日はなんと最高気温が19℃でしかも雨…、不安を抱えながらもキャンプで使用する雨除け（タープ）を設置し強引に始めました。

I外の医師（臨床・研究）や看護師、学生、秘書、実験助手など総勢30人ほどの参加でした。

雨は降っていましたが、アルコールの力も加わり大いに盛り上がりました。

縦・横の親睦がさらに深まり良いイベントになったのではないかと考えております。

今後も機会があれば継続していけたらと考えております。



8/28 第4回札幌VTRカンファレンスが開催されました。

8月28日（金）、第4回札幌VTRカンファレンスがホテルオークラ札幌にて開催されました。

今回は特別講演として、順天堂大学大学院医学研究科 消化器・低侵襲外科学 教授 福永哲先生にお越しいただき、『進行胃がんに対する腹腔鏡下胃切除術—Outside-inからARTまで—』と題し御講演をいただきました。美しい手術ビデオを御提示いただきながら、腹腔鏡下胃切除における切除・郭清・再建の各ポイントを、余すところなくわかりやすく御教示していただき、多くの学びを得ることができました。

続いてVTRカンファレンスとして谷安弘先生（千歳市民病院）、永生高広先生（帯広協栄病院）、廣方玄太郎先生（砂川市立病院）の先生方に腹腔鏡下胃切除のビデオをご供覧いただきました。#6.リンパ節郭清、#8a.リンパ節郭清等に関する各々の先生方の手技をもとに福永先生から多くのアドバイスをいただき、沢山の意見交換が交わされました。最後は時間切れの状態で終了となる程、内容の濃いカンファレンスとなりました。

本会も大学・関連病院から多くの先生方に御参加いただき、盛会のうちに終了することができました。ありがとうございました。



8/29

霜田佳彦先生が第116回日本消化器病学会北海道支部例会で 研修医奨励賞を受賞されました。

2015年3月7日（土）－8日（日）に開催された第116回日本消化器病学会北海道支部例会で、当科をローテートされた霜田佳彦先生が見事研修医奨励賞を受賞され、8月29日の第117回支部例会で表彰されました。演題名は「術前診断し得た後腹膜原発パラガングリオーマの一切除例」でした。

発表そのものだけではなく、質疑応答も含めて優れていた結果の受賞と聞いております。

霜田先生おめでとうございます。今後の益々のご活躍を期待しております。



9/5

第4回北海道サージカルフォーラムが開催されました。

9月5日（土）、第4回北海道サージカルフォーラムが札幌パークホテルにて開催されました。

はじめに川村秀樹先生の司会で、一般演題として吉田雅先生（消化器外科I 消化管グループ）から『腹腔鏡下胃・大腸切除における硬膜外麻酔を用いない術後鎮痛法』と題し経口鎮痛剤＋フェンタニル製剤による周術期疼痛管理の有用性を、植村一仁先生（北海道医療センター外科）から『化学療法施行中に発症した消化管穿孔症例』と題し標題10症例に対する詳細な治療経過・考察を御発表いただきました。

続いて武富教授の司会のもと、特別講演に京都府立医科大学大学院医学研究科 消化器外科学 教授 大辻英吾先生をお招きし、『胃癌に対する臨床的研究』と題し御講演をいただきました。自施設の多くの臨床病理学的データを基盤とした胃癌治療・フォローアップに関する戦略、腹膜播種・肝転移巣検出に対する新規アプローチ方法の開発等、胃癌に関して多岐にわたる貴重なお話をさせていただきました。

教室・関連施設から多数の先生の御参加をいただき、本会も盛会のうちに終了致しました。ありがとうございました。

第4回北海道サージカルフォーラムのご案内

謹啓

晩夏の候、先生におかれましては益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。
さて、この度「第4回北海道サージカルフォーラム」を開催する運びとなりました。
先生におかれましてはご多忙のことと存じますが、万障お繰り合わせの上、ご出席賜りますようお願い申し上げます。

謹白

記

日 時： 平成 27 年 9 月 5 日（土） 16:00～17:30

場 所： 札幌パークホテル

〒061-8589 北海道札幌市中央区南 10 条西 3丁目

TEL：011-511-3131

【一般講演】

座長 北海道大学大学院医学研究科消化器外科学分野Ⅰ
特任講師 川村 秀樹先生

①『腹腔鏡下胃・大腸切除における硬膜外麻酔を用いない術後鎮痛法』
演者 北海道大学病院 消化器外科Ⅰ 吉田 雅先生

②『化学療法施行中に発症した消化管穿孔症例』
演者 北海道医療センター 外科 医長 植村一仁先生

【特別講演】

座長 北海道大学大学院医学研究科消化器外科学分野Ⅰ
教授 武富 紹信先生

『胃癌に対する臨床的研究』
演者 京都府立医科大学大学院医学研究科 消化器外科学
教授 大辻英吾先生

○本研究会は、「北海道医師会認定生涯教育講座」(15 単位)として北海道医師会の承認を受けております。
カリキュラムコード：15 臨床研修医向け(プロセス) 35 (研修) 8 (外傷)
○本講座は、北海道医師会や生涯教育制度に賛同いただいた方々の協力を得て開催いたします。
※ 氏名、医務登録番号等の記載にご協力下さい。ようお願いいたします。
○ご記入いただきました情報は、本講演会実施報告書の作成以外には使用いたしません。

※終了後情報交換会を予定しております。

【主催】アステラス製薬株式会社

【後援】北海道医師会／札幌市医師会



9/10 2015年度 第1回鏡視下縫合結紮競技会が開催されました。

9月10日（木）、医局カンファレンスルームにおいて今年度最初の鏡視下縫合結紮競技会が開催されました。

例年同様『co-axial position、針挿入→両手結び3回→鉗で糸切・針抜き』の内容を、大型スクリーンにつないだドライボックスを用いて行い、合計タイムを競うという形式で行いました。

今回は後期研修医7名、初期研修医1名、学生3名が参加いたしました。

後期研修医の先生方は4月から月2回、仕事終了後に他施設での縫合結紮練習を積んできており、普段は上記内容を1分30秒～2分のタイムでこなしていたのですが、当日は武富教授をはじめ多数の教室員・学生が見守るという状況でプレッシャーがかかったのか、ほとんどの先生が実力を発揮できなかったようでした。

そんな中、本番で自己ベストをだした後期研修医の矢部先生が1分27秒のタイムで見事優勝を飾りました。おめでとうございます。

円滑・確実な縫合結紮手技を得るべく、今後もトレーニングを継続していきましょう。



9/11 平成27年度医局説明会を開催致しました。

9月11日（金）、18：00より医局カンファレンスルームにて平成27年度医局説明会が開催されました。

今年度は大学・道内外の病院から研修医・大学生計23名の方々に御参加いただきました。

説明会では本間重紀医局長から消化器外科Iの研修プログラム・教育方針・診療研究体制・実績を説明されました。国内外施設で活躍されている先生方からのビデオレターもプレゼンテーションされました。

その後はススキノへ移動し懇親会が開催されました。初期研修医・学生の方々を主役として、大学スタッフ・後期研修医の先生方・各関連病院の先生方に御参加いただき、総勢70名の大所帯で行われました。その後の二次会も含めて非常に盛り上がった夜となりました。

御参加いただいた研修医・学生の方々、当日御参加いただいた諸先生方に深く感謝申し上げます。今後も消化器外科Iの魅力をたくさん伝えられるよう取り組んでいきたいと存じます。研修医・学生の皆様、宜しくお願い致します。

**北海道大学
消化器外科I
医局説明会**

『臨床』『研究』『医局』『関連病院』『将来』…
私たち外科にまつわるたくさんのお伝えします

日時：2015年9月11日（金）18:00～
（説明会終了後に懇親会を予定しています）

場所：北海道大学消化器外科I
医局カンファレンスルーム

対象：初期研修医・後期研修医の皆様

お問い合わせ 北海道大学消化器外科I（担当 下園）
011-706-5927 tabimokuni19720421@gmail.com



9/15 平成27年度9月修了学位審査「公開発表会」

平成27年度9月学位取得者が決定し、学位審査「最終審査」に係る公開発表会が行われました。司会進行は移植外科学講座特任助教 深井原先生、消化器外科Ⅰ特任助教 後藤一先生がご担当され、

藤好真人先生（平成15年入局・学位論文タイトル「マウス肝移植モデルにおける機械灌流保存法およびsiRNAを用いた移植前グラフト治療法に関する研究（Studies of machine perfusion preservation and pre-transplant graft therapy using siRNA in mouse liver transplantation model）」）

吉田雅先生（平成15年入局・学位論文タイトル「同種異系膵島移植におけるc-Fos/Activator protein-1阻害による免疫抑制効果に関する研究（Studies on Immunosuppressive Effect of c-Fos/Activator Protein-1 Inhibition on Allogeneic Pancreatic Islet Transplantation）」）

蔵谷大輔先生（平成14入局・学位論文タイトル「NF- κ B阻害剤DHMEQはHMGB1を抑制することによりマウス膵島移植後早期グラフト傷害を抑制する（DHMEQ, a NF- κ B inhibitor, prevents early islet graft damage by suppressing HMGB1 in murine pancreatic islet transplantation）」）が発表されました。

藤好先生、吉田先生、蔵谷先生おめでとうございます。

これからの益々の研鑽を期待したいと思います。



9/15 法政大学理工学部 医療・福祉ロボティクス研究室の皆様にご発表いただきました。

9月15日（火）7時30分からのリサーチカンファレンスにて、現在北大理工学部で開催されている日本機械学会に参加中の、法政大学理工学部機械工学科 医療・福祉ロボティクス研究室（石井千春教授）の博士・修士課程の方々にご発表いただきました。医工連携に関することで、鏡視下操作の運動データを定量的に測定しトレーニングシステムに活用する内容などについてご発表されました。

鏡視下操作時に熟練者と初心者の差がわかるデータを提示していただき、動画の供覧では操作者の突発的な動きや力みが鉗子に加わると警告音が鳴ったり、可視的に表示される工夫もありタイムリーに評価できる興味深いトレーニングシステムでありました。

毎年、当教室では豚を使った腹腔鏡手術トレーニングの研修会も実施しており、今回ご発表いただいた教室に鏡視下操作の運動データを測定していただく予定です。このような医工連携を通して今後も鏡視下手術の発展に少しでも寄与できたらと考えております。



9/17

公益財団法人 三井生命厚生財団 第48回「医学研究助成」を受賞しました。

この度、当分野教授 武富紹信が、研究主題「脂肪性肝炎を母地とする肝癌の切除成績向上の取り組み～質量分析イメージング法を用いた肝脂質代謝プロファイルの評価」において、公益財団法人 三井生命厚生財団 第48回「医学研究助成」を授与されました。

本助成は、生活習慣病をはじめとする主要な医学研究課題について、毎年、国内の大学・病院・医学研究機関の研究者を対象に研究概要の公募・選考が行われます。

今回の助成対象研究は

1. 主幹脳動脈狭窄の治療
2. 過活動膀胱
3. C型肝炎の新しい薬物治療の成績
4. 脂肪性肝炎に起因する肝癌の切除成績

上記4つのいずれかの課題に関する研究で、20研究が助成の対象となりました。

今後も当分野一丸となり日々の研究・業務に邁進し、皆様に寄与できますよう務めてまいります。



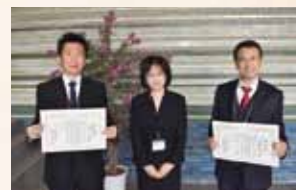
9/19

高橋将人先生・坂本譲先生が第103回北海道外科学会で表彰されました。

9月19日（土）に開催された第103回北海道外科学会で、北海道外科雑誌学会賞ならびに奨励賞の発表がされ、高橋将人先生（北海道がんセンター 乳腺外科）が『転移性再発乳癌に対する内分泌療法－北海道内医師のアンケート調査からの考察－』（北海道外科雑誌 第59巻2号掲載）で学会賞を、坂本譲先生（市立函館病院）が『乳癌にてラジオ波焼灼療法と放射線照射後にpost-radiation sarcomaを生じた1例』（同誌 第59巻1号掲載）で奨励賞を見事受賞され、表彰をされました。

北海道外科雑誌に掲載された論文の中から選ばれたもので、今回同門から初めて学会賞・奨励賞のダブル受賞となりました。

高橋先生、坂本先生、この度の受賞本当におめでとうございます。今後の益々のご活躍を祈念致します。



9/19 第3回北海道サージカルアカデミーが開催されました。

9月19日（土）、第3回北海道サージカルアカデミーがセンチュリーロイヤルホテルで開催されました。

はじめに川村秀樹先生の座長のもと、一般演題として国立がん研究センター東病院でのレジデント歴をお持ちの野口慶太先生（札幌厚生病院）、皆川のぞみ先生（市立札幌病院）のお二方に、東病院でのレジデント時代について、研修後の臨床への取り組みについて御講演頂きました。

続いて特別公演を武富紹信教授の座長のもと、国立がん研究センター東病院 大腸外科科長の伊藤雅昭先生をお招きし、『大腸癌外科治療におけるNCC Eastの挑戦～Education & Innovation～』と題し御講演を頂きました。本年より科長になられた伊藤先生の教育に関する幅広い取り組み、大腸外科治療における新時代への展開について熱いお話を頂きました。

多数の先生方にお集まり頂き大変盛況な会となりました。懇親会ではラグビー談話に花が咲き、会話が尽きませんでした。御講演頂いた先生方、御参加頂いた先生方に厚く御礼申し上げます。今後ともよろしく御願ひ致します。



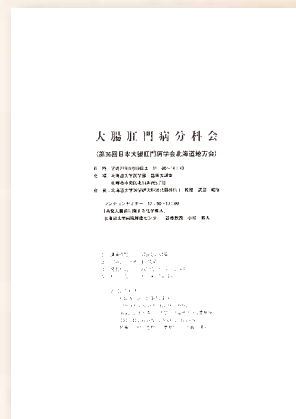
9/19 第36回日本大腸肛門病学会北海道地方会が開催されました。

9月19日（土）、北海道大学医学部 臨床大講堂にて、第36回日本大腸肛門病学会北海道地方会（第95回北海道医学大会 大腸肛門病分科会）が当科 武富紹信教授を会長のもと開催されました。

第103回北海道外科学会や消化器内科関連の会が同時に開催されたこともあり本会参加人数が少ないことが心配されましたが、当日は60人の先生方に御参加いただきました。一般演題として16人の先生方から御発表をいただき、活発な質疑応答が交わされました。

またランチョンセミナーとして、北海道大学病院腫瘍センター 診療教授 小松嘉人先生から『進行再発大腸がんの薬物療法』と題して、近年細分化・複雑化する大腸癌化学療法の最新のデータ・実臨床での抗癌剤選択方法などを、非常にわかりやすく御解説していただきました。

御発表いただきました先生方、本会に御参加いただきました多くの先生方に深く感謝申し上げます。



10/3 平成27年度 第2回アニマルラボが開催されました。

10月3日（土）、神奈川県川崎市のトレーニングセンターにてアニマルラボが開催されました。

前夜の懇親会の熱気もそこそこに、当日は日本内視鏡外科学会技術認定医である当科 川村秀樹先生、日鋼記念病院 高田譲二先生、岩見沢市立病院 市川伸樹先生の3名を講師とし、受講生（上級医1名、後期研修医6名の計7名）が3グループに分かれてトレーニングに臨みました。

豚生体を使用したトレーニングで、幽門側胃切除・前方切除を行いました。普段経験することの少ない「術者」という立場での進行に開始当初は戸惑いでしたが、講師の先生方に的確な御指導をいただきながら、グループ内で積極的に声を掛け合い課題を完遂することができました。

懇親会、トレーニングともに充実し、今後のステップアップの足がかりとなるとても有意義な内容であったと思います。講師の先生方、諸関係の皆様方に心より御礼申し上げます。



10/16 第3回 North Japan Cancer Forumが開催されました。

10月16日（金）、第3回 North Japan Cancer Forumが札幌グランドホテルで開催されました。

はじめに札幌厚生病院 高橋昌宏先生の座長のもと、一般演題として杉山昂先生（JCHO北海道病院）、石川倫啓先生（札幌厚生病院）の二人から、それぞれ胃癌・大腸癌に対する化学療法の知見について御講演頂きました。

続いて特別公演を武蔵紹信教授の座長のもと、東京女子医科大学 消化器病センター長 消化器外科教授・講座主任 山本雅一先生をお招きし、『東京女子医大式肝切除術』と題し御講演を頂きました。先人たちの残した黎明期の貴重な映像を始め、現在の肝切除手技にいたるまでの歴史や技術的な要点および今後の展望などをわかりやすくお話しいただきました。金曜日の夜にも関わらず60名以上の参加者にて大変盛況な会となりました。

その後の懇親会でも大変盛り上がりしました。御講演頂いた先生方、御参加頂いた先生方に厚く御礼申し上げます。



10/23

第3回北海道周術期管理フォーラムが 開催されました。

10月23日（金）、第3回北海道周術期管理フォーラムが京王プラザホテル札幌にて開催されました。ミニレクチャーとして北海道大学病院 卒後臨床研修センター准教授 石森直樹先生から「周術期における血圧管理のポイント」、特別講演として千葉大学大学院医学研究院 先端応用外科学教授 松原久裕先生より「食道癌に対する集学的治療の展開」を御講演していただきました。

石森先生には、周術期における血圧管理のポイントや、高血圧治療に関する最新のトピックを御講演いただきました。また、松原先生には食道癌治療におけるリンパ節郭清の意義と今回の食道癌取り扱い規約の改変との関連性から、周術期管理の要点まで御講演いただきました。計35名の方に御参加者頂き、その後の懇親会も含め大変盛況なフォーラムとなりました。

ご講演頂いた諸先生、ご参加頂いた皆様にこの場を借りて心より御礼申し上げます。



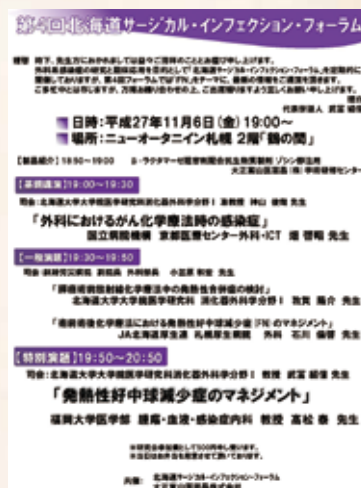
11/6

第4回北海道サージカル・インフェクション・フォーラムが開催されました。

11月6日（金）、第4回北海道サージカル・インフェクション・フォーラムがニューオータニイン札幌にて開催されました。基礎講演として国立病院機構 京都医療センター外科・ICT 畑啓昭先生から「外科におけるがん化学療法時の感染症」を、特別講演として福岡大学医学部 腫瘍・血液・感染症内科教授 高松泰先生より「発熱性好中球減少症のマネジメント」を御講演していただきました。また、一般演題として北海道大学大学院医学研究科 消化器外科学分野 敦賀陽介先生より「膵癌術前放射線化学療法中の発熱性合併症の検討」を、JA北海道厚生連 札幌厚生病院外科 石川倫啓先生より「術前術後化学療法における発熱性好中球減少性（FN）のマネジメント」を発表していただきました。

畑先生には、がん化学療法を中心とし、外科診療に関連した感染症管理のエッセンスを、分かりやすく御講演いただきました。また、高松先生は発熱性好中球減少症の最新の知見を、エビデンスに基づいて非常に詳しく御教授下さいました。病棟管理に関わる感染症診療のトピックスであり、医師のみならずメディカルの方々も大勢参加していただき、大変盛況なフォーラムとなりました。

その後の懇親会も大変盛り上がりしました。ご講演頂いた諸先生、ご参加頂いた皆様にこの場を借りて心より御礼申し上げます。



11/14

敗血症性DICセミナー

-Up To Date-が開催されました。

11月14日(土)、敗血症性DICセミナー -Up To Date-が札幌グランドホテルにて開催されました。

はじめに蒲池浩文先生を座長に、一般演題として北海道大学大学院医学研究科 消化器外科学分野 島田慎吾先生より「脾全摘後の敗血症DICにリコモジュリンが有効であった一例」をご発表頂きました。

レクチャーとして鹿児島大学病院 救急救命センター システム血栓制御学講座(兼務)講師 伊藤隆史先生から「トロンボモジュリンの意義を考える」というテーマで御講演いただきました。生体侵襲におけるトロンボモジュリンの抗凝固作用、抗炎症作用について、3Dグラフィックを交えながら、とても理解しやすいお話でした。

また特別公演を武富紹信教授の座長のもと、横浜市立大学医学部 消化器・腫瘍外科学教授 遠藤格先生より「肝胆膵領域のDIC -臓器不全への進展を阻止するためには-」をご講演いただきました。DICの最新の知見について、専門である肝胆膵外科領域を中心に、基礎から臨床応用までエビデンスを交えながら、大変興味深い内容でした。

およそ50名の方に御参加者頂きまして、大変盛況なセミナーとなりました。懇親会も大変盛り上がりました。ご講演頂いた諸先生、ご参加頂いた皆様にこの場を借りて心より御礼申し上げます。



11/17

第12回モーニングセミナーを開催致しました。

11月17日(火)、第12回モーニングセミナーを開催致しました。

講師には、北海道大学大学院 先端生命科学研究院 先端融合科学研究部門 新薬探索研究分野 教授 西村紳一郎先生をお招きし、「シグナル伝達の翻訳後糖鎖修飾と癌細胞の生活環：疾患特異的エピトープの探索からの新しい抗がん剤の開発」というテーマでお話いただきました。

糖鎖と聞くととっつきにくいイメージではありましたが、概論から丁寧に説明いただき、非常に理解しやすい内容でした。エピジェネティクスである糖鎖修飾を少し変化させるだけで体内動態・体内分布をも変えることができ、糖鎖を考慮した抗体医薬の開発はまだ未開拓なところがたくさんあることわかりました。

既に当科とは臨床・研究共にお世話になっておりますが今後も密に連携し、更なる成果を上げていけたらと存じます。



11/20

Surgical oncology meeting-CRC treatment-が開催されました。

11月20日（金）、Surgical oncology meeting-CRC treatment-がプレミアホテル-TSUBAKI-札幌にて開催されました。はじめに札幌医科大学 保健医療学部 基礎・臨床医学講座 教授 古畑智久先生の座長のもと、一般演題として札幌医科大学 消化器・総合、乳腺・内分泌外科 助教 沖田憲司先生より「レゴラフェニブ投与で長期間継続したSD2症例」を、函館厚生院 函館五稜郭病院 外科 科長 小川雅彰先生より「レゴラフェニブ治療、12症例の使用経験」を、KKR札幌医療センター 消化器外科 診療部長 小池雅彦先生より「当院におけるレゴラフェニブの使用経験と副作用対策」を、それぞれレゴラフェニブの使用経験を交えて至適投与量や多様な副作用への具体的対策法についてご講演いただきました。また、舩越徹先生（旭川厚生病院 外科 医長）より「スチーパーガ EXPERT REVIEW」をご講演いただきました。

続いて、特別講演を当科 武富紹信教授の座長のもと、東海大学医学部 消化器外科 准教授 田中彰先生より「再発進行大腸癌の3rd line以降の治療」をご講演いただきました。田中先生には、再発進行大腸癌のサルベージライン治療として、レゴラフェニブの有用性および副作用マネジメントについて、最新の知見を交えて詳しく説明いただきました。特にレゴラフェニブと新たなサルベージライン治療薬であるTAS-102の比較では、単剤および併用療法、どちらを先行すべきかを含め、エビデンスに基づき解説していただき大変勉強になりました。講演後も、症例の選択等について活発な議論が交わされておりました。

おおよそ70名の方に御参加いただき、その後の懇親会は大変な盛況となりました。ご講演頂いた諸先生、ご参加頂いた皆様にこの場を借りて心より御礼申し上げます。



ムネサツ大森ビルビル
札幌市中央区南一条西五丁目1番1号
TEL: 011-862-8-1111 (代)

11/21

関連病院院長・医長会議が開催されました。

11月21日（土）13時より関連病院院長・医長会議を開催いたしました。総勢44名の参加があり、武富教授より外科専門医制度や後期研修医の確保についての現状説明があった後、消化器外科Ⅰと乳腺外科のそれぞれのチームより報告がありました。続いて、各関連施設の現状につきお話をいただきました。

これから教室としましてもできるだけご要望に応えられるよう努力していきたいと思います。



11/26 第77回日本臨床外科学会総会中に消化器外科 I 懇親会が開催されました。

11月26日（木）、第77回日本臨床外科学会総会（福岡）の開催に合わせ、消化器外科 I 懇親会が開催されました。大変遅くなりましたが御報告致します。

当日は武富教授をはじめとし、教室・関連施設から計18名の先生方に御参加いただき、非常に楽しい博多の夜を過ごすことができました。

直前の御案内にも関わらず、御参加いただいた先生方に感謝申し上げます。また当日お声をかけることのできなかった先生方にはお詫び申し上げます。

今後も全国学会での懇親会開催を企画致しますので、宜しくお願い致します。



11/30 川俣太君（平成17年入局）、オーストラリア留学へ出発。

平成17年入局の川俣太君がオーストラリアのクイーンズランド医科学研究所（QIMR Berghofer Medical Research Institute）の Conjoint Gastroenterology Laboratory 教室（Barbara教授、Vicki教授）での留学のため出発しました。

Barbara教授およびVicki教授は消化器癌のゲノムワイド解析の世界的権威であり、川俣君も当教室のサンプルを持参して「ゲノムワイド解析を用いた大腸癌浸潤および肝転移成立における分子機序の解明」について研究予定です。

大いなる成果を期待したいと思います。まずは健康と安全に留意して頑張ってください。



12/5 第108回日本臨床外科学会 北海道支部例会学会賞を受賞！

12月5日（土）に開催された第108回日本臨床外科学会北海道支部例会（会長：竹政伊知朗先生）にて当科特任助教の崎浜秀康君（平成6年入局）が学会賞を受賞しました。

演題は「大腸癌の循環腫瘍細胞と骨髄腫瘍細胞：予後予測マーカーとしての比較」です。おめでとうございます。

さらなる研究の発展と外科診療への応用を期待しています。



12/5 平成27年度同門会忘年会が開催されました。

12月5日（土）、ホテルニューオータニ札幌において同門会幹事会、講演会、忘年会が開催されました。講演会では、本年度イギリス オックスフォード大学の留学より戻られた財津雅昭先生よりTransplantation Research Immunology Group (TRIG) Labからの世界の眺め～ 英オックスフォード大学への留学」という演題名で留学生活や研究内容の発表がありました。講演後の討論では、現在の移植医療における制御性細胞の役割やその動向について議論が交わされました。

続く忘年会では、総勢129名の先生方が参加され、大変盛大な会となりました。その中で、同門会長である中島保明先生より、2021年に開講100周年を迎えるとのことがありました。100周年まではまだ少し時間がありますが、本講座の歴史の長さ大きさを改めて実感し、一年の最後に気持ちを新たにできる会となりました。



12/6 医局対抗サッカー大会 3位入賞！

先日行われた医局対抗サッカー大会決勝トーナメントの結果をご報告致します。

12月6日（日）に農試公園屋内競技場で行われました。一回戦はリハビリテーション科に8対0で勝利しましたが、準決勝では循環器内科に0対3で負け、3位決定戦は不戦勝で3位という結果でした。

森田先生、大野先生、沢田先生、谷先生、後藤先生、財津先生、相山先生、石川先生、加藤（拓也）先生、脇坂先生、太田先生、千田先生、小林さん、佐野先生、河北先生、と応援の看護師さんと多くの皆さんにお集り頂き、大変盛り上がった大会となりました。接戦を繰り広げましたが、昨年に続き3位という悔しい結果に終わりました。来年こそは雪辱を果たし、優勝の報告ができることを願っております。

応援に来てくださった方々には大きな声援をいただき、大変感謝しております。皆様ありがとうございました。



12/11 第28回日本内視鏡外科学会総会中に消化器外科 I 懇親会が開催されました。

12月11日（金）、第28回日本内視鏡外科学会総会（大阪）の開催に合わせ、消化器外科 I 懇親会が開催されました。

武富教授をはじめとし、教室・関連施設から（博多の臨床外科学会懇親会を上回る）計25名の先生方に御参加いただきました。

御参加いただいた先生方、お忙しい中御都合をつけていただき本当にありがとうございました。

また、当日は折角参加を御希望いただきながら、懇親会会場の関係からお断りをさせていただいた先生もいらっしゃいました。直前の御案内であったことをお詫び申し上げます。

今後とも宜しく願い致します。



12/16 消化器外科Ⅰ 忘年会が開催されました。

去る12月16日（水）に、消化器外科Ⅰの医師、7-2病棟の看護師・スタッフの皆様で忘年会を開催致しました。4月より新しく仲間となりました後期研修医の先生方、新人看護師の方々にそれぞれ、「今年の辛かったこと・うれしかったこと」を報告して頂きました。それぞれ苦勞があり、克服されてきたようでたくましく感じました。

2次会では後期研修医、看護師それぞれより余興を披露して頂きました。後期研修医の余興は手術部忘年会で見事3位に輝き、師走で日常業務も忙しい中、時間を削って練習された様子でした。宴会に立派な花を咲かせてくださいました。

来年も益々一致団結したチームワークで、あらゆる困難にも立ち向かえることを確信致しました。



12/21 藤好真人君（平成15年入局）、オランダ留学へ出発。

平成15年入局の藤好真人君がオランダのフローニンゲン大学医療センターへの留学に出発しました。

同センター外科（Porte教授）では年間成人肝移植40例、小児肝移植20例、肝胆膵手術および腎移植130例程を行っているオランダの肝胆膵外科の中心的なセンターです。藤好君は北大で手掛けていた「マウス肝移植モデルを用いたマージナルドナー肝の分子生物学的修復法の開発」を継続する傍ら、臨床フェローとしての臨床修練も予定しています。

大いなる成果を期待したいと思います。まずは健康と安全に留意して、頑張ってください。



関連病院紹介

関連病院紹介

2014年関連病院手術数

▼施設名▼		全身 麻酔	脊椎 麻酔	局所 麻酔	食道癌	鏡視下	胃癌	鏡視下	結腸癌	鏡視下	直腸癌	鏡視下	原発性 肝 癌	鏡視下	転移性 肝 癌	鏡視下	肺癌	鏡視下
がん セン ター 道	消化器外科	270	0	50	3	0	45	15	55	39	32	13	6	0	11	0	8	0
	呼吸器外科	232	0	22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	乳 腺 外 科	330	0	40	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
市立札幌病院		641	24	287	1	0	47	14	70	44	27	16	10	1	16	2	11	0
岩見沢市立総合病院		403	34	18	5	0	29	12	66	42	25	13	0	0	6	0	13	0
市立苫小牧総合病院		376	9	5	0	0	32	7	41	25	20	12	5	0	6	2	2	0
釧路労災病院		583	1	56	7	0	44	23	73	34	37	11	5	0	2	0	9	0
札幌厚生病院		1,058	0	29	0	0	111	74	114	72	77	35	78	13	16	7	27	2
旭川厚生病院		753	6	6	4	0	85	33	93	46	42	24	1	0	14	1	13	0
帯広協会病院		468	27	9	0	0	31	9	46	19	16	9	9	0	0	0	7	0
KKR札幌医療センター		693	3	34	3	2	39	20	76	53	23	18	4	—	6	—	10	1
JCHO札幌北辰病院 (社 保 総 合)		317	6	45	0	0	24	17	38	23	20	12	3	0	8	2	6	0
日鋼記念病院		503	25	21	6	2	34	16	24	15	17	9	3	0	4	0	3	1
市立函館病院		707	56	53	4	0	42	15	124	119	33	33	17	6	4	2	17	0
北海道医療センター (旧 国立西札幌)		419	0	86	0	0	27	12	66	42	29	17	7	0	10	0	4	0
市立稚内病院		208	4	0	0	—	9	1	23	7	11	1	0	—	1	—	2	—
士別市立病院		127	2	109	0	0	14	1	19	2	4	0	1	0	10	0	1	0
砂川市立病院		434	5	34	0	0	32	25	42	37	27	20	2	2	6	4	3	0
小樽市立病院		346	20	122	0	0	18	8	39	25	12	7	0	0	4	0	4	0
市立千歳市民病院		208	8	13	—	—	16	7	30	5	13	0	—	—	1	0	—	—
網走厚生病院		318	5	18	—	—	20	11	32	18	16	15	2	—	1	—	1	—
JCHO北海道病院 (北 海 道 社 保)		408	0	13	0	—	36	14	42	21	9	9	13	—	19	1	8	—
天 使 病 院		465	0	22	0	0	11	11	27	7	8	2	3	1	2	0	2	0
浜和会江別病院		308	12	210	2	—	24	2	30	5	18	—	5	—	1	—	11	—
札幌北極病院		436	143	913	0	0	28	16	45	37	17	17	4	0	10	6	2	0
北農会恵み野病院		348	0	25	1	0	30	6	37	11	23	10	1	0	0	0	3	0
苫小牧日翔病院		142	3	79	0	0	8	0	16	6	3	0	1	0	1	0	1	0
市立美唄病院		1	2	29	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
市立三笠総合病院		35	18	57	—	3	2	5	3	5	1	—	—	2	—	—	—	—
斜里町国保病院		15	11	31	0	0	3	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0
町立中標津病院		146	3	1	—	—	8	6	11	5	9	4	—	—	1	—	1	—
森町国保病院		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
西さっぽろ病院 (旧 河西外科)		154	59	117	0	0	1	1	6	2	8	3	0	0	1	0	0	0
静和記念病院		213	1	22	0	0	4	0	16	2	10	0	0	0	0	0	0	0
北海道対がん協会		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
洞爺協会病院		68	10	86	—	—	3	2	5	5	3	2	—	—	—	—	—	—
網走中央病院		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
札幌北クリニック		0	0	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
北 札 幌 病 院		—	—	23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
すずかけセントラル		104	4	43	0	0	9	3	11	7	7	4	0	0	1	0	0	0
長万部町立病院		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
はまなす医院		40	1	27	0	—	1	0	1	0	0	—	0	—	0	—	0	—
静仁会静内病院		3	2	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
新札幌聖陵ホスピタル		0	0	93	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合 計		12,280	504	2,865	36	7	867	386	1,322	780	597	316	180	25	163	27	169	4

胆道癌	鏡視下	乳癌	鏡視下	甲状腺癌	鏡視下	肺癌	鏡視下	胆石症	鏡視下	虫垂切除	鏡視下	小腸切除	鏡視下	鼠径ヘルニア根治術	鏡視下	その他	鏡視下
6	0	—	—	—	—	—	—	12	11	3	2	3	1	36	—	101	—
0	0	0	0	0	0	146	122	0	0	0	0	0	0	0	0	42	33
0	0	310	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30	0
5	0	90	0	0	0	0	0	72	66	35	11	—	—	36	18	531	9
6	0	21	0	3	0	23	17	46	40	53	3	5	0	53	3	97	12
8	0	24	0	0	0	21	14	60	55	35	30	8	2	44	9	—	—
2	0	55	0	0	0	7	4	93	66	43	31	16	2	114	26	133	10
11	0	67	0	97	0	31	29	129	99	27	2	14	0	79	58	180	52
8	0	56	0	0	0	80	70	70	51	48	30	11	3	157	60	168	8
0	0	51	0	6	0	0	0	69	60	73	25	14	0	93	9	89	1
7	—	105	—	—	—	65	58	80	75	77	62	9	1	57	36	181	44
6	0	22	0	4	0	0	0	33	22	23	23	19	10	85	22	77	5
5	1	40	0	1	0	18	18	29	26	27	17	7	0	66	27	266	41
12	0	71	0	0	0	0	0	90	88	39	88	28	2	98	27	102	0
4	0	11	0	5	0	38	33	77	67	42	38	16	6	57	44	198	21
0	—	7	—	0	—	7	3	37	20	24	7	12	—	49	2	36	2
5	0	5	0	0	0	0	0	16	12	6	4	19	0	11	0	127	2
3	0	60	0	0	0	0	0	70	59	33	32	14	4	84	28	127	12
1	0	29	0	1	0	0	0	47	42	19	3	11	2	51	23	252	6
—	—	—	—	—	—	—	—	34	18	30	27	3	0	46	3	48	6
2	—	20	—	1	—	—	—	60	50	35	21	—	—	68	36	83	16
11	—	13	—	5	—	23	23	62	51	39	9	23	—	60	3	—	—
0	0	29	0	1	0	4	4	30	26	30	24	14	1	158	148	172	19
1	—	8	—	2	—	4	5	49	37	29	2	4	—	41	—	344	—
2	0	0	0	0	0	2	2	72	59	24	18	9	0	34	19	689	0
2	0	11	0	2	0	1	1	54	48	34	12	10	0	77	27	62	9
0	0	1	0	0	0	0	0	17	13	15	8	7	0	37	11	147	8
—	—	2	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	29	—
—	2	—	1	—	—	—	—	7	5	2	—	2	—	13	—	76	—
0	0	0	0	0	0	0	0	5	2	1	0	1	0	6	0	41	0
—	—	4	—	1	—	—	—	29	25	20	—	13	—	37	—	18	2
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
0	0	1	0	0	0	0	0	24	21	23	21	5	2	47	39	214	15
0	0	0	0	0	0	0	0	33	16	41	34	0	0	9	0	50	2
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1	—	—	—	1	—	—	—	8	8	6	6	2	1	15	—	70	1
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	23	—
0	0	4	0	0	0	1	1	31	31	2	2	—	—	29	21	56	6
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
0	—	1	0	0	0	0	0	3	2	9	3	0	0	3	0	50	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12	0
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
108	3	1,118	6	130	0	471	404	1,549	1,271	947	595	299	37	1,850	699	4,921	342

■ 関連病院総手術件数（2007年～2014年）

施設名	2007年			2008年			2009年			2010年			2011年			2012年			2013年			2014年		
	全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔
がんセンター1	—	—	—	—	—	—	259	0	119	280	0	180	300	0	120	300	0	150	312	0	141	270	0	50
乳 腺 外 科	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
消化器外科	787	3	115	443	7	59	501	4	57	526	3	47	206	3	37	286	0	31	282	1	47	232	0	22
呼吸器外科	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	261	0	16	245	0	21	330	0	40
市立札幌病院	556	65	152	568	46	138	544	36	156	604	34	161	625	33	217	617	48	223	609	38	280	641	24	287
岩見沢市立病院	318	77	57	303	60	62	332	77	37	383	73	43	311	71	34	328	75	35	313	28	19	403	34	18
苫小牧市立総合病院	425	80	27	463	63	40	426	62	36	395	50	28	424	42	16	355	18	22	371	14	16	376	9	5
釧路労災病院	672	5	122	575	6	99	645	4	87	639	4	93	590	3	73	629	1	43	663	3	42	583	1	56
札幌厚生病院	943	1	25	917	2	11	944	—	23	934	2	32	964	1	27	953	1	38	1034	0	32	1058	0	29
旭川厚生病院	641	79	29	773	54	23	694	70	8	652	80	16	719	0	0	702	0	0	711	5	12	753	6	6
帯広協会病院	394	109	59	390	100	37	474	0	36	427	0	20	436	3	22	459	10	10	438	13	12	468	27	9
KKR札幌医療センター	560	0	45	602	0	46	708	0	49	740	0	26	704	0	90	720	0	6	693	2	36	693	3	34
JCHO札幌北辰病院 (社 保 総 合)	461	5	41	422	3	26	430	1	27	360	0	22	387	0	21	383	0	22	320	0	33	317	6	45
日鋼記念病院	708	60	37	574	60	53	560	39	34	583	31	24	540	33	22	514	35	22	602	23	23	503	25	21
市立函館病院	622	63	77	682	52	61	775	18	96	765	21	89	683	32	69	703	32	72	641	60	83	707	56	53
北海道医療センター	331	3	57	358	2	53	405	6	72	484	1	58	415	5	48	440	12	49	463	2	39	419	0	86
市立稚内病院	209	37	5	198	49	10	171	45	5	226	42	7	226	32	2	225	11	0	240	0	0	208	4	0
市立士別病院	137	39	83	89	36	85	84	41	75	91	46	79	123	26	76	147	1	91	106	2	100	127	2	109
砂川市立病院	293	110	5	396	12	7	397	10	3	370	0	30	395	7	32	430	5	34	389	3	35	434	5	34
小樽市立病院	251	37	112	260	31	117	235	38	114	244	26	130	265	38	137	276	29	135	299	31	105	346	20	122
千歳市民病院	226	39	6	201	41	5	225	21	10	206	40	6	245	4	12	201	25	5	215	17	9	208	8	13
網走厚生病院	365	22	40	360	11	45	352	7	23	312	12	27	315	4	19	316	6	22	316	6	12	318	5	18
JCHO北海道病院 (北 海 道 社 保)	426	7	35	451	5	26	381	7	25	399	3	14	450	3	11	385	2	3	424	—	8	408	0	13
天 使 病 院	398	4	21	404	2	17	363	—	24	407	1	20	412	0	14	407	0	12	489	0	13	465	0	22
溪和会江別病院	236	54	140	215	57	169	243	53	181	210	61	180	213	83	219	253	50	127	261	49	262	308	12	210
札幌北極病院	556	7	660	570	10	639	471	14	744	563	14	741	548	30	768	479	20	720	345	6	840	436	143	913
恵み野病院	318	6	42	304	11	35	350	5	50	339	0	28	343	0	14	329	1	20	314	2	27	348	0	25
苫小牧日翔病院	214	25	88	215	8	95	217	7	100	198	29	83	193	11	99	213	4	102	200	6	115	142	3	79
市立美唄病院	38	33	116	41	46	128	41	32	102	41	35	124	25	16	124	1	4	120	3	4	33	1	2	29
市立三笠病院	80	22	101	71	25	115	63	26	118	50	27	126	53	24	68	50	16	98	56	15	124	35	18	57
斜里町国保病院	13	20	11	17	13	24	0	0	0	12	7	5	22	18	21	16	10	23	21	15	32	15	11	31
中標津町立病院	144	5	18	153	9	22	165	19	14	165	21	11	168	19	11	218	3	4	193	1	3	146	3	1
十勝いけだ医療センター	1	4	2	0	2	2	0	4	1	0	0	0	0	0	0	*	*	*	*	*	*	*	*	*
厚岸町立病院	23	28	21	14	35	24	5	9	12	0	10	8	0	7	7	*	*	*	*	*	*	*	*	*
長万部町立病院	0	0	20	—	—	29	—	—	22	0	0	27	0	0	12	0	0	0	*	*	*	*	*	*
せたな町立国保病院	0	0	60	—	—	60	—	—	60	0	0	65	0	0	65	*	*	*	*	*	*	*	*	*
森町国保病院	0	0	200	0	0	200	0	0	100	0	0	100	0	0	100	0	0	0	0	0	200	—	—	—
西さっぽろ病院 (旧 河 西 外 科)	60	109	61	62	111	79	74	103	94	72	64	175	124	65	166	166	56	142	169	40	131	154	59	117
静和記念病院	191	0	37	159	0	37	164	0	29	148	0	24	150	0	21	144	2	14	121	0	15	213	1	22
洞爺協会病院	75	2	100	52	—	100	57	5	100	46	7	70	62	2	70	69	9	100	61	—	100	68	10	86
網走中央病院	0	0	0	12	19	—	12	23	—	24	21	不明	29	13	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—
北 札 幌 病 院	0	6	21	2	2	16	0	8	20	0	6	31	0	9	23	0	3	28	0	1	26	—	—	23
北クリニック																—	—	—	—	—	—	0	0	10
北海道対がん協会																0	0	0	—	—	—	—	—	—
すずかけセントラル																—	—	—	74	2	40	104	4	43
はまなす医院																2	1	20	4	—	22	40	1	27
静仁会静内病院																83	6	66	—	—	—	3	2	7
新札幌聖隷ホスピタル																						0	0	93
総 計	12,297	1,389	3,595	11,885	1,231	3,614	12,077	992	3,396	12,149	942	3,505	11,969	788	3,432	12,060	496	2,625	11,997	389	3,088	12,280	504	2,865

旭川厚生病院



旭川厚生病院外科です。今年は引き続き北大一外から6名、旭川医大二外から2名、他2名で構成されています。(蔵谷医師と加藤医師は呼吸器外科兼任)。外科病棟は59床ですが今年は例年以上に稼働率が高く、他病棟のベッドを借りることもしばしばです。

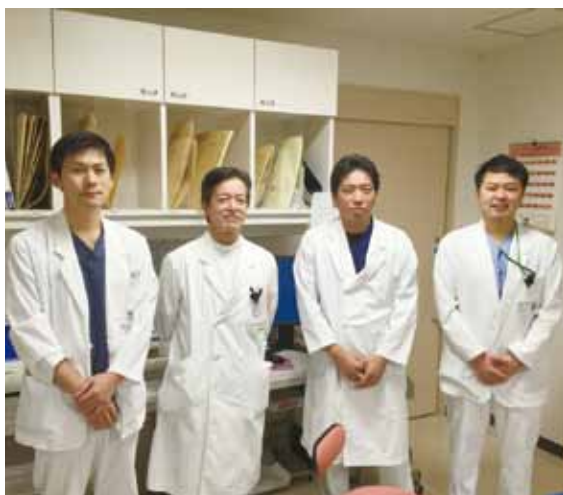
診療圏は広く、旭川周辺の市町村のみならず遠くは稚内市や紋別市、遠軽町などからも患者が訪れます。

主な診療対象は消化器外科全般で、上下部消化管、肝胆膵、ヘルニア、乳腺、と多岐にわたります。食道がん、膵・胆道がん、肝がんなど高難度手術も少なくなく、特に膵・胆道がんに対するPD/DP/TPなどは年間30例以上あります。また、マスメディアでの紹介の増加、患者意識の高まりなどもあって乳癌症例の増加も最近の傾向です。

昨年の年間手術症例数は750例余で本年も昨年と同等かやや上回るペースで手術を行っています。他科、他院からの緊急/臨時の依頼も少なくなく緊急手術症例は100例近くになります。当科がLACやLADGなど腹腔鏡手術に本格的に取り組んだのは平成19年頃からで現在では胃がん、大腸がん手術のそれぞれ40%、50%が腹腔鏡手術です。従来からのLCに加えてラパアッペ、ラパヘルも手がけています。技術認定医が柳田、船越の2名になりましたので、さらに認定医を出せるように指導しております。

(文責：柳田 尚之)

網走厚生病院



網走厚生病院はスタッフ4名(西川眞副院長、高橋徹、長津明久、谷道夫)で斜網地区の拠点病院として地域に貢献しております。当院の病床数は309床で、外科病床数は35床です。年間手術件数ですが、2007年度をピークにやや減少傾向ですが、2014年は318件で、今年も同様の傾向です。

年々鏡視下手術が増えてきている昨今ですが、当院でも積極的に取り入れており、2015年は腹部疾患での腹腔鏡手術の比率が70%以上に到達しました。また、大学の先生方からも手術応援を頂きながら日々外科修練に勤しんでおります。さらには、若手教育に積極的で今年度は谷先生に半分以上執刀してもらっています。内科との連携も良好で積極的に手術適応についてコンサルトを頂いており、良い信頼関係を築いております。

斜網地区では、医療の過疎化が徐々に進んでおり、当院も含め近隣都市の病院の医師確保が難しくなっております。加えて開業医の先生方の高齢化も重なり、月の6割以上はこの地区の救急を当院が一手に引き受けている状況です。

一方で病院内には釣部、軽音楽に加え、ゴルフ、テニス、野球、マラソン部があり様々なスポーツ活動等を通じてcomedicalの方々と交流が図られています。

(文責：高橋 徹)

網走中央病院



当院は昭和35年に先代有里伸一(北大29期)が網走中央病院として開業し、私有有里仁志(昭和58年卒)が網走に戻ったのを機に平成9年医療法人社団網走中央病院と致しました。開院当初から夜間救急の輪番当番を担う急性期病院として診療してきましたが、地域医療のニーズに応え平成24年に入院を療養病床(86床)に転換しました。

網走市の医療は厚生病院が基幹病院となり、当院は急性期治療後の在宅復帰や施設入所への橋渡的存在となっております。以前は医局からの出張医師と全身麻酔手術施行していましたが、現在手術は行っておりません。

外来は従来通り外科(有里)と内科(2名)体制で診療しており、互いに連携の元で総合的に診断する様に心掛けて、通院患者の急性期疾患には別個に入院対応出来る様にしております。

現医局員の先生方には魅力のある病院ではありませんが、将来「総合診療医」として地方医療に貢献されたいとお考えになった際は是非ご連絡頂きたいと思っております。

(文責：有里 仁志)

岩見沢市立総合病院



2015年度の岩見沢市立総合病院外科は中島保明院長・伊藤浩二副院長・上泉洋・市川伸樹・辻健志・鈴木嵩史・柏倉さゆりの総勢7名でスタートしました。10月から柏倉が産休に入り、11月から石川倫啓が札幌厚生病院から当院に転属参加してくれました。写真は柏倉が当院で出産後の記念撮影です。今年度の最も嬉しく素晴らしいことは、カッシーが仕事しながらの子育てを外科医師でも出来ることを内外に示してくれたことです。

中島院長は主に対外的な仕事をされており、伊藤副院長は療養しながら透析のサポートをしています。外科は実質5名で活動しています。周辺の病院がほとんど手術をしなくなり、手術件数は急上昇中です。市川指導の下、内視鏡下外科手術も定着してきました。胸部や開腹手術は上泉も若手医師を指導しています。10年未満の医師達は生き生きと多種多様な手術をこなしています。

当院では42床の外科病棟だけでなく40床の透析病棟、220人が治療を受ける透析センターも外科の管理下にあります。透析に2名の専属医師（稲垣尚人・田中徳彦）もいますが、緊急血液浄化・内シャント手術・PTAなどを中心に合同で治療にあたっています。MOFの治療は集中して当院に来ます。

南空知地区4市5町の総面積は2,563km²で東京都全体を上回り、総人口175,000人で、当院は中核病院として唯一、気を吐いています。札幌へも新千歳空港へも1時間ほどで行くことが出来る便利な地域です。岩見沢市立はいつも忙しい外科ですが、さらにアクティブな外科を目指しています。

（文責：上泉 洋）

小樽市立病院



石橋竜太郎（研修医） 太田拓児（医長） 渡辺義人（医療部長）
越前谷勇人（主任医療部長） 川俣 孝（嘱託医） 権藤 寛（副院長）

2014年12月1日、小樽市立病院は地上7階地下1階、21診療科を備えた総病床数388床（一般302床、精神80床、結核4床、感染2床）の新病院に生まれ変わりました。腎・透析専門医（内科）が1名増員となり腎不全患者に対してもより緻密な医療が提供できるようになりました。小樽市は2つに分かれていた自治体病院が統合され、小樽後志医療圏によりよく本当の意味での総合病院が出来上がりました。紆余曲折18年、特に新築統合が本格的になってからの数年間は、小樽病院バッシングはすさまじく連日マスコミを騒がせていたことは記憶に新しいことと思います。しかし開院後1年を経て、市民の皆様から「やっぱり小樽病院でなきゃダメ」という声その答えになっていると確信しています。と同時にそんな市民の皆様の期待を裏切らないよう、スタッフ一同身を引き締めて毎日を送っています。

2015年外科の総手術件数は600件を超える勢いです。統合前に比べ約20%増、新築後1年を経た現在もover bed状態が続いています。外科スタッフは正職員4名、嘱託医1名で手術、外来・病棟・出張検診業務、小樽市夜間急病センター出向、化学・放射線療法までをカバーしています。そのほか7名の研修医の教育と指導を行っています。また本年度からは北海道がんセンターの近藤先生のご協力を賜り、本格的な呼吸器外科の胸腔鏡手術も開始しました。市内開業医を中心にID-linkを用いたon-line診断が一部で開始され、これからさらに拡充の予定があります。患者さんの「ありがとう」という一言が一日の疲れを癒してくれています。

（文責：越前谷勇人）

帯広協会病院



フードバレー十勝の医療を担う帯広協会病院外科はスタッフ6名、地域医療への貢献のため日々邁進しております。本年度は阿部院長就任、部長にあの橋本卓が3年55億で電撃移籍（推定）、許・永生は昨年引き続き地盤を固め、ほか末端構成員2名（松井、志智）で診療にあたっております。2014年の手術件数は500件を超え、2015年もそれを追いかけるように手術件数を伸ばしております。また臨時手術のみならず多くの執刀機会が末端構成員にも与えられる恵まれた教育方針です。学術活動も積極的に行っており、学会参加や論文投稿も取り組んでいます。さらに当科医師を中心に院内NSTとして活動しており、本年度から橋本をチェアマンとして週1で回診を行い、入院患者の栄養状態と各病棟の看護師さんをチェックしております。忙しい毎日ですが、夏には花火大会や盆踊り、秋にはフードバレーマラソンといった地域のイベントにも参加しています。本年度は外科の月間収益過去最高記録達成、M井の巨大鼠径ヘルニア修復術成功など心温まるニュースもたくさんありました。次年度の目標としては北海道がん診療連携拠点病院指定登録、鈴木研修医入局、松井結婚を3本柱として、外科一同、粉砕の努力を重ねていく所存です。写真上段左から許、橋本、永生、志智／下段左から松井、阿部、鈴木（入局予定）。（文責：志智 俊介）

北札幌病院



医療法人社団北札幌病院は1963年（昭和38年）に開業し、一般病床35床、療養病床60床で、外科スタッフは院長の小川秀彰（昭和63年卒）1人です。現在、医局から外来診療や当直の多大なる応援を頂いており、心より感謝申し上げます。年間手術件数は30例前後で、2008年までは医局からの応援医師と全身麻酔の手術も年間数例施行していましたが、最近では虫垂炎や鼠径ヘルニアも鏡視下手術が標準術式となり、局所麻酔の小手術（CVポート留置、胃瘻造設など）のみになりました。当院の特色としては、JR学園都市線新琴似駅と地下鉄南北線麻生駅のいずれからも徒歩数分と公共交通アクセスが良好です。また、医局の関連病院で北大病院より北に位置する病院は少ないため、札幌市北部や石狩市の患者さんの受け入れに適しています。関連病院としての北札幌病院の役割は、北大病院で手術後の療養継続、入院・外来での癌化学療法、入院して北大病院通院放射線療法（送迎あり）、癌終末期緩和ケアなどと考えています。今年はようやく16列のCTが導入され、診断能も向上しています。今後も医局との連携を維持しながら、地域医療に貢献していきたいと考えておりますので、宜しくお願い申し上げます。（文責：小川 秀彰）

独立行政法人労働者健康福祉機構釧路労災病院外科



8階西（外科）病棟 NSにて

後列左から 江本 宮岡 羽田（研修医1年） 吉田 柴田
前列左から 小林 小笠原 河合

豊かな自然と旨い山海の幸に恵まれた道東ですが、その医療圏は広大かつ寒冷で過疎と高齢化を加えて4Kと言われています。この地域の医療を釧路市が支えており、当院も二次救急を含む地域医療の中核病院の役割を担っています。がん診療連携拠点病院・地域医療支援病院・臨床研修指定病院として地域住民の安心をサポートするとともに職業性疾患の臨床と研究にも接する機会があります。

当科は、消化器・乳腺・緩和ケアを三本の柱として診療しています。小笠原副院長以下7名のスタッフで、入院・外来・手術を含む診療を行っています。2015年の手術実績（予定を含む）は591件（全身麻酔547件）で、主な疾患は食道癌4例、胃癌46例、大腸癌102例、肝胆膵癌10例、乳癌60例、肺癌6例、虫垂炎40例、胆石症73例でした。麻酔科常勤医の削減により定期全身麻酔枠が週に2件ずつ削減されている中、地域からの信頼に応えるべく手術実績の落ち込みを最小限にとどめています。今年度から形成外科との協働により乳房再建にも着手しました。当科の特徴としては、緩和ケア病床も担当しているため、予防・診断・治療からEnd of Life Careまで診療できる総合的な臨床外科医の育成を心掛けています。がん治療認定医の資格取得に緩和ケア研修会の受講が必須となったことから、医療の基礎としての緩和ケアには十分なトレーニングが必要です。当科には各学会専門医のほか産業医などの資格取得のための環境も整っています。多くの手術を経験したい若い力を求めます。（文責：小笠原和宏）

KKR札幌医療センター



当科のスタッフは赤坂嘉宣院長を筆頭に小池診療部長、田村腫瘍外科部長、武田外科部長兼消化器外科部長、今、桑原呼吸器外科部長、小柳医師、坂本医師、後期研修医の大槻医師の総勢9名です。

病床数は病院全体では450床でそのうち外科（消化器一般外科、乳腺外科、呼吸器外科）は55床ほどです。

2014年の手術件数は732件で主な内訳は大腸138件、胃49件、乳腺91件、肺103件、ヘルニア75件、胆石88例、虫垂切除80件などでした。肺切除は桑原部長を中心に殆どの症例をVATSで行っています。胃切除もほぼ半数、大腸切除も8割から9割、成人の鼠径ヘルニア、腹壁癒痕ヘルニア、女児の鼠径ヘルニア、虫垂切除も9割は鏡視下で行っており、特に胃、大腸に関しては大学から指導医の先生に来ていただき、各自が内視鏡外科学会技術認定取得を目指してレベルアップに励んでいます。乳癌の手術は田村部長を中心に行っており乳房温存率は約60%で最近乳房再建にも力を入れています。

また、当科の特徴としては血液浄化センターの管理も行っていることです。現在、コンソールは24台あり、外来維持透析患者58名のほか、他の疾患に対する加療目的に当院に入院している維持透析患者の管理のほか、バスキュラーアクセス作成、シャントPTA、腹膜透析用カテーテル留置術なども手がけております。当院は日本透析医学会教育関連施設に認定されており、当院での経験症例は透析専門医取得のための実績となりますので外科（消化器、乳腺、呼吸器）の研修はもちろんのこと、透析の研修も希望される若手外科医をお待ちしております。

（文責：今 裕史）

溪和会江別病院



溪和会江別病院は1988年に故品田佳秀先生が開院され、今年で27年目となります。外科スタッフは理事長の南田猛先生、今年院長に就任された大森一吉先生、部長の野村克先生、佐々木彩実、4月赴任した小野仁先生の5名です。江別市と近隣町村の急性期医療を担う病院の一つとして地域に貢献すべく、日夜診療に励んでおります。

外科の病床数は52で、2015年の全身麻酔手術件数は280例です。大腸癌が43例、胃癌26例、胆膵悪性疾患9例、肝癌6例、食道癌4例、乳癌7例、腎癌2例、肺癌2例の他、GISTや褐色細胞腫も1例ずつ経験し、胆石胆嚢炎や急性虫垂炎、腸閉塞、鼠径ヘルニアなど非悪性疾患の手術も多く、透析も行っていることから内シャント造設術や血管拡張術もあるなど、症例が豊富であることが特徴です。鏡視下手術もやや遅ればせながら症例数が増えており今後は機器の拡充等によりさらに積極的に取り組む予定です。また新棟の増設により外来化学療法室が充実し、術前術後治療を含め総合的な診療に携わることができます。

救急医療も行っており、災害救急当番日の土日の当直では大学の諸先生方にご大変お世話になっております。臨床外科医として総合的な能力を鍛えるのにとても良い病院です。今後とも皆様の御支援を宜しくお願い致します。

（文責：佐々木彩実）

札幌北クリニック



札幌北クリニックは、北区で透析専門クリニックとして開院以来40年以上診療しています。現在の透析ベッド数は45床で、130名ほどの外来透析患者さんを診療しております。常勤医師は院長、増子佳弘、顧問、大平整爾の2名ですが、地理的に北大に近いこともあり、第一外科の諸先生や他科の応援医師の方々に支えられております。

スタッフはNs、CEの他、事務などのスタッフが約30名おります。

2015年はシャントの局所麻酔手術を17件、主にエコーを使ったインターベンション治療を40件ほど行ないました。また、スタッフの管理体制を大幅に変更し今後の透析医療に対応すべく各部門の変革を進めているところです。

今後も第一外科の諸先生の応援をよろしくお願いいたします。

(文責：増子 佳弘)

札幌厚生病院外科



2015年度は、教室からは高橋昌宏、高橋弘昌、石津、秦、高橋周作、田原、柿坂、野口、石川（10月まで）、及川（11月から）と、田中（東京医大S63年卒）、山上（旭川医大H5年卒）、久慈（自治医大H11年卒）、松本（旭川医大H18年卒）、蓮実（杏林大H24年卒）の15名で診療しました。石川は11月から岩見沢市立病院へ異動となり、11月から河北総合病院から及川（慈恵医大H15年卒）が加わりました。及川は11月から北大第一外科に所属しております。また、嘱託医として安達先生に乳癌検診を担当していただきました。

特徴としては、甲状腺は高橋弘昌、乳腺は秦・田中、呼吸器は田中・蓮実、胃は高橋周作・松本、大腸は山上・野口、肝胆膵は石津・田原・柿坂と臓器別に中心となる医師を決め、専門性を高めて診療をしております。呼吸器、胃、大腸に関しては鏡視下手術を多く行っているのも特徴です。肝胆膵や消化管の症例が多いので、若い医師には執刀経験をつませ消化器外科専門医、内視鏡外科技術認定医、日本肝胆膵外科学会高度技術技能医の育成も行っていきたいと考えております。

教室から武富教授、川村先生、開成病院から高田先生、はまなす医院から工藤先生に手術応援をしていただき、2014年の年間手術症例は1087件でした。この場を借りてお礼させていただきます。(文責：野口 慶太)

札幌北楡病院



当院は一般・消化器外科の推進、移植医療の展開、人工臓器開発と臨床応用、高度先進医療技術の開発と実践を旗印に急性期医療施設として昭和60年に開院されました。平成27年7月から新たに南棟が新築され、総病床数は281床に増えました。外科を含め15の診療科があります。外科のスタッフは川村明夫、米川元樹、目黒順一、久木田和丘、小野寺一彦、堀江卓、飯田潤一、服部優宏、土橋誠一郎、佐藤正法、巖瀬慶一の11名です。透析・血管外科チームと一般・消化器外科チームに分かれて診療に当たっていますがお互いに協力し合っています。消化器外科は内視鏡外科を重点的に行っており、Reduced Port Surgery、ロボット支援下手術も積極的に行っています。また、透析関連では内シャント造設、血管グラフト留置、Blood Accessトラブルに幅広く対応し道内の多くの透析施設からの信頼を得ております。

当院の外科の人数が多いのではないかとと思われる方もいると思いますが、毎年、外科の手術件数は1200例前後で消化器系の全麻手術は300例程度です。局所麻酔とはいえ血管系の手術がほとんどを占める約900例という数字は、実際はかなり過酷な数字です。スタッフも皆、確実に年齢を重ねており、厳しい戦いが続いている状況です。しかし、それでも地域の皆さんから信頼されて手術を依頼されることは幸せであると考え、日々奮闘しております。今後ともよろしくお願いいたします。(文責：服部 優宏)

士別市立病院



当院は平成元年卒の山賀と三國の常勤医2名体制です。嘱託医として元副院長の澤谷先生に週1回の外来と手術の手伝いをお願いしています。総病床数150床のうち外科は30床で20-30の入院患者がいます。透析センターも外科が担当しており58名の透析患者がいます。

2014年の手術件数は238件、そのうち全身麻酔は127件と、前年より少し増加しましたが、2015年は外来患者、入院患者の減少に伴い6割程度に減少しそうです。

現在上川北部では、道の方針に沿って、各市町村の医療の機能分担を協議しているところですが、当院は名寄市立病院をセンター病院として、士別は急性期を縮小、回復期と療養病床を増やす方向に舵を切っています。外科も緊急手術、大きな手術は名寄や旭川の病院にお願いし、透析医療、小手術、高齢者の総合診療、回復期リハビリ患者の管理、他科を含めた末期がんの緩和医療が今後の主な診療内容になると考えています。

(文責：山賀 昭二)

斜里町国民健康保険病院



平成13年3月に当地に派遣されました。平成26年1月より、外科常勤医が私、1名となりました。毎日外来、病棟とやりながら、手術もと思いました。1年目：一時期、たまたま、消化器外科を経験した内科医がいたり、内科に月2日非常勤で来ていた心臓外科医もいて彼らと全身麻酔の手術をしました。また、たまたま女満別の病院に、診察に来ていた前の大学の先輩に頼んで、空いた1週の金曜日を全身麻酔の手術日に当てました。途中、道の地域医療課より1週間の外科医の派遣あり。また、腰椎麻酔の手術は常勤の内科医にもお願いし手術をしました。平成27年4月、道からの派遣も同じく継続、心臓外科医も第1、4週の金曜日に来院。6月からは先輩が、第1、4週火曜日に来院できることとなり、火曜の外来を予約患者15名で制限し全身麻酔の手術日、金曜日は予約患者35名に制限し、腰椎麻酔などの小手術日としました。急患は別です。私が、麻酔をかけ、手術、覚醒、術後の管理をしました。手術機械も徐々に揃え、まず、どうしても欲しかったソノサージを買い、電気メスがだめになり、どうせなら電気メス付サンダービートを買った方が得と思い購入。15年以上使っている麻酔器の蛇腹が破損、交換部品がなくドレガーの麻酔器を購入。術野の見えないドレガーの无影灯もリースで購入。今、古いものは26年前の油圧式の手術台だけです。腹腔鏡下手術のトレーニングモデルも購入(ポケットマネー)。結紮は難しいです。今年9月からは彼の家庭の事情で救急医療、麻酔科、消化器外科も経験のある医者が、月3週勤務、10月より全身麻酔の手術症例10例増加しました。現在は彼が病棟管理をしているため、ストレスがかなり取れました。家庭の事情でわたしは3月で退職しますが、彼も私がいる3月まではいてくれるそうです。斜里はいいところです。誰か、外科医が来てくれればいいと思っています。15年間、楽しく過ごせました。派遣してもらった医局に感謝。ありがとうございました。写真は、向かって左側が現在、助っ人にきてもらっている古賀正和先生です。右が私です。医局での写真です。

(文責：院長 石村 美樹)

市立札幌病院 外科



外科スタッフ8名（三澤理事、大川、大島、奥田、皆川、葛西、寺崎、上坂）と後期研修医2名で診療を行っております。病院全体の病床数747床のうち、一般消化器外科として46床・乳腺外科として6床の計52床を任されております。

4月に寺崎先生が赴任したことにより皆川・葛西・寺崎の年子トリオが完成し、診療の面でも中心となっている感じです。

ここ数年の手術件数は、全麻600-640件（緊急手術は150件前後）、腰麻20-50件でしたが、2015年は後半に臨時手術が多くなり全麻700件に迫る勢いです。最近の傾向としては、大川副部長が中心となって診療している乳癌手術が増加しており、とくに形成外科と合同で行う一期的再建術が積極的に行われております。また、4月から当院救急部専属の外科医が減った影響で、同診療部から依頼の手術が増えています。

主な手術の件数は、鼠径または大腿ヘルニア：成人50例前後（昨年度からTAPPを導入して半数がTAPPです）、小児20-30例、ヘルニアを除く小児手術：10-20例、乳腺疾患：100例（上述したとおり増えています）、胃癌：50例前後（腹腔鏡下は1/3）、大腸癌：100例前後（腹腔鏡下は6割程度）、胆摘70例前後、肝切除30-40例（原発1/3程度）、PD10例前後、DP 5例前後です。また、他科からのCVポート留置の依頼を若手が一手に引き受けており、年間200近い件数となっています。

今年11月に大きな病棟再編があり、当院にも遂に術後ハイケアユニットが開設されました。今後ますます充実した周術期管理が可能になると期待しております。

（文責：大島 隆宏）

市立千歳市民病院



当院は総病床数190床の千歳市唯一の急性期総合病院です。外科病床数は15床で昭和42年の開院以来第一外科の諸先輩方が勤務されており、本年度は川向裕司、福島剛、安念和哉、谷安弘の4名で診療にあたっております。

年間手術数は平均250件（全麻220～230件）で推移いたしておりますが、一昨年から教室の先生方のご指導、ご助力をいただくようになり、徐々に鏡視下手術の症例数が増加し、本年度は100例を超える症例数となりそうです。

千歳市を含む南空知地区の救急医療の中心施設として365日24時間体制で交通外傷や腹部救急患者の対応にもあたっており、昨年は216件の救急患者の受け入れを行いました。

小規模な病院ですので各診療科、各部門との風通しは良好で、緩和ケア、皮膚排泄ケア、癌化学療法看護に加え、本年度からは新たに摂食嚥下認定看護師、感染の認定看護師も加わり、いずれの分野においても外科が中心的役割を果たしながら、病院理念である「より質の高い心あたたまる医療の実現」を目指しております。

（文責：福島 剛）

市立苫小牧病院



苫小牧市は札幌市から車で約1時間と道央圏には属しますが、夏は朝・夕に霧の出る日が多く、気温も30℃を超えることは滅多にありません。しかし、冬は比較的気候が良く、雪が積もることはあまりない地域です。人口は約17万人で、周辺人口を含めると約20万人の医療圏です。北は安平町（早来）～むかわ町（穂別）、東は新ひだか町（静内）、西は白老町辺りまでをカバーしています。苫小牧市立病院は2006年10月に新築移転し、今年で10年目を迎えました。総病床数は382床（外科24床）で、診療科は18科です。2015年度の診療スタッフは松岡院長、佐治副院長以下、広瀬、花本、蔵谷、金沢の計6名です。初期研修医は病院全体で計12名、その中、1名が交代で当科ローテーションしています。2012～2013年度には麻酔科常勤医が不在という影響もあって、2012年～2014年の手術件数は年間約400件と低迷していましたが、2015年は11月末時点で430件とようやく回復の兆しがあるようです。主な内訳は胃癌23例（腹腔鏡下8例）、大腸癌62例（腹腔鏡下43例）、乳癌31例、肺癌14例（胸腔鏡下14例）、肝切除術11例（肝癌8例、肝門部胆管癌2例、胆嚢癌1例）、PD9例、胆嚢摘出術80例（腹腔鏡下70例）、虫垂切除術32例（腹腔鏡下30例）、鼠径ヘルニア56例（腹腔鏡下28例）などです。

（文責：広瀬 邦弘）

市立函館病院



（向かって左から）

前列：砂原、木村、植木

後列：田中（初期研修医2年目、平成28年4月入局予定）、阪田（初期研修医2年目、平成28年4月入局予定）、大野、坂本

市立函館病院は、万延元年（1860年）「箱館医学所」として創立した北海道初の官立病院で、26診療科、668床からなります。道南全域と下北半島北部を診療圏とする地域の基幹病院で、診療対象人口は約50万人です。地域がん診療連携拠点病院、災害拠点病院、臓器提供施設などの指定を受け、平成27年からドクターヘリの運用が開始されました。

医師数は126人（うち初期研修医27人）、消化器外科・乳腺外科は10名で、うち5名が北海道大学第1外科、5名が弘前大学第2外科からの派遣です（平成27年度から北大が5名に増員されました）。北大が肝胆膵、弘大が消化管を担当し、若手はローテートします。手術数は年間800件前後で、3次の救命救急センターを併設しているため、緊急・重症症例が多い傾向にあります。

当院では、臨床研究を医療者の必須の業務と考え、病院が積極的に支援する体制が整っています。現在、「胃癌に対するセンチネルリンパ節生検の臨床導入」などに取り組んでいます。2015年は、国際学会発表3題、日本外科学会、JDDWなどの全国学会・研究会発表は24題でした。

「多くの症例を経験したい」、「臨床研究にも取り組みたい」、さらに「専門医などの資格を短期間で取得したい」という方には当院がおすすめです。

（2015年12月14日）

（文責：砂原 正男）

市立三笠総合病院



市立三笠総合病院は、高齢化が進む三笠市の基幹病院として、急性期から慢性期に至る総合的な医療を提供し続けています。高齢化だけでなく、一人暮らしの患者さんも多い状況のなか、外科は石黒敏史、羽田力、内藤昌明の3名で、消化器癌を初めとする手術、術後化学療法のみならず褥瘡管理、熱傷や外傷の治療、さらに療養やリハビリテーションにおよぶ、個々の患者さんの都合にも合わせた多くの業務に携わっています。2015年の手術件数は全麻37例、腰麻13例で、大学の先生方のご協力により胃癌や大腸癌の鏡視下手術も始めています。今後も最新の医療に追随するだけでなく、地域住民の要望に対し、柔軟性を持って応えられる医療を目指したいと考えています。

（文責：内藤 昌明）

市立稚内病院



市立稚内病院は、宗谷管内唯一の総合病院で、離島を含めた同地域の医療をすべてカバーしております。診療は、菊地弘展（18年目）、三野和宏（15年目）、沢田堯史（6年目）、坂本沙織（4年目）の4人でっております。

総病床数362床のうち外科は28床で、年間手術件数は250件前後とそれ程多くはありませんが、臨時手術施行率は本年4月から11月現在までで44%に達しておりました。腹腔鏡手術施行率は、同期間内で胃75%（3/4）、大腸53%（8/15）、ヘルニア48%（11/23）、虫垂73%（11/15）（カッコ内は症例数）でした。

腹部外科以外にも血液透析患者の診療を兼任しており、約100名の患者に対しシャントトラブル等の対応を行っております。

地域から不明死体への対応も多く、年間80件前後の検案業務を行っております。また、常勤の循環器内科医不在のため、循環器疾患が発生した場合には各科で協力して搬送業務を行っております。ヘリは天候不良で飛ばないことが多く、陸路で搬送することが多くなっております（名寄まで片道2～3時間）。

以上のように多種多様な業務を行っておりますが、他科医師との連携が非常に良好なため、手術に支障を来すことなく業務を行っております。

（文責：三野 和宏）

新札幌聖陵ホスピタル



「新札幌聖陵ホスピタル」は、医療法人翔嶺館（理事長は佐竹博史先生）の4病院の1つであり、医師は6名、非常勤医師が6名いる。平成27年に従来の障害者一般病床41床に休止していた一般病床19床を再開して、計60病床を有している。MR、CT、エコーやABIなどの短時間の正確な診断を可能とし、地域の一般医療を幅広く担うほかに消化器病、肝臓、脳神経、などの学会専門医を配した疾患別外来や脳、肝胆脾、消化管ドックや一般企業検診を行い、数施設の訪問診療も皆で手分けして実施している。年間局麻件数約120件、高気圧酸素室、透析室を有し、疾患別・訪問リハビリテーションも今年度に開始した。また市内の施設ではごく限られているジェネティック薬剤の治験も数多く行われている。

グループ内の病院は札幌優翔館病院、十勝の杜病院（幕別）、音更宏明館病院（音更）などと他に3施設がある。そのほかにヘルスケアサービス関連の施設を10施設有している。

同門では十勝の杜病院には片山富美夫先生、当院には松久忠史先生がおり、近隣の北辰・溪和会江別・北楡の各病院にはご厚誼をいただいている。また、関連施設は休日当番などで教室にはお世話になっている。

（文責：佐藤 直樹）

JCHO札幌北辰病院



JCHO札幌北辰病院は地下鉄東西線新さっぽろ駅に隣接しており、厚別区の拠点病院の一つとなっています。また清田区からの患者様も数多く受診され、札幌市以外では北広島、恵庭、長沼からも多くの方が受診されています。2015年のスタッフは、佐々木院長、中川副院長、高橋、横山、旭、脇坂の6名であります。病院全体の病床数は231床あり、そのうち外科は30床となっています。2015年の手術件数は12月中旬までで403件であり、内訳は胃癌12例、大腸癌58例、肝癌16例、膵癌4例、胆道癌4例、乳癌29例、胆石症48例、虫垂炎32例、小腸切除15例、単径ヘルニア80例、その他107例で全体的に昨年より増加しております。また、当院では腹腔鏡手術に力を入れており、腹腔鏡手術の割合は胃癌36%、大腸癌57%、肝癌38%、胆石症83%、虫垂炎88%、小腸切除33%、単径ヘルニア30%となっています。今後も地域医療拠点病院としての役割を果たすべく、質の高い医療ができるよう取り組んでいきたいと思っております。

（文責：高橋 学）

JCHO北海道病院



地域医療機能推進機構（JCHO）北海道病院となり2年目です。昨年、日常臨床にはさほど影響はないと書きましたが、コメディカル（特にNs）が減って病棟や手術室に多少支障がでました。最近ようやく回復傾向で落ち着きを取り戻しています。外科は25床で、2014年度は数井啓蔵部長のもと、中西一彰、正村裕紀、杉山昂、千田圭悟の5名で約400例の手術を行っています。手術は例年どおり、ヘルニア、乳腺・甲状腺などの体表外科から下部食道から直腸までの消化管、肝胆脾、肺とそれぞれの領域で良悪性ともにあり、バランスが取れた内容でした。当科の特徴は若手にどんどん手術を執刀・経験してもらうことで、今年度も12月現在でそれぞれ80例（杉山Dr）、100例（千田Dr）となりました。内容も当初は皮切もぎこちなかった千田先生が、ヘルニア、アツペ、胆摘のほか幽門側胃切除や右半結腸切除（それぞれ開腹、ラパロともに経験）などを経験してもらいました。杉山先生は胃全摘、PD、肝左葉切除などややアドバンスの症例を執刀してもらいました。内視鏡手術は本年度も教室から毎週本間重紀先生に応援にきていただき、技術認定習得を目標に指導してもらっています。本年度は正村先生にぜひ取得してもらいたかったのですが、症例に恵まれずビデオ提出ができませんでした。今後も引き続き、当科の内視鏡手術の定着、レベルアップのためにお願いしたいとおもいます。当科の特徴として肺切除（VATs葉切除）がそれぞれ毎年30～40例あることです。数井先生が主体となっていました。念願の呼吸器外科専門医を取得した正村先生が積極的に執刀し、今後は呼吸器外科認定施設をめざそうと考えています。肝胆脾手術（いわゆる高度技能手術）は、症例も院内・院外から安定して紹介されております。

外科医は手術ができることが基本だと思います。しかしそれ以外の技術・知識（栄養・感染・緩和など）もしっかり勉強して、外科医・医者として大切な人間性・倫理観を持って病気ではなく、患者さん全体をみられるような医師を育てていきたいと思っています。

ちなみに写真の2人の女性は外科が関係する2つの病棟の師長さんたちです。一緒に働きたいな一と思われたらぜひ当院を希望してください。

（文責：中西 一彰）

すずかけセントラル病院



静岡県浜松市南区に位置するすずかけセントラル病院外科 今井です。鈴木 友己先生と自分で2013年4月から消化器外科として勤務し、3年目となりました。2013年度の手術件数は116件（全身麻酔74件、全身麻酔以外42件）、2014年度は157件（全身麻酔106件、全身麻酔以外51件）、2015年度は11月までで122件（全身麻酔73件、全身麻酔以外49件）の手術を施行しております。手術体制としては2015年4月からは麻酔科医が2人常勤となり、さらに5月からは現在手術室が2室なのが3室に増築され、毎日手術可能な状況になります。周囲の開業医からの紹介も徐々に増えてきており、少しずつですが手術件数を増やし、新しい人員の確保を合言葉に二人で頑張っております。鏡視下手術の症例をさらに増やしていきたいと考えており、3人必要な場合の内視鏡手術は大学から応援に来ていただいております。また昨年度で日本外科学会、日本消化器外科の関連施設の認定は取得しました。浜松は日照時間も日本で一番の長さで晴れた日が本当に多く、運動にも適しております。このおかげで個人的にはIRONMANレース（トライアスロン、スイム3.8キロ、バイク180キロ、ラン42キロ）を完走することができました。夏は暑いですが、冬はめったなことでは雪が降りません。タイヤも夏タイヤのままです。雪に飽きた先生にはとてもいいところだと思います。

（文責：今井 敦）

砂川市立病院



2010年に新病院へ移転、がん診療拠点病院、地域救命救急センターとして救急疾患に24時間対応しています。2015年度のスタッフは田口宏一副院長・横田良一・廣方玄太郎・加藤紘一・近藤享史の5名です。

旧炭鉱地域のため、急速な人口減少と少子超高齢化が進んでいますが、それ以上に周辺病院からの医療の集約化が進みつつあり、特に夜間休日の緊急手術の割合が増加しています。

消化器疾患（胃癌・大腸癌・食道癌・肝胆膵悪性疾患・胆石症・小腸）、乳癌・鼠径ヘルニア・肛門疾患など、2014年手術件数は473件です。腹腔鏡手術は腹部手術待機手術179件中150件（84%）、緊急手術でも150件中73件（49%）に行っています。

当院の特徴としてはほとんどの科がある、救急患者が多い・臨床研修医が多いことがあげられます。救急外来は24時間受け入れ態勢で、1・2年目の研修医が中心的役割を担っています。消化器内科専門医が少ないこともあり、腹部疾患は早い段階で、外科に診察依頼が来ることが多いです。

当科の特色としては、がん温熱療法・緩和治療・進行直腸癌への集学的治療・腹腔鏡手術の適応拡大と若手医師へのEarly exposureがあります。これらのことを明確にする必要性から、12月より厚生労働省への診療科届け出を、外科から消化器外科・乳腺外科・緩和ケア外科に変更いたしました。

（文責：横田 良一）

医療法人静仁会 静仁会静内病院



当院の外科は、井齋偉矢（院長、北大1975年卒）は現在関与しておらず、2015年4月から西原和郎（副院長、京都府立医大1981年卒）が赴任し、本格的に手術が再開されました。急性期病棟は60床で、概ね10床前後が外科症例です。手術件数は2015年4月1日から12月13日までで131件（全麻79件、局麻52件）ですが、胆嚢摘出術や腸切除などの腹部手術よりも、大腿骨頸部等の骨折手術やアキレス腱断裂手術などの整形外科領域の手術の方が多くなっています。軽種馬の産地であることから、風土病とも言える馬外傷（高エネルギー外傷）が年間80件以上も発生する地域であり、30%を超える高齢化率を示しており転倒による骨折も頻発する地域としては、整形外科の手術が普通にできることは、非常にありがたい状況です。もちろん、消化器外科手術症例も徐々に増えてきて、far advancedのみならずcurative operationのできる症例が多くなってきています。当院はまた、院長の井齋が提唱する、古典的思考法を一切排除した「サイエンス漢方処方」研修のメッカであり、全国から研修のために医師が集まっています。特に漢方研修では、救急と急性期疾患が対象になっています。救急・一般外科・整形外科を網羅した「総合外科」と「サイエンス漢方」が当院の売りです。写真は、西原和郎副院長。

（文責：井齋 偉矢）

医療法人社団 静和会静和記念病院 外科



1外科 in 静和記念病院

上段左より：川上理事長、川俣先生（オーストラリア、FBより）、湊先生、相山先生
下段左より：石川先生、壇上先生、草野先生

外科の平均年齢を大幅に下げた川俣先生はオーストラリア留学のためこの11月初旬に病院を離れた。

彼は何事にも積極的かつspeedyだ。十二指腸に浸潤している高齢者の大腸がん患者、術後の合併症もなく自宅に帰れるまでにrecoverさせた。明るく、陽気であり看護師さんやリハビリスタッフに人気があった。

その後は石川、湊、相山先生がやや変形的な1週間交代ではあるが、明るく、フットワークもよく、手術から認知症患者のケアまで幅広くサポートしてもらっている。1外科同門の川上理事長は往復4時間以上かかる同じ法人である昆布温泉病院に週2回通い、地域医療に貢献している。壇上先生のvitalityは衰えを見せるどころか、さらに拍車がかかり、365日、回診を欠かしたことはない。院長の草野は親子以上の年齢差がある若手外科医にサポートされ、手術、外来そして病棟回診、さらには医師会そして飲み会と少し過活動気味である。肝がんに対する切除、TAE、肝動注も症例を選んで実施している。

現在、病院の経営状態が芳しくなく、悩みも多いが、この10月には整形外科が再開し、外来患者、手術症例も増えてきており、経営も回復の兆しが見えてきた。教室のさらなる支援を切にお願いいたします。

（文責：草野 満夫）

町立中標津病院



消化器外科 I 関連病院の中で最東端にある病院ですが、病院から車で10分の所に中標津空港があり、札幌へは1日3便、東京にも1日1便の運航があるため都会へのアクセスは非常に良いです。当院は199床の病院であり、地域中核病院・災害拠点病院の役割を担っております。

外科は長洲院長（S51卒）、中川副院長（S61卒）、大畑医長（H18卒）、柴田医員（H24卒）の4名を中心に、平日は宇根先生（S46卒）にも診療応援をして頂きながら年間200件弱の手術を行っております。

当院の特徴として、最隣の大都市である釧路までは100km近く離れていることからあらゆる緊急・救急疾患に平休日問わず対応できるような体制を確立していることです。また、若手医師に数多くの手術を経験してもらうには最適の環境であり、柴田先生は卒後4年目ながら数多くの臨時・緊急手術もさることながら高位前方切除・胃全摘など難易度の高い手術も執刀しております。最近では大学の消化管Gの先生方の指導下で腹腔鏡手術も積極的に導入し、年間手術件数は少ないながらもクオリティの高い手術を提供しております。

やる気に満ち溢れた若手の先生方は是非お待ちしております。

（文責：大畑多嘉宣）

天使病院



スタッフ：山本浩史、中山雅人、大場豪の3名です。昨年まで6名体制でしたが、4月より3人となりました。また、来年度より当院で初期研修をした海老沼翔太が外科医として後期研修予定です。

病床数：260床（外科38床）

年間手術件数：2015年で成人約220、小児約290を数えています。

病院の特色および注力分野：病院の特色として周産期母子医療センターがあり、産科・小児科・NICU科が充実しています。小児外科では産科やNICU科・小児科と連携し母体搬送や新生児・小児のヘリ搬送なども全道各地から受け入れています。また、ヘルニアセンターを立ち上げたため、鼠径ヘルニア・臍ヘルニア症例が徐々に増えている状態です。外科医数が半分に、個々の仕事量は倍増しましたが、手術件数や患者数は昨年と同水準を維持できています。特に小児外科は本年すでに280件を数えており、2003年開設以来最大の手術件数になりました。

臨床研修にも力を入れており、今年度6名、来年度も6名とフルマッチで初期研修医を迎え入れる予定です。

（文責：大場 豪）

洞爺協会病院



当院は、社会福祉法人北海道社会事業協会が設置する7病院（函館、小樽、余市、岩内、帯広、富良野、洞爺）の一つとして、昭和5年に創立された歴史と伝統のある病院で公的病院に指定され、地域医療に貢献しており周辺住民の方々に大変親しまれております。

当地は洞爺湖、有珠山、昭和新山等有す道内屈指の観光地であり、国内はもとより海外からの観光客も多く、救急告示病院として24時間診療している救急外来にも多数受診し、国際色豊かな病院となっています。

診療科は、内科、外科、整形外科、リハビリ科、泌尿器科、小児科、麻酔科、歯科口腔外科で、北海道大学、札幌医科大学の関連施設（北海道地域大学循環型専門研修プログラム関連教育病院）となっています。

外科スタッフは2名で、科を問わず何でも診るようにしています。外科全麻件数は年間60から70例で腸切始め鏡視下手術を積極的に取り入れています。血液透析も外科で管理しており、シャント手術、PTAとも当院で完結しております。年々患者数が増加している周辺地域の期待に答えるべく、透析ベッドを拡充し現在25床で約90人前後の透析患者さんの治療をしています。

外科に限らず幅広く知識と技術を身につけたい伸び盛りのあなたには最適な病院だと思います。

（文責：青木 茂）

医療法人社団養生館苫小牧日翔病院 外科



消化器外科と透析を担当しています。

消化器外科は、平成19年卒水上先生が中心になって切り盛りしています。水上先生を肝移植チームの腰塚先生、川村先生、財津先生が交代で補佐し、さらに月曜日には崎浜先生、水曜日には後藤先生、若山先生らが手術の指導、援助に来てくれています。有難うございます。

昨年度、術後合併症で死亡する症例があり、現在手術例が減少しています。患者さんの信頼を再度得ることが出来るように、水上先生を軸に外科を盛りたてていきたいと考えています。

透析部門は、熊谷先生、櫛田が主に担当しています。苫小牧市内のセンター的な役割を担っておりシャント手術、PTA治療と毎日楽しく楽しんでいます。

外科がきちんと機能しなければ、透析も成り立たないと考えています。

(文責：櫛田 隆久)

西さっぽろ病院 外科



当院は1982年の開業以来三十有余年に渡り急性期医療に尽力した河西先生が本年3月末をもって理事長を退任し、名誉院長となりました。代わりに上井が理事長と院長を兼任しています。

今まで外科・内科・大腸肛門外科と透析治療をしていましたが、本年5月で透析治療を終了しました。7月よりリハビリを開始して、提携する整形外科病院からの術後患者さんのリハビリを始めました。

本年4月から一週間交代で第一外科から大学院生の応援を頂き、診療を続けましたが、6月から小丹枝先生を迎え、上井・山田とともに3人で外科診療を担当しています。

当院の特徴は地域に密着した医療を提供していることです。そのため大病院が断るような施設入所中の寝たきり高齢者等の消化器疾患を受け入れ、手術を行うことも多々あります。

手術は大小様々300件程度で、全身麻酔が150件程です。腹腔鏡でできる可能性のあるものはトライするというポリシーがあり、ラパロ率はかなり高いです。虫垂炎はほぼ全例、ヘルニアも多くはラパロで施行しています。

悪性疾患は依然と比べると減りましたが、これも教室の応援を借りながら、積極的にラパロでやっています。腸閉塞やPEG困難例にも積極的に腹腔鏡を活用していますので若き外科医にはやりがいがあると思います。

虫垂炎・ヘルニアとともに外科の基本である肛門疾患は関連病院の中では多く手掛けています。痔核に対してはALTAと切除術を組み合わせた手術法を中心に行っています。そのほか外科診療所的な粉瘤や陥入爪、痔核血栓除去術など外来手術も多く扱っています。

今後も地域医療に貢献すべく日々の診療を続けていくつもりです。

(文責：上井 直樹)

日鋼記念病院



写真は、後列左より柳谷院長、勝木理事長、益子。前列左より本間、木井、研修医笠原、喜納です。高田は不在でした。

当院は西胆振医療圏で唯一の「地域がん診療連携拠点病院」としてがんの早期発見・早期治療を、「地域周産期母子医療センター」として母体と新生児の安全と、「災害拠点病院」として地域の安全に向け、西胆振地域の急性期医療の一翼を担っております。

病院全体の病床数は479床で、このうち外科の病床数はとくに決まっております。

2014年の手術件数は550件で、消化器・呼吸器・乳腺などの手術に加え、透析患者さんのブラッドアクセスの手術もおこなっております。

外科は勝木良雄理事長（S48卒）のもと、益子博幸（S61卒）、高田譲二（S63卒）、喜納政哉（H10卒）、本間友樹（H19卒）、木井修平（H22卒）が勤務しております。また月に2回天使病院の山本浩史先生（S61卒）が小児外科の外来・手術の応援に来ていただいております。

当院には歯科口腔外科医が5名おり、周術期や化学療法・放射線療法時の口腔ケアを実施することで、合併症の予防に役立っております。どの科も医師不足ですが、初期臨床研修医の教育に力をいれており、2016年度は6名フルマッチングしました。研修医も貴重な戦力となっております。

病院の理念である「医療人として組織として社会に貢献する」を胸に、よりよい医療を提供したいと考えております。（文責：益子 博幸）

医療法人はまなす



- ・篠路はまなすクリニック（札幌市北区）：院長 工藤岳秋（74期）、会長 工藤謙三（46期）、栗林 弘（45期）
- ・はまなす医院（石狩市花畔）：院長 工藤 立史（北大第2内科同門）

透析サテライトだった篠路はまなすクリニックを増築し、平成27年4月から有床診療所として入院・手術・一般外来を行っています。内視鏡・マルチスライスCTなどの検査機器と腹腔鏡手術の設備を整え、消化器外科にも積極的に取り組んでいます。平成27年の全麻手術件数（12月12日現在）は70件、そのうち消化器関連は胃切除、結腸切除、胆嚢摘出、虫垂切除、鼠径ヘルニアなど25件でした。札幌市中心部から離れており入院可能な病院が周辺に少ない地域です。これからもニーズに応えていきたいと思っております。血液透析患者は150名を数え、シャント関連手術も増加しています。

はまなす医院は無床診療所となりましたが、こちらも50名超の血液透析患者の加療とともに一般外来を行っています。透析室は現在26床ですが、増築・増床を計画しています。

両院とも第一外科医局から出張医を派遣していただいております。今後とも医局、同門の皆様の御指導を賜れば幸いです。

（文責：工藤 岳秋）

北農会恵み野病院



恵み野病院の外科スタッフは中村貴久副院長、津田一郎、林俊治、森田恒彦の4名で全員外科一筋のベテランで、あぶらがのりきっています。症例数ですが、恵庭市の基幹病院として信頼を得て年間約350の全身麻酔手術を行っています。恵み野は札幌のベッドタウンとして比較的若い町として発展してきましたが、高齢化の影響で年々患者の年齢は上がってきています。80歳を越える患者に対し、如何に根治的かつ安全な手術を行うかが、喫緊の問題だとよく感じます。『患者さんに優しい手術』として始まった胃大腸外科に対する腹腔鏡手術も、ほぼ安定期を迎えています。あまり知られていませんが、恵み野のユニークなところは学会活動です。過去5年に学会発表26回、刊行論文12編を数えます。その業績により受験資格を得て、外科学会指導医2名、消化器外科専門医3名、消化器病専門医1名、肝臓病専門医1名、透析学会指導医1名が生まれました。忙しさの合間に学会準備をする諸先生のがんばりに資するものでしょうが、病院側からも学会活動や専門医習得に対し厚い補助があることも一助となっています。いかがでしょうか？興味を持った先生はぜひ恵み野病院へ来てください。お待ちしております。

（文責：津田 一郎）

北海道医療センター



北海道医療センターは27診療科、病床数500床で、一般410（救急30）、精神40、結核50床で構成されています。3次救急の急性期から神経難病、結核などの慢性期疾患まで幅広く対応し、さらに精神科身体合併疾患など特殊な診療も担当しています。現在外科・呼吸器外科は北大第1外科と北大循環器・呼吸器外科と共に診療しております。外科の病床数は35床で、3階の外科・腎臓病センターにあります。平成26年の手術件数は506（全麻421）件でした。急性疾患が多く、臨時手術は全体の約20%を占めております。急性虫垂炎、鼠径ヘルニア、胆石、急性腹症などの症例が多いのが特徴です。さらに、医局からの診療応援もあり、内視鏡下手術は次第に向上し、手術数全体の中でその占める割合も増加してきております。

また、当院は平成27年3月27日付をもちまして北海道がん診療連携指定病院に指定されました。今後は一層がん診療にも力を入れていきます。

一方、国立病院機構八雲病院（筋ジストロフィー、重度心身障害者）の機能移転が決まり、数年後は当院と函館病院に患者が移ることになりました。北海道医療センターは今後も変革を続けていく予定です。

（文責：伊藤 美夫）

北海道がんセンター呼吸器外科



左から水上 泰、安達大史、近藤啓史、有倉 潤、上田宣仁

当院は明治29年12月第七師団の病院として開設されています（札幌衛戍病院→札幌陸軍病院）。終戦時には350床の病院でした。終戦後引き続き厚生省の管轄となり昭和20年12月国立札幌病院（450床）の名称になります。また昭和43年に道より「北海道地方がんセンター」の附設（550床）を依頼されました。ご存じのとおり平成16年に独法化して北海道がんセンターとなりました。

さて当科は外科の中にありましたが、平成10年4月近藤が呼吸器外科医長を拝命し、それ以来単科として活動しています。肺癌、縦隔腫瘍、小児疾患の胸腔鏡手術を開発したことから初年度120例位の症例数から現在は全麻で250例を超す症例を手術しています。平成27年度から専門医の安達大史医長、有倉 潤医長も第1外科同門となりました。他に医員2名在籍し、5名で診療しています。基本は2人で手術をしており、色々な器具とテクニックを開発してきました。20の地域のがん拠点病院では約半数が第1外科のジッツですが、専門医がいないところが大多数を占めます。乳腺とともに改善していかないと全国はもちろん地域的にも遅れていくと考えています。是非呼吸器外科もやりたい方は教授に言ってください。最後に現在同地に新病院建替を予定していて、今年度は基本設計を行っています。5年後位には新病院が完成する予定です。

（文責：近藤 啓史）

北海道がんセンター消化器外科



私共の施設は、2000年代初頭に国立札幌病院から北海道がんセンターへ改称し、現在へ至っています。乳腺外科と呼吸器外科が独立していますので、純粋に消化器外科の悪性腫瘍手術中心の診療を行っています。ほとんどが消化器のmajor手術です。近隣施設には、急性腹症・虫垂炎・胆石、等もいつでもwelcomeですよ、と事あるごとにアピールしているのですが、がん以外の疾患の割合はかなり低くなっています。

本業の癌手術は年間で、胃50-70件、大腸癌80-100件、肝切除（原発＋転移）20-30件、胆膵10-20件、食道癌数件程度で微増の状況です。当科の特徴として、他科（婦人科、泌尿器科、等）との共同拡大手術、癌性イレウス等に対する症状緩和手術がそれぞれ年間20-30件程度あるのが特徴です。近隣に大病院が多い激戦区のなかでも少しずつ手術件数を増やしています。

手術は少ない出血量で、郭清のきちんとした質の高い手術を実践するよう努めています。腹腔鏡手術は結腸癌はbulkyなもの以外はほぼ全例に適応にしています。胃癌については原則早期胃癌から、進行癌へ適応を広げつつあります。

現在のトピックスは、2015年11月からダビンチシステムを使用した胃癌に対するロボット支援手術を開始しました。病院から研究費を出していただいて臨床研究として行っています。日常診療になるにはまだ多くのステップがあると思いますが、これからも慎重にこの新しい手術に取り組んでいきたいと思っています。

研究・学術活動も積極的に行っており、2015年は3編の英文論文が当科からacceptされました。以下のような項目については継続的に全国学会に発信しており、シンポジウム等上級演題・国際学会での発表機会も多くなっています。

- ・大腸癌集学的治療（Conversion肝転移切除、肝肺転移切除、Repeat肝転移切除、等）
- ・胃癌NAC後の外科治療
- ・3D-CT画像ナビゲーションによる腹腔鏡下大腸癌手術
- ・癌性イレウス等に対する症状緩和手術

これらの学術活動を行うにはData baseの充実が不可欠であり、Data baseの整備に時間をかけています。国立札幌病院のころのパンチカードの時代からの受け継がれている自分達のデータで発表するというスタイルを大切にしています。この伝統を大切にしつつ今後とも、臨床・研究活動に精力的に取り組みたいと考えております。（文責：前田 好章）

北海道がんセンター乳腺外科



当科のスタッフは6名ですが、第一外科の同門は4名です。残りは第二外科同門医師と新潟大学からご主人の都合で2016年3月まで当科に出向されている医師の2名で、いずれも女性医師です。2015年5月に北大乳腺外科から山本真が着任し、当科から馬場基が北大乳腺外科に異動しました。

乳腺に特化して診療しており、原発乳癌手術症例を年間320症例施行しており、乳房切除術の20-30%に形成外科と合同で一次再建を施行しています。遺伝性乳癌卵巣癌症候群に対して自費診療で3例リスク低減乳房切除術を施行しました。乳腺外科病床は30床あり、全道から再発乳癌治療も依頼されています。外来は毎日行っており、一日平均90名の患者を診ています。また、治験や医師主導臨床試験に関しては日本有数の症例登録を行っています。

癌と確定診断されていない検診等で精査となった方も受診可能です。患者にメリットのある先進的な治療選択を提示できますので、乳腺に関わる患者であれば、お気軽にご相談・ご紹介下さい。

この写真は秋に医師、看護師、CRCなどチームのメンバーと家族で定山溪に一泊旅行をした時の写真です。子供と一緒にみんなでゲームやカラオケなどをして楽しみました。（文責：高橋 将人）

北海道対がん協会



北海道対がん協会札幌検診センター外科（乳がん検診部門）の固定医師は1名、病床も手術もありませんので、簡単に乳がん検診の現況を報告させていただきます。

札幌検診センターでの検診数は年間約3万例、道内各地で行われるバス検診は約2万5千例です。センターは午前2診、午後1診で行っており、北大第一外科、乳腺外科、関連病院の先生方にご協力をいただいています。それに加え、バス検診においては札幌医大、旭川医大等の先生方にもお手伝いをいただいています。

2016年度から厚生労働省の指針がかわり、視触診がなくなる方向のようです。未だ詳細は不明ですが、バス検診の負担がかなり軽減されると予想されます。

（文責：池田由加利）

森町国民健康保険病院



スタッフ数：2.4名（同年齢の嘱託医師2名と週1日の医師2名）

病床数：60床のうち外科は24床

年間手術件数：全身麻酔0

腰椎麻酔0

局所麻酔150件

病院の特色：

平成28年1月1日の森町の人口は、16,592人です。そのうち65歳以上の方は5,616人で、高齢化率は33.9%です。森町国保病院を訪れる受診者も高齢の方が中心です。

内科医2名、総合医1名、外科医2名の計5名が固定医です。その他、週2回の整形外科医、週1回の泌尿器科医、週1回の応援医師がいます。以上の陣容で、入院・外来・救急を支えています。

救急車は年間1000台で、一日平均3台です。医療機器としては、MRI・CT・一般撮影・マンモグラフィー・US・骨密度計が稼働しています。病床稼働率は72%前後で経過しています。

特に力を入れている分野：

血管疾患に興味をもっています。

胸部：解離性大動脈瘤

腹部：腹部大動脈瘤

総腸骨動脈狭窄症など

診断のついた方は函館市内の心臓血管外科の先生に紹介しています。

（文責：川崎 和雄）

編集後記

早いもので、2015年度も終わろうとしています。振り返ってみますと、本年報の準備を始めたのは2015年10月の事でした。今年の年報は、昨年より早めの発刊を目指し、準備も早めに開始致しました。大学教室員、大学院生、関連病院、留学生の先生方、秘書、実験助手、クラークの皆様に原稿の執筆をお願いさせて頂きました。日常業務で多忙中にも関わらず、皆様方のご協力により、無事3月に発刊させて頂けることを安堵しております。また、宮城久之先生、秘書の小原美都様のご尽力もあり、昨年よりも更に一歩進んだ年報に仕上げる事が出来ました。心より感謝致しております。来年度は、編集長を宮城先生にお願いすることになりますが、この年報には皆様方のご協力が不可欠です。日々お忙しいとは存じますが、来年度も読み応えのある原稿を執筆して頂けます様、宜しくお願い申し上げます。また、より魅力的な年報にするために、忌憚のないご意見を賜れば幸いです。2年間、有難うございました。

(文責：吉田 雅)



消化器外科学分野Ⅰ 教室年報2015

平成28年3月発行

発 行 北海道大学大学院医学研究科消化器外科学分野Ⅰ
TEL: 011-706-5927
FAX: 011-717-7515
ホームページ: <http://surg1-hokudai.jp/>

印 刷 北大生協 印刷・情報サービス部

